女の言いたい放題誌

WIFE

わいふNO.238.

逐次刊行物
平 4年 10月 7日
日本婦人会議 会館
調査情報センター

特集 給食体験

特別寄稿 女性はそのとき逃げられるか

特別寄稿 私のくも膜下出血体験

農文協

〒107 東京都港区赤坂7-6-1
☎03(3585)1141 ［各税込定価］
●内容案内呈！

聞き書 奈良の食事

最新刊発売中

国のまほろば、民族のふるさと・奈良
ゆかしき食と暮らしを古老から…。

●日本の食生活全集シリーズ　第47回配本！
斑鳩の里、大和高原、奈良盆地、奥宇陀、葛城山麓、吉野川流域、十津川郷…七ヶ所で聞き書描いた奈良の食。古代をうかがわせる暮らしぶりと懐かしい和食のルーツを探る。
☆毎日の朝昼晩の献立から行事食も。☆材料、作り方も写真を添えて。☆冠婚葬祭、行事他。

▲結解（けっけ）料理［東大寺］

●既刊・好評発売中　＊定価各2900円　●A5判　★カラー写真豊富

1北海道 2青森 3岩手 4宮城 5秋田 6山形 7福島 8茨城 9栃木 10群馬
11埼玉 12千葉 13東京 14神奈川 15新潟 16富山 17石川 18福井 19山梨 20長野
21岐阜 22静岡 23愛知 24三重 25滋賀 26京都 27大阪 28兵庫 30和歌山 31鳥取
32島根 33岡山 34広島 35山口 36徳島 37香川 38愛媛 39高知 40福岡 41佐賀 42
長崎 43熊本 44大分 45宮崎 46鹿児島 47沖縄

■11月48アイヌ刊行予定

★もうすぐ完結！
●シリーズ全50巻！　隔月刊予定　48アイヌ　49・50索引
●全巻でのご予約を！

……●爽やかで、味のある新刊！

もっと自由にお魚料理

池上保子著　いつもとちがう煮魚やフライ…マリネひとつ作れば味わい方は10以上も　なじみの魚34種の手軽な食べ方川　＊1350円

自然流手づくり和菓子

坂本廣子著　脂肪分少なく繊維も豊富　作ってみれば意外と簡単な、添加物も使わないヘルシー和菓子の作り方　写真も多数＊1300円

来し方ゆく末 和風たべもの事典

小野重和著　食物素材や料理の渡来、栽培の起源、普及の歴史などから、楽しい逸話やゆく末も盛り込んだ読みもの&事典　＊2200円

★「できる子」よりも「わかる子」に

学習塾のまじめな話

小宮山博仁著　＊1600円

行かせる？　行かせない？
有名塾？　小さな塾？
迷いに答える学習塾のすべて！

本来教育は、家庭と地域社会が"本家"であり、学校はそれを補うもの。その学校をさらに補うのが塾だと位置づけ、大手から地域に根ざした小規模塾まで、子どもの眼の高さで取材紹介、分析。

「賢治精神」の実践

松田甚次郎の共働村塾

安藤玉治著　宮澤賢治の教えのもと、若者たちと自治と共働の「最上共働村塾」を創り上げ、35歳で夭折した甚次郎の実像に迫る＊1600円

●からだで感じる　地球のいのち

絵とき 土と遊ぼう

松尾嘉郎・奥園壽子著　かわいいイラスト満載のドロ遊び62集。五感をいっぱい使って、さあ！ドロ遊び！生活科にも良いよ！　＊1300円

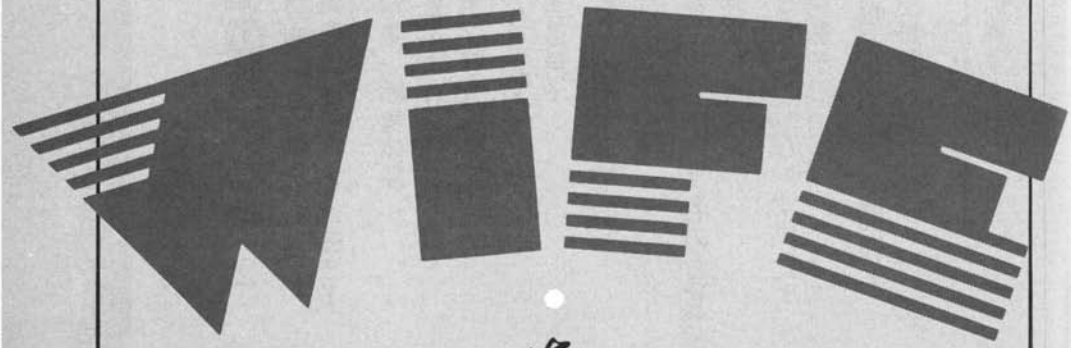
●快適ライフは、からだと地球にやさしいエコ・ライフ！

自然流「OL健康」読本

船瀬俊介著

流行・CMにとらわれず、からだの中からのフィットネス&ダイエット法を解説
［健康］便秘／冷え症／肩こり／OA機器症候群／他
［美容］肌荒れ／朝シャン／肥満／化粧品／若白髪／他
［快適ライフのヒント］など

＊1250円



あなたのフリースペースです。

●女の言いたい放題誌　わいふ

目次

隔月刊　第二三八号

4 私のしごと場 5
麦草農場・佐藤法子
写真・望月和夫　文・佐藤法子

●特集　給食体験

10 連絡帳の苦闘のあと
酒井裕子

14 個人差を認めろ！
勝浦恵美子

15 給食　昔むかし
原　眞智子

17 給食指導という名のおせっかい？
重住麻悠

20 飢えを知らない子供たち
安村豊子

21 母娘二代の給食「問題」
葉田野妙子

23 新しい時代の給食
福地園子

25 アメリカの給食体験
サマース清美

26 おいしい給食を手に入れよう
島津まさ子

30 エッセイスト・クラブ
佐藤玲子・越　久美子・山田恵子

38 サーブレシーブ
荻野菜穂子

41 波にのまれて　中松ミナ子

46 ズバリ一言
佐藤乃麻・花岡由美子・栗林　勝

52 ✾連載の22✾
わが青春の宝塚　豊城智子

■イラスト・梅村苺・奥島千恵子・カステラネンコ・小島佳子・小宅昌枝・早乙女光子
佐藤瑞江子・田沼千恵・田村幹代・鳥居禎子・西田淑子・山田京子

58 人間マンダラ　森生文乃
60 カナダの夕陽②　清水ふみ
68 マイ・ジョブ マイ・プロフェッション　和田美代子・中西景子・宮 千鶴
73 平成おったまげーション④　西田淑子
74 待合室　大野幸子
80 女性はそのとき逃げられるか　匿名
85 読んでみました　和田好子
連載⑨
86 私の愛する外国人　新井ひふみ
96 私のくも膜下出血体験　水落時子
102 ワンポイント情報　わが家の園芸　佐藤乃麻・桜井淳子・田中千恵子・神山寿子・高松恭子・上野由紀子・安藤喜代美・小幡洋子・中野正美
108 コミック●痛快！一般人⑪　栗田笑
112 情報コーナー
114 ブック情報
116 体罰　子育て会議最終回　有賀麗子・大野幸子・風間ゆり・河野道子
124 フリースペース　服部祐子・椎野久美子・大沢陽子
130 連載小説⑤ 契約結婚　山影冬彦
138 わいわいがやがや　片山寿美子・清水宏子・船矢佳子
次号投稿募集―141　投稿規定―142　編集だより―144

■表紙イラスト・小沢恵子　■レイアウト・工房はやし　AD・林　佳恵

私のしごと場

5

麦草農場 **佐藤法子** 山梨県北巨摩郡高根町村山西割2137

季節ごとの通信。それを集めて本になった「むぎくさ通信」(もう絶版になった)

収穫祭には、誰でも興味ある人は来て下さい。「出会い」を大切にしたいのです。

写真・望月和夫　文・佐藤法子

一九七八年、ここ高根町に移り住み、農業をはじめる。自分たちの食べるものを、自分たちでつくりたいと思ったから。もちろん農薬・化学肥料をつかうことなど考えたこともない。東京で、共稼ぎと専業主婦とを経験して、女が働きながら、子育てできて、自分を活かせる職業は、百姓しかないと確信し、何もしらないしろうとの強みで、今日までやってきた。現在一五〇軒ほどの消費者に、野菜や卵を届けて、何とか仕事は成り立っている。

単に買ってくれるお客ではなく、援農者として時折農作業にもかかわってくれ、私たちと同じ安全なものを食べてもらうという関係だ。

だから、わたしの仕事場は、畑であり、大地であり、地球ともいえるし、宇宙のすべてにつながっている。草とりをしながら縄文の昔に思いをはせる。大地のぬくもりが、ささくれだった心をいやしてくれる。

▲家に来て4年目。里子の加世子。
"おかあさん" を問い直す日々。

▲いつでも草とりにおわれている
毎日。「進歩がないね」と娘。
ずいぶん下むきな仕事なんだなあ
と私の実感。

▼この春"もも"から産まれた"すもも"です。体は一人前でも、かあさん山羊から離すとすごい声で泣き叫ぶ。乳からは自家用のチーズ・ヨーグルトができます。

▲梅干し　7月末土用の時、塩づけしてしそが入った梅を、三日三晩干します。干したりカメの梅酢にもどしたりします。梅の香りが庭いっぱいにひろがります。梅は干すと太陽の日ざしを吸収して、夜露のやさしさでまろやかな味になります。

▲自然塾　毎年、清里ネイチャーセンターでキャンプしながら一日農業体験に来ます。

◀田植　6月、援農にきて毎年初めて体験する人がいます。細くて小さな苗が、秋になると、重くたれさがる稲穂に育つのです。感激します。大地に感謝します。

でも、今は、地球のうなり声が聞こえる。人間をずっと守ってくれていた大地も、宇宙のすべてが叫んでいる。

東京都では毎日一五〇〇俵の米が、残飯として捨てられているという。

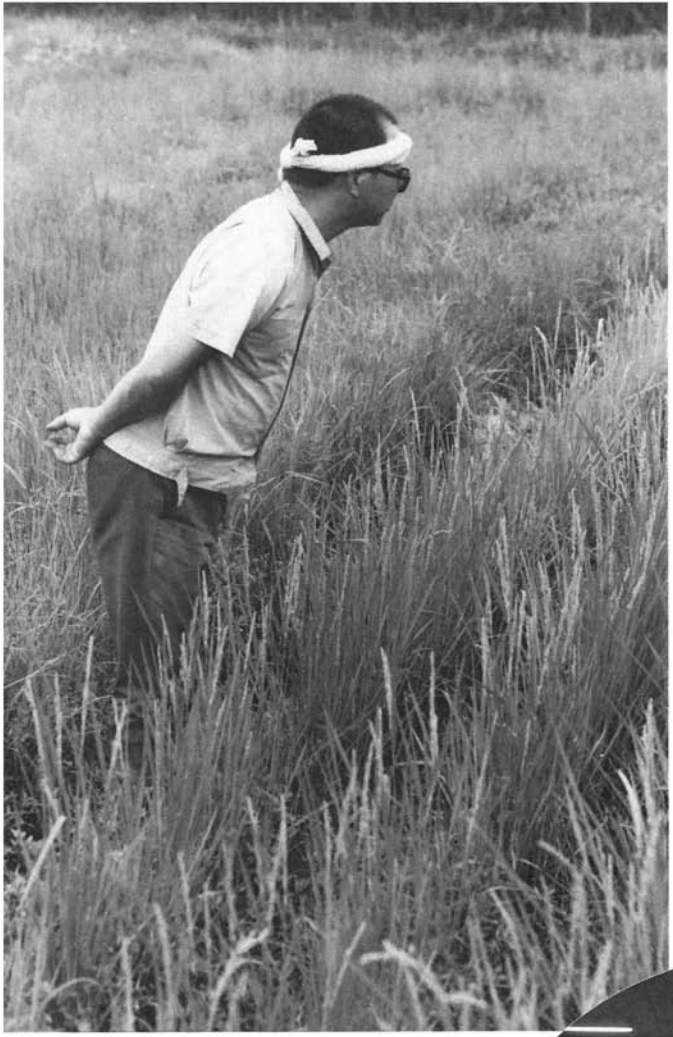
また、世界中で、四万人以上も、飢えのために死んでいる。（ユニセフ資料より）

便利なもの、合理的なもの、速いもの、簡単なもの、楽なものを人類は追求し、今に至っているのだけど、人間はあいかわらず、世界のどこかで戦争し、飢えていて、不安をかかえている。

「なぜ？」といういらだちが、今、私の心を占めている。

▲収穫祭　毎年11月の最後の日曜日にわが家の庭でします。40人くらいあつまり、もちつき、食事、講演会、それぞれ紹介しあって出会いを喜びます。誰でも歓迎。

▶むぎくさ図書館　2年前に庭にできた小さな図書館。子どもの絵本・童話・農業（環境関係）・女性学等、あわせて3000冊。



▲夫・幸男　自然農法の田(不耕起実験田)にて。わが農場の主。子どもの友だちに"おっちゃん""おやじ"と呼ばれているおっちゃん。

▲家族
長男・岳　整体師養成専門校
長女・夏来　基督教独立学園一年
次男・雄高　小学校六年
里子・加世子　小学校二年

▲基督教独立学園高校　長男が卒業、今年長女が1年生。受験教育をしないで真の生き方を求める人間教育をしようとしています。山形県小国町にある私立全寮制普通高校。

▼夜の仕事は塾の先生。学校や家庭ではみせない顔を子どもたちはみせてくれます。

子育ての目は発達の芽

親と子のこころを結ぶ心理学

中村和夫著

写真・岸本正義　最新刊　A5判・176頁　定価1500円

私たち親は時として心の余裕をなくし、子どもをつい叱ったり逆に過保護になったりと、子育てに迷うことがあります。そんな悩みに対して、この本は、子育ての大切なコツと親は子どもをどう見るのかをわかりやすく教えてくれます。

発達心理の視点から子育てのコツをやさしく教える

第1章　「しつける」子育てから見守る子育てへ
1.叱る子育て・ほめる子育て　2.ほめることが子どものヤル気を損なう場合　3.親の養育態度と子どもの自立　4.子どもの冒険を見守れる親に

第2章　子どもの世界を理解できる親へ
1.子どもと同じ目の高さに立つ　2.子どもに共感する　3.子どもの行動の発達的な意味を知る　4.子どもの性格を知る

第3章　言葉と子育て
1.言葉と感情　2.親から子への言葉かけ　3.幼児期の文字の指導をどう考えるか

第4章　協力と連帯の親育ちを
1.子どものかわいさの発見　2.子育てを語り合おう

◉萌文社発行◉ささら書房発売
〒102　東京都千代田区富士見一―五―十二　ネモトビル☎03(3221)9008

ティーンズ・ボディQ&A

体の悩みにお答えします

河野美代子著
（広島・産婦人科医）

●'89エイボン女性教育賞受賞！

ベテラン婦人科医が、他人には相談しずらい「体」や「性」の悩みに誠実に答えます。ティーンはもちろん、父母・教師にも好評。
性感／月経／避妊／人工中絶／二重まぶたの手術／毛深い／他＊四六判／282頁●1300円(税込)

★好評6刷！

子どもは告発する

渥美雅子著

●雅子の事件簿から

いじめ、体罰、家庭内暴力、リンチ、殺人、生命と宗教、女教師駆け落ち、チビッコ芸人、丸刈り訴訟、自死…

●一弁護士としてかかわった数々の事件から浮かびあがる真実は？…。2男の母としての子を想う熱い視線が、学校、管理社会を告発する。●＊四六判／258頁●1650円(税込)

"人間と性"を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

［ヒューマン・セクシュアリティ］

◉編集長◉村瀬幸浩◉
◉企画編集◉"人間と性"教育研究協議会
◉季刊　B5判・128頁◉定価1400円(税込)

8号〈新刊〉《特集》性情報・性文化の現況と「表現の自由」と

［編集長対談］ゲスト奥平康弘（国際基督教大学教授・憲法学）

［特集論文］性情報と性行動の心理……福島章
子どもの知る権利と性文化……増山均

●特集インタビュー　レディース・コミックにみる性表現…衿野未矢氏に聞く／スウェーデンにおける性表現…デューク雪子氏に聞く
●特集レポート　広告ウォッチング――意識にしのびこむ性差別…岡久美子(フリーライター)
●特集ルポ　「有害コミック」規制問題をめぐって――三井富美代＋草野いづみ(フリーライター)
●高校生の座談会(ポルノ・コミックをめぐって)　他
★その他　連載4　実践　海外レポート等誌面充実

7号　新教科書がもたらすもの――学校・家庭の性教育の新段階
6号　シルバーエイジの豊かな性と生
5号　ピル解禁を控え、いま避妊を問い直す
4号　エイズの現在と近未来

●直送定期購読者受付中●郵振・京都4-1067番
1年 5,600円　2年 11,200円(送料・税込みです)

東山書房（ひがしやま）

〒615-104　東京都中央区新川2・2・1・708　☎03(3553)8358
京都市右京区山ノ内大町5・3　☎075(841)9278

特集

給食体験

連絡帳の苦闘のあと

横浜市港北区
酒井裕子

長男が小一のとき、用事で息子の下校後一時間ほどして学校へ行くと親友のN君と学校内で会った。もう二時近かったと思う。

「どうしたの」と問うと「給食を今、食べ終わったの」という返事だった。そのときは「頑張ったんだネ」と別れた。長男は生ぬるい牛乳が飲めないぐらいでそれは先生も許してくれていたようだ。同じクラスに牛乳アレルギーという子がいてその子への配慮もあってのことと思う。ただクラス一の小柄で少食の息子には食事の量の問題があったが何とかクリアしていたようだ。

だが三年後に小学校に入学した現在高三の息子のときは給食に親子で苦労した。今も残してある連絡帳の、「食べることは生きるということです」という言葉にあるように、給食イコール生きざまというとらえ方で先生が指導をなさったからだ。

息子は赤ちゃん時代から、食欲はあるのだが偏食があり、味に敏感な子だった。にんじんやピーマンなど癖のある野菜が嫌いで、どんなに小さく切って、チャーハンなどに入れてもだめだった。口に入れたとたん「何か入ってる」と舌先で押し出す。切ったり、下ろしたりのごまかしは一切きかない。好きなものは生の鯵や鮎などの塩焼きやトマトだった。

そのかわり牛乳は好きだったし、野菜もみそ汁に入れたものは食べた。

今でも和食が好きな子で、ハンバーガーなどは付き合いで食べるという程度だ。同じ兄弟でも兄のほうはまったく逆で、ハンバーグやグラタンなど洋風のものを好む。

当時の連絡帳に、給食のことが学校生活全体に尾を引いて苦しんだ一年余りが記録として残っている。

担任は二十代の、教育に一生懸命で信念を持った若い男の先生であった。四月二十一日から給食が始まり、その日から一学期中は私と先生との間の文通のように、連絡帳でのやり取りがあった。

四月二十一日

玉子サンドが食べられず泣きながら『どうして、なんでー』とダダをこねたという始まりで、「男だからいろんな点で鍛えなければなりません。今日の給食は横で励ましていましたら最後になって泣きながら口の中に入れる頑張りを見せました。入れてもすぐに舌で出してしまい、かむ、飲むまでいかないのでしたが、その頑張りはお帰りの会のときに褒めてあげました。褒められたときのニコッとした顔、それが自分から進んでやれたときの得意顔に変わるようにビシビシ発破をかけてみます。

おうちで話を聞いてみてください。再び泣くようなら怒ってください。『食べるとは生きるということ』と諭しました。よろしければそのようにこれからおうちで教えきかせてください」というのが給食一日めの連絡帳で、その連絡帳を故意か忘れたのか息子は私に見せてなかった。

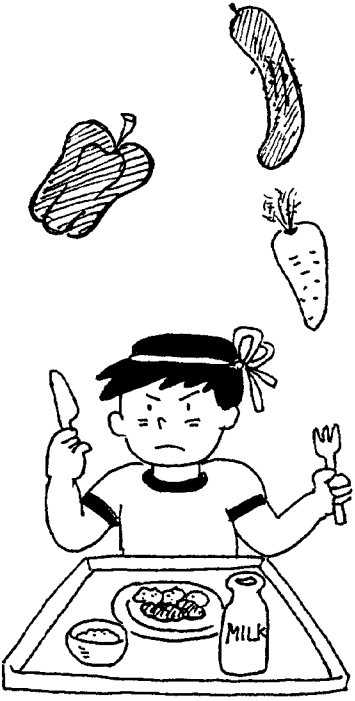
四月二十二日

昨日は連絡帳をお母様に見せてなかったですネと翌日の連絡帳にある。

たぶん甘えん坊のくせに強がりの息子だから見せたくなかったんだろう。

私の返事

給食を食べられなくて泣いたということ……いよいよきたかという感じです。前は形がはっきりしたものしか食べられず、カレー、チャーハン、ぎょうざなど、すべてだめでしたがこのところ随分食べられるようになったものの、マヨネーズ、ドレッシングなどドロリとしたものに弱いようです。ご迷惑おかけして申し訳なく思います。先日の懇談会で一年生のうちなら食べられるようになるというお話に少しほっといたしましたが、親と子で頑張らなくてはと思っています。よろしくお願いします。



四月二十三日　先生より

残念ながら今日も野菜はだめでした。配られた分を目の前で減らしてあげ、さらに時間がくるころにはきゅうり三枚だけ、食べてみるように言って励ましたのですが昨日と同じでした。ただし今日は目をつぶりめちゃくちゃに口を動かして飲みこむまでは頑張りました。今日ももどしてしまいましたが……。

自分でも褒められると思ったのでしょう、飲みこんだことを書いてくれと言ってました。給食を食べられるようになるには少しずつ食べてみようという意識が大切なのですが、それが欠けていると、ものの考え方や基本的生活感覚からたたき直す必要があります。

（中略）子供らしくかわいらしいのですがそれだけでは本人のためにならないので、あえて私も厳しく包みこむように接していきます。一年間頑張りがいのある子です。

私の返事

偏食のこと、以前から一番の悩みでしたが、学校の給食で先生やクラスのお友達にご迷惑かけるのが心苦しいです。○○にとってもつらいことだと思いますけれど、泣きごとは申しておりません。少しずつ食べてみようという気はあります。色々気になる点は多い子ですけど根は素直な性格ですのでそのつど、私どもにご指摘ください。家庭でも話し合ってみます。

四月二十四日　先生より

父上や母上のお考えご心配よく分かりました。じっくり構えて精一杯のことをやらせていただきます。もし少しでも偏食が直り、自信と自制心がついてきたら万歳!!ですネ。今日はワンタンスープ、中にはネギもにんじんももやしもあり全体にどろりとした感じ。

ところが今日はお代わりを二回もしました。周りの子もキャッキャッ喜ぶしあきれて口がふさがりませんでした。もともと食べるものだったのでしょうか。とにかく初めてでしたからうれしかった。

このようにして先生は二ページにもなる連絡を何度もくださった。子供も先生のことを嫌がりはしなかった。

でもこの間、別のものを捜していてひょっこり出てきたこの連絡帳を久しぶりに読み返して当時を思い出し私は涙がこぼれた。学校といえば子供と私にとって給食の時間だけがクローズアップされ、今日は何なのだろうと口には出せないが一喜一憂していた。

偏食のことも、私は子供のとき食べられなかったものが食べられるようになった自分を知っているので、栄養的に問題がなければそれでよいと大ざっぱに考えていた。そうは言っても何もしないでいたというのではない。減感作療法といって、アレルゲンを少しず

つ増やして注入していって喘息を起こさなくするという治療法があるが、私もほんの少しずつ食べさせて慣れさせるという方法をとっていた。表面は給食のことで神経質にしないように明るく努めていたが、内心は必死であった。給食嫌いが学校嫌いへ進展することが怖かった。

そのころまだ若かった夫も先生同様、食べさせるのに一生懸命で、嫌いなものを一番に食べなければ好きなものも食べてはいけないという方法をとっていた。そのことで夫と私はよくけんかをした。

現在息子は生野菜はバリバリ食べるが、やっぱりマヨネーズやドレッシングは食べない。今は分からないが当時は生野菜に最初からドレッシングがかかっていた。今年五十歳になった夫は、友人たちが成人病で手術を受けたりしてから考え方が随分変わり、マヨネーズやドレッシングの量を減らしたり、まったく使わないで生野菜も食べる。

だが彼も当時は、みなが食べるものを食べなさいと子供に言っていた。食べるということを栄養面だけで考えるのでなく、生きていくうえでの協調性という面からも考えなくてはいけないと言っていたのだ。友人の子も、マヨネーズなど偏食があるがそこのご主人もやはり同じことを言うと聞いた。

そうこうしているうちに、一年生が終わり二年生になるとき、今度は転任の女の先生になった。一年のときは給食の時間に二男がどれだけ食べられるか、いい意味で先生もクラスの子供たちも注目していて、食べられたらみなが褒めてくれるという具合であったが、それは先生の抑えが利いていて、いじめへと進展していなかったようだ。

二年生の四月二十日になってまた給食のことで連絡をもらった。「〇〇君が生野菜を食べないと言っている」と子供たちがからかっているという内容だった。うちの子に限らず、何人かの子についてからかったり、ばかにしたりする雰囲気がクラス中にあるので、先生も許せないとある。少し時間がかかるかもしれませんが取り組んで直していきたいとある。

五月四日に、生野菜もお代わりして食べられるようになってきた、という連絡で給食を話題にした連絡帳は終わっている。

先日も新聞の投稿欄に、兄弟二人ともが偏食で学校へ行き渋って困っているので、庄和町の学校給食廃止はうらやましいと載っていた。

給食で多少偏食が直ったことは認めるが苦手なことで注目の的になりどんなにつらかったろうという思いのほうが強い。今もカレーやドリアなど嫌いだが別にかまわないと思う。

名前は忘れたが嫌いなことは一切してはいけないと親に言われ、宿題すら君はそれが好きなのか、と親に言われるので、隠れて宿題をやっていたという著名人のエッセイを読んだことがあるが、「嫌いなものは食べなくてよい」とはとても言えない学校給食だった。

息子はドレッシングとマヨネーズを使った料理がどうしても食べられない

だけで、あとは嫌いなものも入学時から食べていたのだと思う。もう少し私も先生も冷静になってドレッシングとマヨネーズの料理をどうするかと考えれば三者とも楽になれたのにと、いま後悔している。

給食がなければ弁当を作れない家庭の子供たちが困るのはよく分かるが、給食があることでアレルギーの子とか、偏食の子も苦労している。

私個人の考えでは食べることは家庭の問題だと思うので給食廃止に賛成である。

個人差を認めろ！

勝浦恵美子

昭和三十年代に東京の中心部の公立小学校に通っていた私は、小さくて、体も弱く、考えられないほど食の細い子だった。ほんの少し食べただけでおなかが一杯になるのに、ドラムカンに入ってアメリカから運ばれてきた脱脂粉乳（冷めると飲めたものではなかった）や、大きなコッペパン、まずいマーガリン、脂身ばっかり入った豚汁などの給食を残さず食べろと強要されて、毎日が拷問みたいだった。給食の時間が終わっても、時には五時間めが始まっても、まだ食べ終わらないため、私とあと何人か、保健室で残りを食べるよう強いられたこともあった。学年が上がって悪知恵がついてからは、毎日二枚の食パンのうち一枚を、こっそりフキンに包んで持ち帰っていた。ある日、とうとう級友に告げ口されて、昼休みの校庭掃除から教室に呼び返され担任にこってり搾られてしまった。

こういう、よく登校拒否を起こさなかったと自分でも思うような体験があるので、私は給食が少しでも子供たちに苦痛を与える場合は、断固として学校に抗議する。全校生徒どころか、市や町の小学生全員が同じメニューを食べる（そういえば、全国一斉の「カレーの日」を作るという愚劣な提案は実行に移されたのだろうか？）という不気味さには、まあ目をつぶってもいい。夫に言わせると、こういう給食のあり方が、外国で群れを作って醜態をさらす日本人を育てるのだということだが、私はそこまで手厳しく言うつもりはない。ただ、食欲という、極めてプライベートな、個人差のあるものを無視して、子

供たちに同じ量を食べることを強いるという暴挙だけは許せないだけだ。

恐ろしいのは、「全部食べなさい」と強制する先生が、子供のことを思えばこそなのだと、心から信じている点である。生徒の健康のため、わがままを直すため、食べ物に恵まれていることに感謝する心を養うため……。子供のためを思って、子供に苦痛を与える。これでは、あのヨットスクールと似たようなものではないか。ことは給食に限らない。「子供のため」という大義名分で許されている教師や親や大人の横暴さを、私たちは時に反省してみなくてはいけないのだと思う。

給食 昔むかし

横浜市泉区
原 眞智子（56歳）

思い出の中の給食

一九四三年、国民学校二年のときか、またはその翌年のこと。渋谷区の本町国民学校で給食があった。

学校給食は戦後に始まるとされているので、何度も思い返してみた。周りの校舎や一緒にいた友人などの記憶からこれは戦争中のことになる。当時の小使室のような場所でカッポウ着姿の母親たちが大なべをかき回していた光景も覚えがある。もしかしたら短期間か週に一度程度だったかもしれない。何しろ、コッペパンと煮豆以外の献立の記憶がないのだ。パンはみそを練りこんで作ってあり、口に含むとみその味と香りがした。豆は大豆でしょう油で煮たもの。

当時の大人で確認できる人がいないので、私の記憶だけで記しておく。

次は疎開から戻ってきてから。一九四五年の暮れか次の年の始めごろのこと。本町小学校の校舎は空襲で全焼してしまい、学校ごと隣の幡代小学校に間借りしていた。

私はここでまさに「ララ物資」の給食に出会った。脱脂粉乳を湯で溶いたもの、それに缶詰の赤カブだった。慣れない味に当惑したものの口に入るなら何でもの時代、喜んで食べた者が大部分だったが、級友の中にはどうしても食べられないでカブを残す者もあった。薄甘いような甘くないような、初めて経験する食品だった。

職員の一人として

大人になってから十二年間、私は学校給食を食べている。一九五九年から七一年まで大田区内の小学校に事務職員として働いているときのことだ。

児童としてでなく、直接指導に当たる教員としてでもなく、私はいわば社員食堂として給食を利用させてもらったことになる。

一言で言えば有難いものだった。限られた費用（給食費は払っていた。教員も用務員なども同じ）で温かいバランスのよい食事を得ることができたのは給食のおかげである。

この間、私は結婚と二回の出産を経て、乳児保育園に合計六年通ったり、後半は通勤時間が片道一時間半になったり、と時間的余裕がなかった。また台所は夫の母が掌握していて、食事の支度は一切やっており、私はいわば助手の域に止まっていたので、自分の弁当も作りにくかったのだ。だから給食さまさまで、好き嫌いもない私は毎日楽しみに食べていた。

当時はご飯給食はなく、パンとおでん、パンと焼きそばという献立もあったが、シチューやけんちん汁など色々なものの入る汁物、煮物はおいしかった。揚げ物も鯨の竜田揚げなどで、トンカツといえば学期末、給食費の残りをにらんでのごちそうだった。

ちなみに、その学校は児童数七百人台から千人くらい、教員三十余人、給食調理員五人（区費で雇用されていた）。栄養士はいなくて、給食の献立作成は家庭科教諭が中心に行ない、材料発注は主として養護教諭がやっていたと記憶する。この十余年の間に牛乳は脱脂粉乳を溶いたもの→瓶入り生牛乳→紙パック入り牛乳と変わった。

学級を担任している教員たちには必ずしも給食は歓迎されていたわけではない。昼休みが休めない。配ぜんが大変だ。給食費を集めるのが何とかならないか。そんな言葉を絶えず聞いていた。

私は、専科教員や校長たちと職員室で出来立てを食べるだけだったから給食の味も違ったかもしれない。

現在の給食について私は判断する経験も材料も持たない。ここに過去の経験を列記して、それぞれに存在理由はあったのだと思うだけである。

給食指導という名のおせっかい？

神戸市西区
重住麻悠（35歳）

学校というところは、本来勉強を教えるところであった。ところが今は、生活指導を筆頭に様々な荷物を抱え込み、動きがとれなくなってきている。給食指導も、その荷物の一つであるように思う。

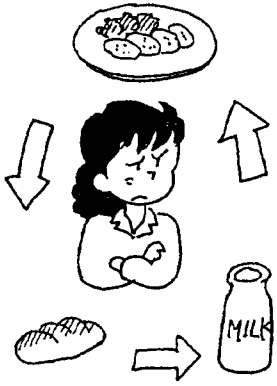
（たかが給食、されど給食）

私自身は小学生のころ、給食室の横を通ったときにあの独特のにおいを感じるだけで、吐き気を催すほど給食嫌いだった。だから小学校に就職するにあたって、幾ら味や内容が向上したとはいえ、「給食」は気がかりなことの一つであった。

教師になって数日たったある日のこと。職員会議で、栄養士から「給食指導」の提案があった。こまごまとした説明の中で、奇妙な印象を受けたものの一つに「三角食べ」という言葉があった。これは、給食ナフキンの上にパン、おかず、牛乳の三品を正三角形の頂点になるように置き、その三点を結ぶように交互に食べようというのである。そのほか、牛乳を一口飲んでから食事を始めようだとか、もうまったくおせっかいとしか思えないようなことが延々と述べられた。それを聞いてうんざりしていた私にとって、教頭先生の次の発言は救いの言葉となった。

「要するにおかずは残さず食べる。少食の子供はパンを残してもよい。それだけのことです」彼は実にあっさりと言い放ったのである。

ところが実際に給食が始まってみると、低学年だったせいか、そう簡単なものでもなかった。まず、当番の子供たちがエプロンと帽子を身につけ、（ここでかなりてこずる子もいる）給食室から教室まで食缶を運んで（時には転んで、おかずを廊下にこぼしたりパンを何個か落としたりすることもある）一人一人に配ぜんする。ここまでで二十分はかかる。その間ほかの子供たちは、手を洗い、静かに着席してくれているのが一番ありがたいのだが、これがなかなか難しい。



中には「学級文庫の本を読みたい」だとか「この時間だと運動場が空いているから、鉄棒で逆上がりの練習をしたい」だとか、何とかこの時間を有効に

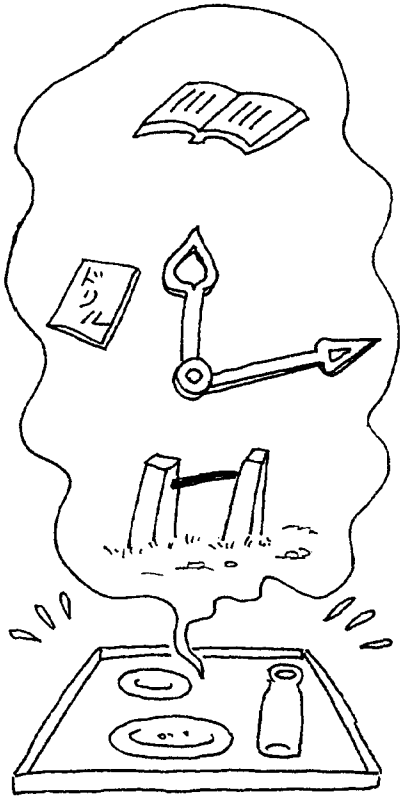
使おうと、様々な提案をしてくる子供もいる（こそこそと宿題のドリルに手をつけるのもいた）。

ところが「本は、汚れているので食事前には触らせないほうがいい」という忠告が耳に入ってくるし、給食時間に運動場に出すとほかのクラスの子供もまねをしたがる。

結局「食べる直前に手を洗う」という条件付きで本は読んでもよいことにした。

一応配ぜんが完成したところで、献立の確認をする。これをおろそかにすると、食べ始めてから、「僕のおかずがないよ」だとか「デザートが付いてなかった」などと叫ぶ者が出てきて、再び給食室や近隣のクラスを走り回って、余っているのをいただいてこなくてはならない羽目になる。

いかにおかずを残さず、きれいに配り切るか、ということも慣れるまでは随分気を遣った。あまりたびたび、たくさんおかずを残したまま食缶を返却していると、「あの学級はどうなっているのだろう」と調理師たちから担任が非難されることになる。中年以上の男の教師にこのタイプが多い。



早すぎる子、遅すぎる子

やっとのことで食べ始めるが、静かなのは五分足らずの間だけ。「小さな声で話しながら楽しく食べましょう」などというのは大人の理想である。おしゃべりから言い争いが発生したり、ふざけあいに発展したりするのが子供の集団の習性なのだ。

食べるのが遅い子供は、時間がくれば打ち切って、残りは持ち帰らせばいい。それより困るのは、食べ終わるのが早すぎる子供たちなのだった。彼らはたいていが活動的な気質であり、ほかの子供たちが食べ終わるまで、静かに座って何かをして（本を読んだり、自由帳に好きなことをかいたり）時間をつぶすということが苦手である。さすがに暴れることはしないが、それでも、教室の中は次第に騒然としてくる。

給食終了三分前ぐらいになると、ほ

とんどの子供は暇を持て余し、その騒ぎにうずもれるように数人の子供が悠然と食事をしているという最悪の光景となってくる。

ちょうどそのころ、各教室を見て回る校長がいた。何のことはない。担任の指導力を評価して見回っているのだ。「給食の様子を見れば、その担任の学級経営の力が分かる」とまで豪語した、まるで管理職気取りの栄養士もいた。たかが給食、されど給食である。

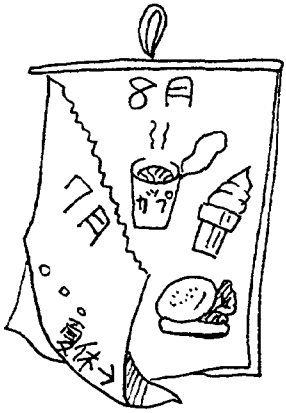
母親の中には「箸の持ち方を直してやってほしい」だとか、「生野菜を食べられるように励ましてやってほしい」などと厚かましい要望を出してくる人もいる。

栄養士にうるさく言われ、調理師さんたちに気を遣い、（ちなみに調理師と栄養士はたいてい仲が悪いことが多い）管理職である校長に評価されながらの給食指導とは、学級担任にとってはまったくお荷物なのである。

授業をしているときの充実感とは、まるで違う。なぜ、こんなことでエネルギーを消費しなければならないのだろう。

（やはり給食は必要だ！）

しかし、私は、給食廃止には反対する。なぜなら、毎年夏休みの終わりごろになると、明らかに栄養失調、もしくは、栄養のひどい偏りが原因と思われる無気力で活気のない、顔色の悪い子供がどのクラスにも数人いるからである。不思議なことに、給食が始まって数日たつと、彼らはみるみる元気になっていく。朝は喫茶店のモーニング、昼はカップラーメン、夜はほか弁では、育ち盛りの子供が体調を崩して当然であろう。給食がなくなったら彼らはどうなるのか、考えただけでもゾッとする。



そういう私も、妊娠中は給食の有難さを実感した。もともと、私は牛乳があまり好きではなく、給食のときだけ仕方なく飲んでいる、という状態だった。夏休みに入り、自分で勝手に昼食を取るようになって二週間ほどたつと、何と、歯ぐきから出血しだしたのである。完全にカルシウム不足であった。

今は退職して、自分と二人の娘のために毎日昼食を作らなくてはいけなくなったのだが、給食ほどの品数を毎日そろえるのは不可能だな、とつくづく思う。

給食があったほうがいいといっても、今のままの形態ではやはり問題は多い。

理想としては、まず食堂がほしい。教室で食べようとするから、煩わしいことが多いのだ。児童数が減って、空き教室が出ている学校も多いのだから、それを改造すれば何とか確保できないだろうか。

「管理された給食」から、「楽しい昼食」に変身してくれるのはいつのことであろうか。

飢えを知らない子供たち

東京都北区
安村豊子（28歳）

四つ年上の夫と給食体験を話すと面白い。互いのそれが、わずか四年でもまったく違っているからだ。夫は完全給食になったのは小学校高学年からで、それまでは弁当を持っていったという。まずさがうわさに名高い、脱脂粉乳も飲んでいたという。

私は小学校入学時から完全給食で、ずっと牛乳である。もっともこれは、夫が生まれ育ったのが沖縄で、私は東京という違いにも起因しているのだろうが。

同じように、人が集まったときにも給食の話題で盛り上がることがある。例えば昭和三十九年生まれ、東京育ちの私の給食体験では『先割れスプーン』『揚げパン』『マーガリン』などがキーワードになるのだが、それらに対し、年代や育った地によって、

「知ってる！」

「えーっ、違う。うちのほうはねぇ」

「そう、それ食べたよねぇ」

などと反応が様々で、よかれあしかれそれぞれの年代に給食が思い出を残していることが分かるのである。

こんな私が、埼玉県庄和町の『給食騒動』に感じるのは、肝心の『子供の声』が聞こえてこないということだ。一度子供に聞いてみるといい。「給食とお弁当、どっちがいい？」大多数の子供は「どちらでもいい」と言うだろう。スナック菓子でもいい、というくらいの認識ではないだろうか。

親側にしても「子供のため」を考えて反対しているのではないように思える。

もしも給食が廃止になったなら、多少の勇気がいると思うけど「うちはうち、よそはよそ」と割り切って、質素なおかずでも、心を込めた弁当ならよし、それができなければ、子供にお金を握らせてもよいではありませんか（かえって喜ぶかも）。多少バランスが偏ったってそれで死ぬわけじゃない、朝と夜でバランスをとればいいし、どの道今の時代に日本で飢え死にするなんてことはないのだから。

母娘二代の給食「問題」

埼玉県所沢市
葉田野妙子（42歳）

脱脂粉乳の世代

私は「給食」と聞いて「脱脂粉乳」を連想する世代の一人である。昭和三十一年に入学した小学校は大分県郡部の町立小学校で、給食が実施されていた。コッペパンと脱脂粉乳のほかに副菜があったかどうか覚えていない。ほどなく、転居に伴い、県内のもう少し街中の市立小学校へ転校した。そこでは給食はなく、私の弁当箱には好物の巻きずしが詰められていた。

だが四年生のとき、調理室が建てられ給食が始まった。脱脂粉乳とパン薄切り六枚、それにおかずというセット。アルマイトの食器だった。私にとって給食は苦行以外の何ものでもなかった。平気な子、まずいと言いつつも食べる子がほとんどなのに、私はどうしても食べられなかった。ミルクもパンも異様な味。おかずも……何しろまずかった。

味覚は度外視されていた。八宝菜、けんちん汁、豚汁、カレー汁、すき焼き風煮などともっともらしい名前がついていても、中身はどれと判別できなかった。正体不明のごった煮である。脂身がぶるぶるして気味悪い肉片と、原形をとどめない野菜類、得体の知れないどろどろしたものが臭い汁の中につかっていた。

給食の前にそっと教室を抜け出し、一人校庭で遊んでいたこともある。嫌なものを食べるより空腹感に耐えるほうがましだった。

どの担任教師も食べない私を問題視し、甘やかされたわがままな子を指導し矯正しようと躍起になった。食べるまで席を立たせてもらえず、昼休み中、給食とにらめっこ。とうとう五時間めのチャイムが鳴って先生が根負けすることもあり、あるいはミルクだけ、パンだけと条件を甘くして関門通過ということもあった。熱心な教師ほど、給食指導も熱心だった。

食べずに通した三年間

ほかの点では「よい子」で通っていたが、「給食を食べない子」というレッテルは明らかにマイナスイメージとし

て受け取られていたようだ。しかし、そのことで特にいじめられもせず、昼は憂うつな時間ではあったが、昼食抜きの生活をしていると家で親に訴えるでもなく、毎日食べ残しのパンを持ち帰ると、祖母はもったいないと言ってパン粉にしていたのだから、親もいいかげんなものだった。

育ち盛りの子供が一日二食で三年間過ごすとどういうことになるか。もともと小柄だった私の体は一年に三〜四センチしか伸びず、成長期を迎えて伸びていく友達との差は開く一方だった。六年生では仲良しの子と二十センチも差があり、腕を組むと親子みたいと笑われた。

身長百三十三センチ、体重二十七キロというミニサイズで中学生に。セーラー服は注文サイズがなく、母の特製。ハンガーにかかっているのを見て我ながら小さいなあと思ったものだ。

その後、中学、高校で何とか追いついたものの、三歳と六歳下の妹たちは二人とも私より六センチばかり背が高い。本来なら私ももっと伸びたのではないか。成長期の栄養不足のせいだ。ああ、あの給食さえなかったら……祖母の作ってくれるお弁当を食べていたら……と何度口惜しく思ったことか。

念のため言っておくが、その後大人になるまでに、私はほとんど好き嫌いのない、おいしいもの大好きな食いしん坊になっている。

〈アトピーの子と給食と〉

さて、ここでもっとしんどい事態に立ち入らねばならない。

現在中一の二女が生まれたとき、我が家は安全食品に守られているはずだった。妊娠中、私は無農薬野菜、健康に育った牛や豚や鶏の肉、卵、牛乳を食べていたので、この子はさぞや健康体に育つだろうと思いきや、実は今もって完治しない重病のアトピーっ子だったのである。付け加えるなら、十カ月まで母乳を出し、粉ミルクは与えていない。何とも皮肉な話ではないか。

生後十日目ころから額にブツブツ出始めた湿疹が半年後に全身に及び、以来あちこちの病院、開業医、小児科、数知れない皮膚科、鍼灸、漢方薬、そしてアレルギー科とめぐり歩いた十二年間をここで詳しく述べる気はない。給食とのかかわりで言えば、アレルギー科の医師の指示で食物除去法を実行するために、小学校入学時から弁当持参することになった。弁当といっても食べられるものは限られるので通常の弁当ではない。それほどアレルゲン食品が多かった。

この医者はこれはダメ、あれはダメ

と言うばかりで、具体的、積極的な指導を何一つしてくれず、そうめんばかり食べてやせ細った子とか、じゃがいもだけを食べてる子とかのうわさを聞いて不信感を持ち、数カ月でやめてしまった。

その後出会った別のアレルギー科では懇切丁寧な説明と指導がなされ、検査の結果、牛乳、卵、大豆の三大アレルゲンを除く療法を行なうことにして、またもや弁当。四年生から卒業まで三年間続けた。この間、一カ月ほどの入院二回。一時は気管支喘息も重なって、私の三十代はこの子の病気とともに明け暮れた感がある。五年生になると、数年来苦しんだ喘息の発作も遠のき、あれほどしつこかった湿疹も軽快して表情も明るくなった。

中学生になった彼女はどうしてもみなと一緒に給食が食べたいと言う。彼女には給食に対する特別な思い入れがあるのだ。毎日、献立表をながめて、大丈夫かなという不安の中にも期待が膨らんでいるのが分かる。しかしもういいだろうという推測は甘かったようだ。四月以来、娘の症状は確実にぶり返している。「給食やめる?」と聞くと、「うう、まだ食べてみたいものがあるの」と言いつつ一学期が終わった。私は二学期から弁当を持たせるつもりでいる。

新しい時代の給食

東京都世田谷区
福地園子（36歳）

（おいしい給食！）

息子の通う区立小学校では、単独自校方式の給食である。四人の調理師と栄養士の計五人の方々が三百六十余名の昼食を支えている。

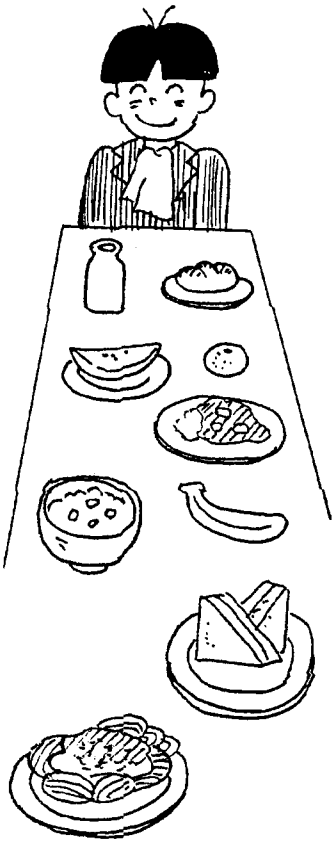
そのメニューはというと私の子供のころとは大違い。

あのおぞましい「ミルク」は姿を消し、牛乳に変わった。おかずはグチャ、ベチョが一盛りということはなく、基本的には主菜と副菜がついている。主食もコッペパンオンリーではなく、週

五日のうち米飯二回、各種パン二回、めん類一回といった調子でバランスがとれている。

栄養面の配慮はもちろん、子供たちが喜んで食べそうなメニューである。スパゲッティミートソースにフレンチサラダ、三色サンドに野菜クリームスープ。はたまた、ひじきご飯に野菜と鶏肉のうま煮といった渋いものまである。

例えば魚のフライを主菜とする。私の場合、魚のフライはそのまま大威張りでお皿に乗る。息子の給食の場合、これが野菜のあんかけになったり、また洋風の何とかソースがかかって出てくるわけである。



さらにほとんど毎日「デザート」までついてくる。頭が下がる。

初めて給食を食べた日から「給食は最高」、などと言っている息子の気持ちもうなずけるのだ。

新しい給食の意義

思えば私が小学校のころ、おかずがまずいのミルクが臭いのと不満だったのは、そのころほんとうにおなかをすかせていた子供は、もうほとんどいなかったからだ。

今さら「学校給食の役割は終わりました」チャンチャン、ではあまりに短絡すぎないだろうか。

時代に即した給食の意義があるはずだ。今はまさに新しい時代の流れになったそのときだ。

女性の社会進出、核家族化の中で主婦の仕事の細分、多様化。仕事を持ち、家事育児をこなし、地域活動に参加する。

給食があるからその分少し楽できる、助かる、と思っている母親は多くいるはずだ。

親が子供を養育する年月のうちの数年間、しかも週五日の昼食を学校給食にゆだねることが、「本来家庭で行なわれるべき食習慣の確立」や「母親として当然の義務」を放棄することになるのだろうか。

家庭や親は随分と見くびられたものだ。

子供が学校で過ごす時間帯の食事を学校側に任せる。それで母親もほんの少し楽をする。ちっとも悪いことはないじゃないの。

「だから近ごろの母親はダメだ。子供の弁当ぐらい作ってやれ。それが母親の

愛情というものだ」という声がすぐに返ってくる。それは「女は家にいて、ひたすら夫と子供のために献身しろ」と言っているように聞こえる。

それにお弁当を手作りすることで子供に愛情が与えられるならば、何と愛情とは表面的、即物的なものだろう。

まあ、手作り弁当も愛情表現の一つ、という意味合いで言われていることは私だって分かってはいる。が、実際にお弁当一つ作ったことのないような男性側から言われると、つい感情的になるというものだ。

これから給食はどうなっていくのか。栄養士や調理師の人員の確保とその経費を含めた予算の問題。

低学年から高学年までの画一的なメニュー。

アレルギーの子供への配慮。

合成洗剤や添加物の使用。

様々な問題を抱えていることは事実だ。しかし、その問題解決を一つ一つ図らないまま、行政の都合で一方的に廃止だのと決められたり、母親の責任放棄だのと言われてはたまらない、と私は思うのだ。

アメリカの給食体験

アメリカオクラホマ州
サマース清美

引っ越しをして、子供が五年生のときからアメリカの学校へ行くようになった。

日本にいるときは給食が嫌であんなに泣いたのも忘れたように、学校のランチは「日本のほうがずーっとおいしいよ」と言う。

でもほとんど毎日お弁当を持って行ったのは、待たずに食べられるという理由のほうが大きかった。

低学年から順に、時間をずらしてカ

フェテリアへ行くのだが、最高学年である五年生が行くころには廊下のほうまで列ができている。やっと食事を受け取り一ドル払うときには、ほとんど時間がなくなっており、座るそばからカフェテリアのおばさんに「ハリー！ガールス、ハリーアップ！」とせかされるのだそうだ。たぶん時間どおりに仕事を終えたいのだろう。

時間になると、手をつけていないカートン入りの牛乳まで捨てさせられるのにも、抵抗があるようだった。

食べ物は大切にするべきだ。でも学校に個人の好みまで管理してもらわなくていいと思う。先生に偏食を直してもらおうなどと考えていない。

昔給食のおかずが嫌だったのに、今の私は、努力したわけでもないのにほとんど何でも食べられる。

それでも小学校を卒業するときの「これで給食とさよならだ！」というこみ上げてくる喜びを、忘れることはないと思う。

おいしい給食を手に入れよう

千葉県松戸市
島津まさ子（45歳）

（署名集めがきっかけで）

四年ほど前、私の住む松戸市で、中学校給食実施の直接請求の署名集めが行なわれた。

市内の二十歳以上の有権者の自筆の署名を議会に提出するのだ。

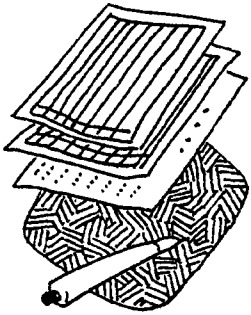
この時点では、中学校給食はあってもなくてもいいやと私は思っていた。毎朝、夫の弁当作りをしているから、娘のもついでに作ればいいのだ。

だが、私はかつて共働きの忙しい母親の一人だった。どの家庭も、朝は時間に追われると思うが、共働き家庭のそれは戦場だ。

弁当作りから母親たちを解放するため、まあ頑張ってみようかと署名集めを引き受けた。

この署名集めが、給食問題を考えるきっかけとなり、私は給食大賛成派になった。

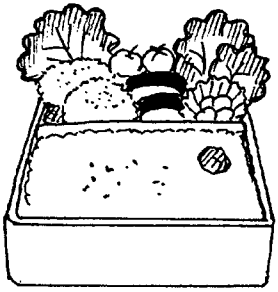
主に娘の級友の家庭を回ったが、たいていは中学の給食の早期実現を望んでいた。まずは、賛成意見から述べよう。



「お弁当というと、本人の好きなものばかり詰めてしまうから給食がいいわ。うちの子は給食を食べて偏食が直ったのよ。『お母さん、あれは意外においし

いんだね』なんて言ってね」この意見は、専業主婦に多かった。

職業を持っているお母さんたちは、「負担が大きいから、ぜひ給食にしてほしい」と異口同音に言った。



山口県から松戸市に引っ越してきたお母さんは「子供たちはね、松戸の小学校に転校して何が一番うれしいって聞かれたら、給食のおいしいことだって言うのよ。前の学校は、センター方式でね。冷めているし、ガチガチのフライドチキンが出たりして、がっかりして帰って来たの。姉弟で、今の学校の給食のこと話題にして、『あれおいしかったね。もう一度出ないかな』なんて話し合ってるわよ」

この話を当時中一と小四の娘たちにしたら、二人ともびっくりしていた。「うちの学校の給食を感激して食べる人がいるんだね。私は当たり前だと思っていたけど」

給食センターで作られた給食は評判がよくないと聞いていたが、初めて経験者から感想を聞いた。

給食賛成派は、小学校同様の自校方式（学校内で調理し、行政が管理する）を前提にしていた。

【反対意見あれこれ】

世間でよく言われているように「母親の手抜きよ。愛情のこもった弁当を作るべきよ」と言って、ＰＴＡの副会長は署名しなかった。

もう一人の反対者は「私ね、市川市の中学校の給食のパート調理員なのよ。絶対に中学給食反対よ。署名しないわ。中学でね、毎日ものすごい量の残飯が出るの。全部捨てるのよ。半分くらい捨ててるんじゃない。女子なんてね、やせるためかどうか知らないけど食べないみたい。もったいないと思うわ。税金の無駄遣いよ」とまくし立てた。

当時、長女の通っていた中学校の校長も中学給食に反対であった。父母会の際に、体育館で堂々と次のように言った。

「給食給食と騒いでいる連中がいますが、給食室を建築するのに幾らかかるか知っていますか。一億から二億円かかるんですよ。そんな大金をかけるよりも、手作りの弁当を作るべきです。母親が手抜きしたいだけでしょう」

教育費の使い方には様々の意見があると思うが、こうもはっきりと自分の意見を親の前で言うとはと、あきれた。

署名集めは生協も賛同してやっていた。生協の組合員に署名を依頼したら、配達の若いお兄さんが文句を言われた。「署名を強要するのはおかしい。私たちは給食反対だ」

返答に困った配達のお兄さんは、理事を伴い、再度説明に出向いた。またしても母親たちは言った。

「私たちは弁当作りを楽しみにしている。男子は中学生ともなると母親としゃべらない。弁当のおかずが、唯一の親子の会話だから、弁当作りを奪わないでほしい。共働き家庭を助けるために、私たちが犠牲になることはない」

この成り行きは、当の配達員から聞かされたが、「犠牲になる」という考え方に驚いた。

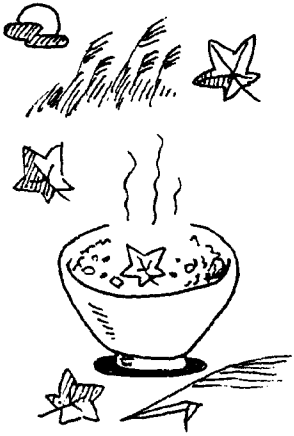
それにしても、弁当のおかずのことしかしゃべらないなんて貧弱な親子関係だ。

署名集めに奔走していたころ、給食問題研究家の雨宮正子さんの講演を聞きに行った。

全国津々浦々講演に回る雨宮さんは、親からの反対意見もよくご存知だった。講演した後で、必ず質問されるのは、例の「親の愛情のこもったお弁当がいい」という意見だそうだ。雨宮さんが、様々な角度から給食の必要性を丁寧に説明すると最後は分かったと言ってくれるそうだ。当日も十枚近いコピーが、出席者に配られた。

その中で印象深いコピーがあった。ある学校の熱心な栄養士は献立表にプラスして、もう一枚プリントを配る。「秋なので、紅葉ご飯にしました」で始まり、材料や作り方が続く。

私は、はっとした。秋だから秋刀魚を食べようかくらいは思うが、にんじんで紅葉を表わそうとは考えない。食卓に季節感を出すまで気が回らない。毎日忙しく日が過ぎていく。共働き主婦ならなおのことだ。子供の持ち帰るこんな熱意あるプリントを見ると反省を促される。



各地域の小学校の栄養士さんは、重大な任務がある。日本人の食生活は一見すると豊かになったが、新たな問題も登場した。清涼飲料水やスナック菓子の食べ過ぎなどだ。それらを地域の親たちと考え、改善していくことが栄養士ならできると説く。

〈よりよい給食を〉

娘の担任は女教師だが、松戸市から隣の鎌ケ谷市に引っ越した。先生の子供も転校した。「お母さん、給食がまずいよ」と言うそうだ。鎌ケ谷市の給食は、学校の給食室で調理されるが民間委託だ。つまり業者が調理を任されている。そのほうが行政は楽なのだそうだ。

おいしくないから残飯が大量に出るそうだが、教師もまずいと思っているから注意もできないらしい。

私は団塊の世代だから給食を食べて育った。給食室には白い作業衣のおばさんたちがいて、湯気が立ち込めていた。三十年経て、娘が入学した学校も同様だった。給食はおいしくて当たり

前だった。顧みる必要もなかった。

その当然の給食が変わろうとしている。センター方式や民間委託が増え、生徒はおいしいと思わない。重労働の給食作りは栄養士と調理のおばさんたちの協力と情熱なしには生まれないと雨宮さんは主張する。

鎌ケ谷市の親たちも自校方式を目指して、住民運動を頑張らなければならない。

冬の寒い朝、長女が言った。「ああ、お弁当も飽きたなあ。給食に出た温かいみそラーメンをすすりたいなあ」二女が付け足した。「うん。クリームシチューもおいしかったね。寒いとおいしいんだよね」

冷えた弁当よりも温かい給食を懐かしがって二人は意見が一致した。

私は友人の娘を思い出した。その子は私立の名門、白百合に通学している。毎日弁当持参だそうだ。あの子は、うちの子のようにみなですする給食の思い出を持たないで育つのだな。

考えてみると、給食を食べられる時期は、小学校六年間だけだ。弁当は人生のいつの時代でも食べられる。夫も弁当を持って行く。

断っておくが、私は食事の手抜きはしていない。パンもお菓子も作る。弁当も栄養と彩りを考慮して詰める。

私なりに努力していても、料理のパターンは決まってくる。これを補ってくれるのが学校給食だと思っている。

母親には我が子しか見えないが、社会全体にとってよいものは存続すべきだろう。

給食室で使用される洗剤や添加物の心配、アトピーの子供、忙しすぎる教師たちの負担と、私が思いつくだけでも問題はたくさんある。

問題点は改善されるように行政に掛け合い、理想の給食を目指して親同士が手を取り合うしかないと思う。

ぜひ一度雨宮正子さんの講演を聞いてほしい。著書も読んでほしい。そしてもう一度、給食問題を考えてほしい。

（雨宮正子著・『手づくり学校給食のすすめ』家の光協会発行）

（え・小宅昌枝）

★わいふバックナンバー

各号特集テーマ

211号　病院に入ってみたら
213号　私の夫の労働人生
226号　セカンドハウス持ってみたらば
227号　子どもの出現
233号　私と学校
235号　我が家を手に入れるまで
236号　近所づきあい・私の苦労

定価二一八号までは四五〇円、二一九号より四六〇円。送料は実費負担で。

★新刊案内

子育てはつらい！　一五〇〇円
核家族のための
子育てガイドブック　三〇〇円

☎〇三－三二六〇－四七七一
三二六〇－四七七三

●エッセイスト・クラブ

帰郷

埼玉県草加市　佐藤　玲子

「お母さん、もうすぐ佐渡に着くよ、お父さんが甲板に来なさいって、呼んでるよ」

小六の次男が勢い込んで船室に飛び込んできた。

「えっ、もう、着くの？　早いわねえ」

寝転がって週刊誌を読んでいた私は、慌てて起き上がり、次男と交代して船室を出た。

左舷の甲板に出てみると、小佐渡側の突端にある姫崎の灯台がすぐ近くに見える。海に大きく張り出した緑に覆われた島影が、ふいに私の記憶をよみがえらせた。この灯台のそばを通るといつも、両津の港に着くのは、もうすぐだった。

（ああ、ほんとうに、佐渡に帰って来たんだなあ）

私はふいに感傷的な気分に襲われて、胸が一杯になった。実に十七年ぶりの帰郷だった。上京してからすでに二十六年がたっていた。過去二回、お墓参りのために帰ってはいるが、大きな古い家に入るたび、父と姉の死を思い出して悲しみがよみがえった。そしてその後の自殺願望が記憶の底から浮かび上がって、私の胸を締め付けた。

悲しい過去を思い出したくないばかりに、二度と帰るつもりはなかったふるさとに、今回久しぶりに帰郷する気になったのは、叔父が誘ってくれたからだった。

叔父は住む人もなく荒れ果てていた古い家を壊して、新しい家を建て、退職後、ふるさとにUターンしたのである。

遠慮せんでもいい、家に泊まれや、との叔父の好意に、望郷の念を駆り立てられて帰郷したのであった。

夫の姿がないのに気付いて右舷に出ると、夫が立っていて、ほら、もうすぐだ、あれが両津の港だろ、と手で指し示した。かつての記憶にある両津港ではなく、どこかの大きな港かと思うほど、様子が違っていた。

「随分変わったわ、とても近代的になってしまって」

十分後、私たちの車は船を降り、両津の町の中を走っていた。港の位置もその規模も大きく変わり、観光地らしく美しく整備されていた。町のにぎわいを抜けると、すぐに田舎らしいのどかな風景が広がり、海岸線に沿って県道が延びる。車はあっという間に、村々を通り過ぎて私が二十歳になるまで過ごした、白瀬村に入った。

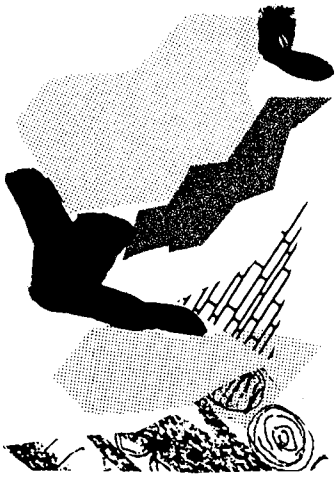
ああ、ここがうちの畑だ、ここにたんぼがあったはずだとゆっくり見る間もなく車は走りすぎて行く。

やがて海に向かって大きく窓をとった真新しい家があった。そうだ、ここが叔父さんの家だ、と気が付いて車を降りる。開け放した玄関から声をかけると、叔父が笑顔で出てきた。叔父は生前の父と、姿も声もよく似ている。

手早く荷物を運びこんで、早速、家を見て回ることにした。私は何よりも新しい家が建てられたことがうれしかった。かつての古い家では、何かの呪いがかけられていたのではないかと思うほど、不幸が続いたからだ。

とてもよく考えられた設計だった。採光、通風もよく、ユーティリティは最新の設備を備え、ゆとりと解放感のある間取りだった。なかでも竹林に面した裏庭をかなり広くとって、薪を燃やすタイプのふろがまに直接運びこめるようになっているのには感心してしまった。竹林を持つ叔父の家は永遠に薪には不自由しないのだ。

「おじさん、とってもいい家ねえ！　明るくて広々として、前の家とは大違いだわ、理想的な間取りじゃない！」



「そうか、おれもな、とにかく明るくしたかったんだよ、日の入る家にと思ってな」

叔父は我が意を得たり、とばかりにこにこしてこの家を建てるまでの苦労話などを話し出した。

その夜、四人でビールをつぎ合って食事しながら、色々な話をした。叔父とこうして色々なことを語り合うのは初めてだった。飲むほどに私と叔父の距離がどんどん縮まっていく。どうかすると、叔父の声が父の声に聞こえてくる。私は叔父

の家にこうして泊まることになった幸せをしみじみと味わっていた。

翌日は父と姉のお墓参りをした。草刈り鎌を持った叔父の先導で、海を見下ろす高台にあるお墓まで歩いて行った。線香、水、花を供えて両手を合わせた。上京以来、実に三度目の墓参りである。ふるさとはないものと自分に言い聞かせてきた私だったが、さすがに胸が一杯になった。これまでお墓参りはしなかったが、父と姉はいつも私の心の中に生きていた。

その後、叔父と別れて私たちはドンデン山へ登ろうと、車を走らせた。日光のいろは坂よりも急なカーブの続く道路を、はらはらしながら登っていった。山腹からの景色がすばらしく、歓声を上げて写真を撮った。山から見下ろす日本海の何と美しいことだろう。海の青い色が驚くばかりの鮮やかさだった。

その夜はまたビールを飲みながら、昔話をした。心地よい酔いが体に回っていくのを感じているとき、叔父が私の父母のことを話しだした。そうなのよ、大変だったのよ、と相づちを打っているうちに次第に私の脳裏に過去が鮮明によみがえってくる。

「私ね、どうして親戚の人たちが何も言わないのか不思議だった、心配しながら遠巻きにして見ているだけだったでしょう、子供心にどうして母が家を出て行かなかったのか分からなかったの、父をあれだけ責め立てて追い詰めて、憎んでいるとしか思えなかったもの……」

私の両親は家庭内離婚同様の不仲で、小説になりそうな修羅場を繰り返してきたのだった。

「いや、言えなかったんだよ、手を付けられなかったんだ、言えばもっと火に油を注いだようになって、大変なことになるのが分かっていたからな……」

「私はたとえ暴力ででも母を抑えてほしかったの、父がかわいそうだったわ……」

「いやあ、母さんは完全に常軌を逸しておったからなあ、どうにもならなかったんだよ、ヒステリーを起こすからなあ……」

確かに母は子供の私の目から見ても、強度のヒステリーを伴うノイローゼだったとしか思えない。一方的に責められるか謝るかのどちらかだった父は次第に酒量が増えていき、姉の死から一年たたないうちに脳溢血で突然帰らぬ人となった。

「兄貴が死んだときなあ、母さんに殺されたんじゃないかって、うわさになってなあ……」

「えっ、そうだったの?」

「ああ、首でも絞められたんじゃないかってな、近所でうわさされてたんだよ……」
「ああ……。そうだったの……」
私は思わず頭を抱えた。過去の出来事とはいえ、ひどいうわさである。
「しかしな、夫婦のほんとうのところはだれにも分からないんだよ、別れたくてもなかなか別れられないもんだからなあ」

あんたのせいで、あたしゃ、自分の人生を犠牲にしてしまったんだ、あたしゃ、あんたを産みたくなかった、あんたを産んだばっかりに苦労の連続だった、と、母にわめかれたときのことはいまだに、私の記憶に残っている。
「でも、子供のせいで別れられなかったと言われるのも、つらいのよ……」
しばらくの間、しんみりした空気が流れていった。叔父も私もそれぞれの物思いにふけり、夫は黙って聞いていた。
ややあって叔父が気を取り直したように、古い記録の束を持ち出してみせた。葬式や納屋の新築についての記録、祖父の経歴書などが残されていたという。夫も目を見張るほど、達筆な文字で書かれたものもあった。
和紙をこよりで束ねて細い筆で書かれたそれらの書き付けは、まさに先祖からの遺産であり、先祖の歴史そのものであった。
父の悪口しか言わない母の言葉にかつて傷ついた私は、祖父が立派な人だったと知ってとてもうれしかった。知らなかった自分のルーツをかいま見ることができて、しみじみとした幸福感を味わった。
母と対立ばかりしていた私だったが、叔父が私とよく似た考え方であることにほっとしてもいた。父を巡って母と私はいつも百八十度見方が違い、どちらも譲らなかったのだ。母は父と父方の親戚を嫌って私にもその価値観を押し付けようと

したのだった。
叔父の家に三泊させてもらいながら、佐渡のあちこちを見て回り、私はほんとうに久しぶりの帰郷を楽しんだ。感激と幸福感で一杯になった帰郷だった。

悪い予感と禁煙の旅

埼玉県所沢市　越　久美子（28歳）

八月末、母と日帰りのバスハイクに行った。
その日をさかのぼること一月前。母から××トラベルの〝栃木県袋田の滝、鮎料理ツアー〟というものに誘われ、たまには母娘二人の観光もいいかナと思い「うん、行く行く」と気軽に応じたのだが……。
その一カ月の間、どういうわけかニュースでの自動車事故の悲惨ばかりが目につき、ふっと悪い予感にとりつかれた私は、思わず母にキャンセルを提案した。
すると彼女は「あなたが気乗りしないのなら……でも、もう四日前だから払い込み料金は幾らも戻らない」と暗い顔で言うのであった。
とっさに〝あっ、まずい！　母は私と二人の旅行を楽しみにしていたのだ〟と思い至り、努めて明るい声で「やっぱ、行こうか。鮎料理も楽しみだし」ということになったのである。事故などないと自分に言い聞かせて。
けれども不安はぬぐいきれない。前夜、念のため、二、三の友人に電話した。いつもどおりにやり取りしたのだが、内心これが今生の別れかもしれぬ。お葬式には来ておくれ、と思いつつ……。
その後やはり念のため、部屋をきちんと片付けて（覚悟を決め？）旅の支度を整えた。
当日、朝七時半集合。バスに乗り込みいざ出発。しかしウカツであった。車内は禁煙なのだが（そのとき初めて知った）私は一日二箱のヘビースモーカーである。地獄だ。
それに、死刑囚でも執行直前にはタバコを吸わせてくれるというではないか。このままバスが崖から転落したらどうするのだ。
私は〝親孝行のため〟という大義名分でキャンセルをあきらめたつもりだったが、その大事な母の命の行く末はとんと考えず、事故とタバコのことばかり考え巡らせているエゴイストであった。
また、矛盾するようだが、心の奥底に〝母と一緒に死ねるなら安心〟というまったく自立してい

ない発想もちらほら……、お恥ずかしい。
それにしてもタバコ……。結局ひたすら我慢した。
渋滞で遅れ、五時間後の十二時半過ぎ目的地に到着。ああ、無事着いた。バスを降りた後の一本のタバコは五臓六腑にしみわたり、こんなにおいしいものがこの世にあるのかとしみじみ思った。
さて、いよいよ〝鮎料理〟が食べられる。広いお座敷に座り、テレビに出てくるようなキレイな陶器に盛られた、塩焼きその他の鮎料理に舌鼓を打つ私の夢は、しかし無惨に打ち砕かれた。
美しい緑色の川のほとりに我々は案内されたが、えっ？　まさかここ？　と思いたくなるような、だだっ広い、柱とトタン屋根だけはかろうじてついているといった座敷（？）が食事の場所なのであった。長いテーブルに、ぎゅう詰めに座る。そして肝心の〝鮎三昧〟のほうは――。
縁日のタコ焼きか焼きソバが盛られるような、白いペラペラした長方形の容器に、確かに三品の鮎料理。つまり、一枚の皿に塩焼き二本、一枚にフライ二本、一枚に田楽一本、後一枚はなぜか鰻のかば焼き。ご飯とみそ汁、四、五人に一人くらいの割り当ての、やはり白いペラペラに盛られたキャベツの漬け物。はるかかなた（三メートルほど離れたテーブルの上）にしか置いていない、フライ用のソース……。

塩焼きは、一本の串でくねった魚を二か所貫いてあった。目も口も、苦痛の極みでカッと開かれている。にわかに食欲をなくしたが、これで食べなかったら余計鮎がかわいそうだと思い、全部平らげた。
「ちょっとすみませんが」とフライのソースをリレーしてもらうのも気が引け、味なしのフライも、これまたペロリと食べたのだった。
ともあれ、食後の一服はおいしかったし、気を取り直して再びバスに乗る。けれども今度はカーブのやたら多い山道だ。窓の下は崖。冷や汗とともに、だんだんタバコが吸いたくなってきたが、

我慢。

〝袋田の滝〟と、水戸光圀が隠とんした〝西山荘〟を見学した後、バスは山道から町の道路に出て、やがて滑らかにハイウェイに滑り込み帰途についた。疲労でウトウト。

午後八時半、かすり傷一つ負わずにバスは元の場所にたどり着き、解散、晴れて自由の身となった。駅前で、二人夕食をとる。

安心からすっかりリラックスして、大好きなビールとタバコを思いっきり楽しんだ。苦の後の楽ということなのか。そうだとしたらヘンな旅行だった。でも、悪い予感はどこへやら事故死もせずに帰宅でき、この文章を書くことができました。くわえタバコで―。

息子の夏休み

東京都世田谷区　山田　恵子（41歳）

月曜日の朝八時、玄関先でゴミを持って出勤しようとしていた私に、もっそり起きてきた末っ子がどんよりした声で、

「お母さんは土曜と日曜しかお休みがないの」と聞いた。

「そうよ」

いつものことじゃないのと思いながらそっけなく返事した私の背中に、

「いつも忙しいんだねえ」

といかにも間延びした声が返ってきて、私は思わず立ちすくんだ。何という寂しい言葉だろうか。

夏休みに入って最初の土曜日は親子してプールに行った。アイスクリームをみんなで歩きながら食べた。一日中じゃれあって、大声でわめきあって過ごした。日曜日も楽しかった。夏休みなんだもの、もしかしたらこの楽しさは一夏続くかもしれない。日曜の夜、息子はそんな思いで眠りについたかもしれない。それなのに月曜の朝は容赦なくやってきた。

休み中でも結構小三の息子なりの日課がある。ピアノのレッスンも学校のプールもある。スイミングスクールはお姉ちゃんが送り迎えしてくれる。お昼の用意もお姉ちゃんたちがしてくれる。お姉ちゃんたちは怖いけど、お母さんだって怖いんだもの、お母さんが昼間いなくたって、ま、いいか。それに、後ちょっとで酒田のおばあちゃんのところに行くんだし。とろんとした頭で息子はそんな思いでも巡らしていただろうか。

物心ついたころから、子供たちは毎年夏休みのうち二十日前後を私の実家で過ごしている。私が仕事を始めてからは子供たちだけが実家に送られるようになった。この二十日間は私にとって一年で唯一の息抜きの期間である。息子は四歳のときから夏休みのこの期間を両親と離れて過ごしている。今では息子の夏休みのメインイベントとなった。一週間も前からリュックサックに荷物を詰め込み、指折り数えて待っている。そして息子は今年も行ってしまった。解放感と寂しさのない交ぜになった私の心を取り残して。

私の両親にとって息子は一番小さい孫であるためついつい甘くなる。息子は結構居心地がよいに違いない。海に行ったりドライブに出かけたりと、毎日がお祭りなのだ。母親がいなくても全然かまわないはずだ。

ところが去年の夏、妹がこんな話をしてくれた。実家で休暇を過ごしていた妹が東京に帰ろうと支度していると、息子が寄ってきて、

「叔母ちゃんはなんで東京に帰るの」

と聞いたという。

「なんでって、車で帰るのよ」

「だ、か、ら、なんで車で東京に帰るの」

「ああそうか、用事があるから帰るのよ」

すると息子は、

「帰らないでよ」

とつぶやいたという。姉や従姉兄(いとこ)たち、それにおじいちゃんおばあちゃんとお祭りの毎日を過ごしているはずの息子は実は、母親の年格好の叔母に一番そばにいてほしかったのかもしれない。

夏休みはほんとうにつらい。この後ろめたい気持ちはどこからわいてくるのだろうか。個人商店のような小さな事務所に勤める私の休暇はたった四日。今年も子供たちを実家に迎えに行くのに使うだけで、家族旅行さえできない。あまりにも貧しい日本の中流の夏休み。

そんな息子も日に日に強くきかん気になってきた。姉たちにも母親の私にも気にくわないと飛びげりで向かってくる。精神と肉体は連動しているらしい。去年あんなに繰り返したぜん息の発作も今年はうそのようになくなった。ばかな母親には飛びげりさえもうれしい。やがて「アッチ、抱っこ!」と呼んでも鼻先で笑って逃げていく日が必ず来るだろう。子供には強く伸びていこうとする生来の力があるのだから。

けれどもその日がほんとうに来たら、あるいは私は寂しさにぼう然とするのかもしれない。

(え・カステラネンコ)

●サーブレシーブ●

夫婦って何だろう

大阪府　荻野菜穂子

割り切れない思い

二三七号の特集「セックスレス夫婦」のタイトルを見たときは、特に驚くこともなかった。が、しかし、読んでいくうちに、どうしても不可解なものが、頭の中で大きくなっていくのを放っておくことができなくなっていった。

ご自分の現況に悩み、葛藤し、出口を求めていらっしゃる方の気持ちは、とてもよく分かる。自分もそうだったし、大体赤の他人同士が、違った精神構造を持った異性が、一つ屋根の下で暮らしているのだ。ズレがまったくないわけがない。

でもどうしても分からないのは、セックスレス夫婦であることに肯定的な方が、投稿者自身あるいは投稿の中に、たくさんいらしたことだ。

回数が少ないから性生活が貧困だ、とか、頻繁にセックスをすることが豊かな夫婦生活だ、とは単純には言い切れない。体を重ねたくてもできない事情の方もあるだろう。詰まるところ「いいじゃないの、当人たちがそれで幸せならば」というところに落ち着くのだろうが、あきらめの悪い私には、どうにも割り切れない思いが残る。

仮にセックスレスが「立派に結婚の一形態」となり得るのなら、単なる共同生活者ではない夫婦って何だろう。夫婦のセックスは、生殖のためにあるだけなのだろうか。「不自由なければしなくていい」「ないよりはあったほうがいい」程度のものなのだろうか。「したくないから、相手が外ですませてきてくれる」ことに喜べる状態は、自然なのだろうか。あれこれ自問自答しながら、かつて自分がたどった道を思い返してみた。

夫を憎んでセックス拒否

結婚してから今までを振り返ってみると、何とも慌ただしい五年間だった。

一年間ディンクスした後、夫の駐在が決まり、私も仕事を辞めてイギリスに渡った。

夫とのセックスが嫌になったのは、娘を妊娠してから。それから帰国して今の社宅に越してきたくらいまで、実に三年近くも、夫の求めを拒否したり、受けても渋々、という感じだった。

子供ができて、つわりや母乳など、体が変化したことや、育児と引っ越しに疲れて、とてもそんな気になれなかった、ということもある。でも、ほんとうの理由はもっと根深いところにあった。私は夫を憎んでいたのだ。

海外での妊娠、出産、赤ん坊の手術などは、私にとっては相当な精神的負担だった。そのころ夫の職場は、色々と問題を抱えていたから、夫の協力はほとんど望めなかった。周りに日本人はおらず、イギリス人に話しても、かえって分かってもらえず寂しくなるので、私は高い国際電話代を払って、母親に愚痴をぶちまけるしかなかった。夫はその後転職したのだが、今時転職は日常茶飯事とはいっても、子持ちの転職は、そうそう気軽なものではない。両方の実家を巻きこんで、結構な大騒ぎになった。

私は子供に振り回されてヘトヘトだし、自由に身動きがとれないのに、夫はいたわってくれるどころか、考えるのは自分のことばかり。夫の都合にまで振り回されて、私はまとまったことは、何一つできない。やっと新しい環境に慣れて、あれをやろう、これができそうだと見つけたところで、ハイ引っ越し。一体私は何だろう。これからどうなるんだろう——。やり場のない怒りと不安は、すべて夫に向かった。「こうなったのもすべて、あなたのせいよ！」

その当時は、自分を正当化することに夢中だったから、「夫が悪いんだ」としか思おうとしなかったが、これは明らかに憎しみという、感情だった。

私の思いどおりになることなんて、ほとんどないのに、自分だけ好き勝手やってててずるい。もっとも夫だって、転職前も後も職場で思いどおりにならないことばかりだったのだが、そのころの私には、そんなことを思いやる余裕すらなかった。そして「何でもあなたの思いどおりになんて、いかせるものですか」という意地の悪さは、セックスの拒否という形をとって現われた。

今ではこんなふうに分析できるが、そのころは理由も分からず、ただどうしてもその気になれない、これだけは譲れないという意地だけだった。

人のことを悪く思い続けるというのは、案外疲れる。時々ふと我に返ることがあった。「私、何でこんなに悪いことばかり考えるのだろう」と。人や環境を恨んでばかりいても、何もいいことはない。私は仕事を辞めて、夫についていくことを選んだのだから、どこでも夫と一緒に行くのは当然で、何の問題もないはずではないか。夫を悪者扱いにはしても、決して嫌いになったわけではない。なのにどうしてセックスが嫌になってしまったのか。どうしてこんなに素直になれないのだろう。

一人で大揺れに揺れていた私を、夫は時にいらだち、時にあきれながらも、ずっと待っていてくれた。このことにはほんとうに感謝している。

与えられるだけの人生から

考えてみれば、私はそれまで与えられ続けた人生を歩んできた。何不自由なく育ててくれた両親。お互いに刺激しあえる、何でも話せる友人。私を愛してくれる夫。自分から努力したことだって、その後に与えられるものあってのことだった。勉強は頑張れば成績が上がる。人から褒めてもらえる。そして大学に合格したら、自分に学歴というハクが付く。仕事だって頑張れば人から認めてもらえる。いろんなことをやらせてもらえる。

こうして欲しいものは、すべて与えられてきた。でもよくよく突き詰めてみれば、

自分から努力したんだと思っていた勉強や仕事だって、頑張れるだけの能力と、その能力を発揮できる環境は、与えられたものである。

もしも世の中の主流が学歴重視じゃなくて、運動神経重視かなんかだったら、私は確実に落ちこぼれになっていた。だからこれまでの人生は、すべて自分でつかみとってきたのではなく、ただ単にラッキーが重なっていただけじゃないだろうか、と私は思うようになった。そして自分に提案してみた。「与えられるために何かするのではなく、自分の好都合を得るために何かするのではなく、まず自分が与えることを意識して、もう一度やり直してみようか」と。

こんな紆余曲折を経た後しばらくして、私はクリスチャンになってしまった。

もともと宗教には毛頭、興味がなかった。神なんて人間が生きていくうえで、都合のいいようにつくられた概念にすぎないと、勝手に思い込んでいた。それなのに、聖書も読まぬ先から、教会へも足を運ばぬ先から、ほんとうに一方的な恵みとしか思えない方法で、救われてしまった。神は存在するのだということを、思い知らされてしまったのである（といっても、心霊体験ではない）。

あれからまだ一年もたっていないが、私自身だって、まさかこうなるとは思ってもみなかった。でも頭の中で、どうしても割り切れず矛盾していたことが、すんなりと解決し、今まで縛りつけられて苦しんでいたものから、一気に解放されて、生きることが非常に楽になってしまった。そして「こうできたら絶対楽になれるのに」と頭で分かっていても、なぜか素直にできなかったことが、別に何か努力しているわけではないのに、だんだんスッとできるようになってきた。

こうして私は、夫とのセックスを心から受け入れられるようになった。夫婦の性生活は、やはり最高の愛情表現だと思う。人の目にさらすこともない。世間の評価も届かない。日常生活や言葉という小道具も使わない。経歴や地位という飾りも関与しない。まったく生身の男と女が、どこまで自分を与えられるか、どこまで相手を受け入れられるか。

自然発生的な感情だけでは限界がある。意志を働かせる余地がある。まさに純粋に愛だけが問われる行為ではないだろうか。だから快楽やスリルを伴う「面白く楽しいこと」とは違うかもしれない。でも追い求めた先は、きっとほんとうの喜びが味わえるような気がする。

あまりにセックスを高尚なものとみることは、下等なものとみなすのと同じくらい危険だ。けれど、目指すべき、本来あるべき理想の姿を、きちんと抑えていなければ、とても子供に性教育などできないのではないだろうか。

（え・小島佳子）

波にのまれて

大阪府豊中市　中松ミナ子

寝耳に水の立ち退き

周囲わずか四十六歩、十坪に足りない土地。それは三十六年間、夫と私が共有した我が家の歴史を刻んだ地であった。

あれは昭和五十六年の秋のことである。

定休日の朝をのんびりと新聞を広げていた息子が「なにィ。立ち退きやてェー、大阪モノレール計画のルート予定地内に店もこの家も入っている！」と言うのだ。「ええッ！　えらいことやないのォ」

息子の手から引ったくるように新聞を取り上げると小さな地域図を走る太いS字状の線の下に確かに我が家があることを認めた。

記事によると、このモノレール通過予定地内には立ち退き対象にある住宅は二百五十世帯とあった。

「みんながオイソレと立ち退くわけがないよ」

「一体何のために、S字状に住宅や商店の上を通らなあかんのよォ！」息子と私は寝耳に水の立ち退き問題で、折角休日のくつろいだ気分が吹っ飛んでしまった。

夕方、釣りから帰った夫も〝立ち退き〟について驚き話題はそのことばかり……。

だがその時点では「そんなに簡単に二百五十世帯の買収ができるはずがない。今に反対者が団結し手を打つに決まっとる」と夫の言葉にその場は少しほっとした私である。

案の定、立ち退き対象の住民は団結してこれらの一方的計画を阻止せんがため第一回目の会合が開かれた。

まず最初に市役所へ押しかけた。市議会においてモノレールルートの決定をさせてはならないからだ。しかし当日、職員たちの厚いガードに阻まれ、市議会は議員の賛成多数で通過、大阪府議会へと問題は移っていった。

立ち退き対象者は大阪府議会へも勢ぞろいで出かけ、何としても傍聴できぬものかと願ったが、代表一、二名のみ許可されただけだった。そして府議会でも難なくモノレールルートは変更せず通過してしまった。

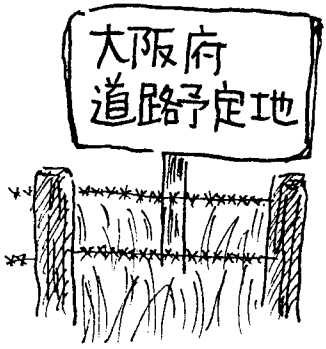
府議会へ押しかけたとき、地元の議員の顔を見つけた選挙時の後援会の一人が「先生ェ、頼んまっせえ」と声を限りに叫んだけれど、先生は困惑の表情をこわばった笑顔に残して、そそくさとエレベーターに消え、その後こっそり裏階段を使って脱出してしまい、それぞれが落胆しきりだった。

訴訟に踏み切る

私たちは大阪府豊中市という巨大な組織を相手として、モノレール反対訴訟団を結成することになった。立ち退き対象二百五十世帯のうち、百名で発足した。会費は最初一カ月二千円。訴訟団の弁護士は若手のS氏であった。

団長のI氏の話によると「若い先生だが、大阪大学法学部を優秀な成績で卒業され、大阪弁護士界のホープ、本件で勝訴に持ち込めば一躍S先生の名を揚げる機会にもなるので費用も安いが引き受けてくださった」という。

どうやらS先生自身、弁護士としての足固めをする時機でもあり、全力投球の気構えで自信に満ちたその説明を聞くかぎり、裁判に無知な私たちはその時点ですっかり（勝てるんだ）と信じこむほどだった。



だが現実を早くも冷静に受け止めた人は訴訟団への加入をせず〃成り行きに任せます〃と涼しい顔。一年もたつと、いち早く代替地に家を建てて引っ越したり、買収成立後はフェンスに囲まれた更地に、『大阪府道路予定地』と書かれた大きな看板が立てられた。私たちは〃モノレール反対〃と書いた勇ましい鉢巻きを締め、胸や背中には手製のゼッケン、同じく黒々と反対を記し、手には大きなのぼりを掲げて行進をしたのである。

大阪裁判所前では入廷までの訴訟団の、その行動の模様を各テレビ局が取材に来ていた。

立ち退き問題さえなければごく平凡な家庭の主婦が、商店主が、いささか照れくさげに緊張した表情でカメラの放列に戸惑いつつ映されたのだ。

そして「奥さんテレビに映ってたわ」と何のかのと冷やかされるのだが、第三者にはせいぜいテレビに映っていた、ということのみにとどまり「どうして、そんなにまで反対するの？」「いいじゃない。立ち退き代うーんともらえば、うらやましいくらいよ」と無関心極まりない反応が現状であった。しかしこれも我が身を振り返れば、かつて高速道路建設のため立ち退きになるという話も他人事として、せいぜい「気の毒ね」と口先で言っていたという自分の冷淡さをつくづく反省させられるのだった。人間とは災難が我が身の上に振りかかって

きたとき初めて、他人の苦しみや痛みを知るという身勝手さを隠し持っていることを実感したのである。

これが訴訟というものか

さて初めて裁判所の法廷に入るという日、傍聴するのは、ほとんどが仕事のある夫に代わって主婦たちであった。私も含めて日ごろ何かとかしましい女たちなのに、エレベーターで八階に着くなり、口をきゅっと閉め、それぞれカチコチになった。「おトイレに行きませんか?」とだれかが言うとゾロゾロと連れ立って行く。「何だか緊張して……」「急にトイレに行きたくなったりして……」とひそひそ話し合う。時ならぬ女性トイレは満員—。

やがて定刻、お面のような面持ちで入廷しそれぞれが席に着いた。テレビの法廷と同じ黒い法廷着（というのだろうか?）裁判官がいかめしい表情で中央の席に着くと「起立」「礼」「着席」の号令に全員が従った。

小さな声で裁判官がボソボソと言った。S先生が立ち、被告席から市職員も立ち、二言三言。

その後S先生はふろしき包み（弁護士はなぜかふろしきを愛用されていた）を片手に席を離れる。

「終わったんですって」前のほうから立ち上がり移動が始まった。「へえ、あれでおしまいなの?」「さっぱり分からなかった」

廊下に出るなり早速、口達者な女たちに戻って「まあ、あれが裁判なんですか?」「あんなに緊張してバカみたい」と騒がしくなった。

S先生が「隣の弁護士会館に集合してください、説明をします」と訴訟団の一行を案内するように歩き出した。

S先生は、我々は、

一、モノレールルートは障害のない中国自動車道路と並行して空港へつなぐべき。

二、住宅や商店を立ち退かせてS字状にする理由。

三、阪急電車の蛍池駅と接続させることは大手企業の運営上の希望で、住民のメリットはない。

四、豊中市側は当時地元蛍池商店街の役員がモノレールを蛍池へ誘致のため陳情した事実と、それを受理した担当者の出廷を望む。

などということを中心に戦う、ともかくモノレール通過道路決定を阻止するため頑張ろう、ということになって散会した。

だが裁判はそのつど、相も変わらず、わずか一、二分で次回は〇月〇日〇時より、との通知（?）みたいなもので次第に傍聴人は少なくなっていった。

当事者として発足し、熱心に反対を叫ん

だ人たちでさえ裁判所へ出席することが少なくなった。民事裁判とはそれほど、気が遠くなるほど進展しないのが常と聞き、気は重くなるばかりだった。

もっともS先生は、いつも明るく希望ある説明を繰り返したけれど……。時折「万が一、最悪の事態となっても土地価格は、そのときに応じたものになりますから落胆しないでください」「次回は尋問もあります、面白い展開になります、多数出席してください」と締めくくったりした。

私たちの店

夫と私の小さなすし店は、昭和三十一年、バラック同然のみすぼらしい店を当時としては五十万円という法外な値段で買ったものである。夫が修業中に貯金した十五万円が全資金、後は伯母や叔父からの借金であった。

近所の不動産屋が値段を知り「兄ちゃん倍の値で買わされたなァ」と笑った。

しかし夫は「笑われたけど僕は少ないながら前の店のお客もある。ここがすし屋であることも多少の人が知ってる、今は高い買物と笑われたこの店を将来は何倍もの値打ちある店にするつもりや。協力してくれるか?」と私に言った。「もちろんよ。頑張るわ」二十歳の私も力強く(?)うなずいたのである。

実際、二人はよく働いた。開店以来数年はほとんど無休で通したのも若さの意地か……、はたまた二人とも父親を早く失い、貧乏暮らしの中で得た、いわゆるハングリー精神のタマモノではなかったか、と今になって思う。

しかしその夫も六十歳になっていた。かねてから自らの定年を六十歳と決めて、息子夫婦への世代交代を夢見ていた夫は、ついに三十六年間ですっかり老朽化し、手の施しようのなくなった古い店に見切りをつける時機と決断したのである。幸い旧店へ二十メートルの地には十年前まで住居としていた家屋があり(ここも半分以上立ち退きとなったが……)そこに新店舗を建築することに決めた。

だがこの交渉は、かなりやっかいであった。

何十年も昔の増築、改造時の領収書だの価格だの……、所得税納税証明書、過去二年間の確定申告控え、電気、ガス、水道、電話などの領収書、当然ながら土地登記書、印鑑証明、住民票……ありとあらゆる法的書類が必要とされた。

ようやく交渉を始めて七カ月もたった十月二十三日のこと。夫は十二、三枚のそれらの書類に淡々と印を押していった。

少し左肩の下がった夫の後ろ姿が印鑑を押すたび動くのを見ていると、胸がキューとなって、私はその場にいたたまれなくなった。

私たちの店はこれでなくなるのだ。ここまでに踏み切るには夫と私、息子夫婦で何度も意見を交わし合っている。

共に裁判所へ通った訴訟団の各役員は、単独交渉に入るについて脱会の了解を得るため事情説明に出かけたりもした。役員諸氏は「もう長期になってます、それぞれの家庭の事情もあり、訴訟団への気遣いは無用です」と言ってくれ、ほっとするとともに、訴訟団という名はそれだけのものだったのか……と我が身の行動をヨソに少しばかりガッカリしたのは確かである。

小さな店は消えた

そうして慌ただしかった平成三年の一年は暮れていった。と同時に十二月末日をもって、経営に関するすべての名義を夫から息子へ譲り渡したのである。

明けて一月末から新店舗の建築工事に入った。様々な事情に合わせて夫と私の店は三月二十二日で閉店と決め、新聞広告の折り込みを入れた。

この日、新店舗の設計士が真っ赤なバラの花束を贈ってくれた。「長い間、ご苦労さんでしたな。このバラ三十六本ありまっせ」

私の頬に涙が流れた。

それからが大変、花束のラッシュだ。

息子夫婦、弟夫婦、従姉(いとこ)、夫の友人、甥(おい)、商店街の布団屋さん、花屋さんから……。

くすぶった店の中が、まるで開店祝いのように華やかになった。

その中にうずもれて目をパンパンにはらせた夫と私がカメラに収まった。

この花束、私たちだけにではない、老いさらばえた苦労を共にしたこの店へのものなのだ……。

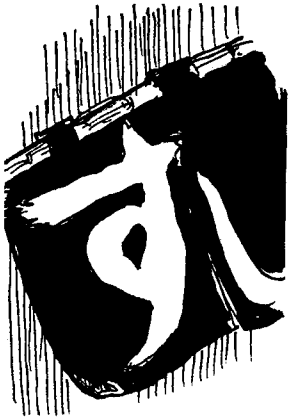
翌日から店の中は倉庫と化した。

新店舗完成までの期間は府庁の了解のもと解体は五月中と決まったからだ。

つい昨日まで、あれほど忙しく注文を受け客が出入りした活気のあった店なのに……。切なくなる……。

そして五月一日、新店舗は晴れやかに開店し、連日物珍しげに来てくれる客たちに愛嬌(あいきょう)を振りまいているうち、旧店の解体期限が迫ってきた。立ち退きに関する代償金は交渉成立後数カ月して半分が手元に入り、解体して更地にしたとき残額が支払われるのだ。

借金で出発した小さなすし店は、夫と私の分身であった。息子にはこの心情が理解されることはないだろう……。



三月二十二日閉店以来、乱雑に積み上げ放り込まれた店内を私は一人もくもくと片付けた。使いなれた棚……、不用品と化した汚れた冷蔵庫……、流し台……、トイレの中……、階段……。

心を込めて丁寧に掃除をした。「ありがとう。さようなら……」と幾度もつぶやきながら……。

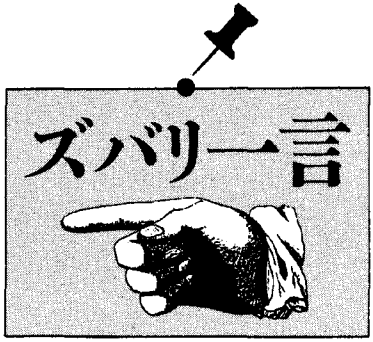
三日後、五月雨の煙る中、すでに色あせたネオン入り看板に、解体特殊車がさながら怪獣のごとく上を向き口を開けかみついた。「バリッバリッ」アッという間に小さな店は屋根も壁も形を失い、地上へ破片となって落ちていった。

「写真を撮っておけばよかったのに……」とだれかが言ったけれど、夫も私も首を振った。

二人の心の中ではこの店は『無形』となった今も、これから先も決して忘れることなく鮮明に存在しているのだから―。

梅雨の後フェンスの中では、みずみずしい夏草の濃い緑の葉が茂っていた。

（え・田村幹代）



笑えないほんとうの話

埼玉県浦和市●佐藤乃麻

薬漬け医療の言葉を聞くたびに、あのことを思い出す。もう十年も昔の出来事。笑えないほんとうの話。

ことの発端は一本の虫歯。暑い夏の日曜日。とにかく、歯が痛かった。金曜日には病院に行ったというのに。そのときは、痛い歯の二本先を丁寧に治療された。

「先生、痛いのはその歯じゃないんですが」

「レントゲンではここだけだよ。よくいるんだ、違う歯を指して、痛いと言う人」

患者は、診察室に入ってしまえば人質に近い。そこまで言われたら、うなずくしかない。

だけど、やっぱり違う。絶対に違う。これで医者の言うとおり、この歯が何ともないのなら、私の神経が狂っているとしか思えない。

我慢できずにおかゆをすすった後、市販の鎮痛剤を二錠。注意書きどおりの正当な飲み方。効き目は今一つだったけれど。眠れない長い一日。

月曜日、歯医者に直行。会社になんか行ってられない。痛みはどんどんひどくなる。鏡を見れば、片方の頬だけプックリ風船のよう。「先生、この歯が痛い！」「そんなはずはありません！」「もう一回見てください！」

医者にけんかを売るつもりはないが、痛いのは私だ。黙ってなんかいられない。小さな病院はこういう点がいい。騒ぎを聞きつけて、院長らしき人が現われた。若い医者が説明をする。「違う違う、そうじゃない」いらだちと痛さで半泣きになりながら、私は叫んだ。

静かに話を聞いていた院長が、細い棒と木づちで、私が指差す歯をカツーン。痛さのあまりに腰が浮く。「この歯が悪い。ごめんね。痛かったでしょう」

痛さと分かってくれたうれしさと若い医者に対するざまあみろの気持ちが入り乱れて、涙がスーと流れた。

「痛み止めを出しておくから。我慢できなくなったら、飲みなさい」

手渡された小さな袋。が、しかし、ずっと痛かったから、どれがこの薬を飲むほどの痛さなのか、よく分からない。

とりあえず夜まで我慢して、

言われたとおり二錠飲んだ。

二時間もたっただろうか。夏だというのに、寒けがする。心臓が高鳴る。そしてさらに一時間ほど過ぎたころ……。ひどい頭痛。何度も吐く。熱も高い。何よりも、背中が痛い。歯痛どころの騒ぎではない。一分と同じ姿勢をしていられない。こんなの初めてだ。転げ回るようにして、痛みが去るのを待ったのだが……。気楽なはずの一人暮らしが、不安に拍車をかける。

泣きながら時計を見た。夜の十一時。両親に電話をと思ったが、すぐやめた。例え両親が車を飛ばしてくれたとしても、二時間はかかる。そんなには待てない。そんなに待っていたら、痛さと恐怖で死んでしまうかもしれない。

救急車を呼ぼうと決めたとき、ふと友人の顔が浮かんだ。その友人なら、家も近い。車も持っている。「頼む、家にいてくれ！」願うように電話をかけた。

「助けて！　背中が痛いの！」

いくら私が大げさなのを知っているとはいえ、その時間のあの悲鳴。早かった。きっと救急車を呼ぶよりも、早かったに違いない。

救急指定病院でも、何度も吐いた。

「先生、薬のせいじゃないですか？」素人考えは危ないと思うけれど、この突然すぎる出来事。それ以外は考えられない。

「いや違う。急性腎盂炎だね。痛み止めの座薬をあげるから。明日、朝一番で大きな病院に行きなさい。今日帰ったら、大きなコップで番茶を二杯飲むように」

急性腎盂炎？　まさか？　膀胱炎にだってなったことないのに……。疑問はあったが、座薬を差して、痛い背中をさすりながらお湯を沸かした。そして、外は真っ暗やみの夜中三時近くに、番茶を二杯飲む。何だかおかしいと思いながら飲んだお茶は、妙にむなしい味がした。

少し眠ったらしい。朝になると、痛みがまったくない。しかし、〝腎盂炎〟が気になり、病院へ。何度も言うようだが、私は素人だ。そう言い切られたのだから、もしかしたらそうかもしれない。

血を採り、尿を採り……。何だかんだと午前中一杯かけ、出た結果は異常なし。

やっぱりねえ。そうでしょうね。薬の話をしたが、医者は首をかしげる。だが最後に、私の話に根負けしたのか、「ピリン系は合わないのかも……」と、つぶやいた。

それっきり私は、市販の鎮痛剤を飲んではいない。病院に行ったときも、必ず薬のアレル

ギー体質に丸を付ける。

それでも、もう一回、同じ症状になった。病院でもらった風邪薬で。そのときは、脊髄に菌が入ったのでは、と大騒ぎ。突然車いすに乗せられ、検査室に。が、やっぱり異常なし。ついでに検査が終わるころには、痛さも熱もなくなっていた。前の話と薬の話をしたが、医者は首を振るばかり……。

今もってよく分からない。何が合わないのか、何が効くのか。まさしく、たかが薬、されど薬である。

考えてみれば、薬は怖い。体質も分からず飲むのだから。それなのに、周りを見渡せば薬を容易に考えている人の何と多いことか。

薬は正しく飲みましょう。正しく飲んだってだめなときもあるのだから。それともこんな経験私だけ？　だれか、教えて！

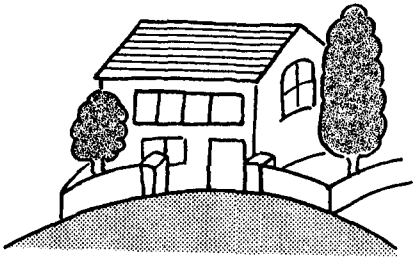
備えあれば…

埼玉県所沢市●花岡由美子

「備えあれば憂いなし……不慮の事態に備えて、普段から準備をしておけば、いざというときに心配しなくてもすむこと」と事典に書いてある。一体どれくらいの人が、このことわざを実行できているのだろう？

私はといえば、これまで「しまった！　準備さえしておればこんなことにならなかったのに」という場面を何度か繰り返した。でも小さい小さい。ここで大きくドカンとやられ、心底痛い経験をしてしまった。

発端は、実母の突然死による相続問題。相続人は父と、私と、死んだ兄の遺児（未成年）の三人で、大した遺産もなく、これにて終了のつもりだった。



あーしかし、我々一家が住んでいる土地の一部が母名義になっているのを忘れていたのだ。これには理由がある。

昭和四十七年に兄が家を建てるとき、兄が生きがいだった母は、その土地代と家の代金を全額支払ってやった。それを兄は全部自分名義で登記し、母を迎えるつもりでいた。が、気の強い母と兄嫁は折り合いが悪かった。

十年後、我々も持ち家の計画を立てた。すると母のほうから「私も一緒に住みたいから、私のいる場所をつくっておくれ。そのかわり資金は援助するから」と言ってきた。「兄と住むのでは？」と尋ねると、「あそこには行かない」と答えて。

母の申し出を断る理由がないので、二世帯住宅をつくり、出資金に応じて、こちらは正直に母名義で登記した。その後、自

分で固定資産税を払いながらも、すっかりもらったつもりで、母名義であることを忘れたのは、甘かった。

昭和五十八年に兄が事故死して、兄嫁は土地家屋を売り払い、全額持って自分の実家に帰り、母とは音信不通のような状態になった。

以上の経緯から、兄嫁に「あなたと私は、母からほぼ同額もらったのだから、ただとは言わないまでも基本的に財産放棄してくれないだろうか」と申し出た。

兄嫁の返事は「ノー」。真っ青になって、あちこちの弁護士に相談した。みな気の毒そうに私を見て、「心情的には分かりますが、法律的に兄嫁さん側に権利があるのは明らかで、当然主張するでしょう」と異口同音に言う。「法律は権利を守るためにあるのです。なぜ事前に処置するなり、遺言書を書いてもらわなかったのですか」とも。

恥ずかしいことだが、相続で一番やっかいなのが不動産であり、有価証券や預貯金などの比ではないことをここで初めて知った。うかつにも、その不動産を残してしまった……。

実は、父と不仲だった母は、父と一緒に詰め込まれるような間取りの我が家には、とうとう住まなかった。が、亡くなる直前、当の姪と一緒に遠路はるばる我が家に遊びに来たのである。遺言書を作成する時間はたっぷりあった。なのに、何もしなかった。遺産などあるはずないと思い込み、その知恵すらわかなかった。悔やんで、ため息ついて、家庭裁判所に調停を申し立てたが、後の祭りだった。

実際に住んでいる土地を分割するのは不自然なので、相手に相当額を支払って権利を放棄してもらう、代償分割になる。

結果的には、大金を巻き上げられた。生涯で忘れ得ぬ高額の勉強代金となった。今回の件はすべて私の無知と不用意に発している。「無知」は怖い。年齢を重ねても、体験しなければ分からないことが多くて、困ったものである。

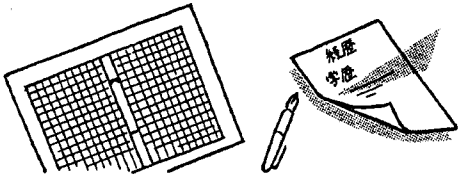
学歴という化け物

千葉県流山市●栗林　勝

松下幸之助、本田宗一郎、吉本せい、吉川英治、長谷川伸、室生犀星、松本清張、佐多稲子、菊田一夫、池波正太郎、井上光晴……。

無造作にここに列挙した人たちに共通するものは何だろうか。そう、この人たちは、いずれも社会の最低の教育しか受けていないのに、それぞれの分野で超一流の業績を残した人たちだ。思いつくままに列挙しただけでもこれだけの人がおり、詳しく調べれば、前記の人たちと同じような経歴の持ち主はもっともっと多いはずだ。

しかしこれらの人たちが、万一不運にも社会で下積み生活をしていたら、周りの人たちに自



分の学歴を明らかにしただろうか。

私が現在住んでいる団地は、大手の不動産会社が造成した二百七十区画の分譲地だが、この小さな団地の中にも、聖心女子大学出身で評論家○○や作家×

×と同窓だということを唯一の誇りにしている主婦がいた（まるで自分がその評論家や作家と同じレベルの人間だと言いたげな口ぶりで）。彼女は会う人ごとに話しかける。「失礼でございますが（心の中じゃ決して失礼だと思っちゃいないくせに……。ほんとうに失礼と思うんなら聞かなきゃあいいんだよ）、どちらの大学の出身でございますか」大きなお世話だ。どこの大学を出ようが、小学校しか出ていまいが、それがあんたと何の関係があるというのだ。

私は答える。「うちは貧乏で、どこの大学にも入ったことはありません。小学校出身です」（私は苦労して入った大学の途中で太平洋戦争に駆りだされ、終戦後やっとの思いで別の大学を卒業したが、別に自慢するほどの学歴でもないので、小学校卒業と――小学校を卒業していることは決してうそではないので――世間に公表している）

私は四十年近い役所勤めをしたが、日本の役所ほど学歴が肩で風を切って歩き回っている社会はまずあるまい。

一つの例を挙げる。Kは東大出身のいわゆるキャリア組の一人。Kほど（いいかげんな仕事しかしない人だったが……）東大出身ということを鼻にかける男はいない（これは余談ではあるが、Kは、千円の買物をしても支払いは一万円札でないと恥ずかしいと真剣に考えているような男でもある）。

彼はうそぶく。「何だ、あいつは私大出じゃないか」Kの人間の価値判断は東大出身であるか否かだけで決まる。どのような生き方をしたか、どんな仕事をしたかは一切関係がない。読者の中には、日本の役所でもKは極端な例外ではないかと考える人がいるかもしれない。しかしKのように、はっきり口に出して言うか言わないかを別にすれば、日本の大多数の役人は、腹の中ではKのように考えていると判断して、まず間違いない。

昭和二十三、四年ごろの話で

ある。私は、A、B、B夫人の四人で文芸の同人雑誌を出した。今では考えられないことだが、GHQ（日本占領軍総司令部）の厳しい検閲があり、時には、一つの作品全部の削除が命令されることもあった。

四人の同人のうちAは早稲田大学文学部出身と自称していた。早稲田大学文学部といえば文学青年のメッカであり、多くの有名作家を輩出している。

Aが同人雑誌の巻頭に書いた小説が評判になったことがある。文芸雑誌を出版している東京の出版社の編集者が、台風の激しい風雨の中をわざわざAの家まで訪ねてきた。新人特集号の原稿依頼である。

私たちはAの前途をひそかに期待し、喜び合い、Aの次回作が文芸雑誌に載り書店の店頭に並ぶ日を心待ちにしていた。ところがAは、ついに次回作を書かなかった。

同人雑誌は二号だけで廃刊になった。資金が続かなかったのである。同人は解散し、私も生活のため役所に勤めるようになり、同人たちとも疎遠になった。

七、八年後、私は、たまたま会ったBから次のような話を聞かされた。

「Aがあのとき次回作を書かなかったわけがやっと分かったよ。Aは早稲田大学文学部を出たと言っていたが、実は小学校しか出ていなかったんだよ。最近Aと同郷の人に偶然出会って初めて知ったんだがね。あのとき新人特集号の編集者は、簡単な経歴を載せたいので書いてくださいと言ったらしい。それでAは次の作品を書けなくなってしまったらしいんだ。ばかだよね、Aも。早稲田出身だろうが、小学校しか出ていまいが、オレたちには関係がないのにね」

しかしAにとっては、小学校しか出ていないことを公表しなければならないということは、重大問題だったのだ。大学出のBには、それがいかにもばからしいことのように見えても、私には理解できた。

早稲田大学文学部というのはAの夢だったのだ。その夢を壊したくないために、Aは、書いたことにほぼ間違いない次回作をついに発表しなかったのだ。

経歴といえば、まず学歴を書かせる日本の習慣に、私は限りない憤りを感ずる。そんな習慣さえなければ、我々の到底及ばない素質と才能の持ち主であったAは、次々とよい小説を発表することができたかもしれないのだ。

（え・奥島千恵子）

各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば〝わいふ〟文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住いの地域の公民館に申し入れて下さるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。

くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合せ下さい。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せて公民館にお申し入れいただくとよいと思います。

連載②

わが青春の宝塚

東京都三鷹市　豊城　智子

宝塚音楽学校とは？

『宝塚音楽学校』それって一体何なの？と言われる方のために、できるだけ簡単に説明しよう。

宝塚音楽学校は、兵庫県宝塚市、宝塚歌劇団のホームグラウンドであるこの町にある。ここには、歌劇団・大劇場・小劇場・音楽学校など、宝塚のすべてがちりばめられている。地理的には、大阪と神戸のちょうど中間にあたると思っていただければいい。

期間は二年間。予科一年と本科一年で成り立っている。歌劇団に入るまでの訓練期間で、ここを卒業して初めて、憧れの宝塚歌劇団に入ることができるのである。

他の劇団でいう、〃養成所〃だと思ってもらえれば、多分一番分かりやすいのではないかと思う。まだ学生なので舞台には立てない。当然ギャランティーも払われない。微々たるものではあるが、授業料を払って勉強させてもらっている身の上なのである。

授業内容は、音楽・舞踊・演劇・教養の四つ。細かく分けると二十科目くらいある。

★音楽
1　声楽（クラシック・ジャズ・シャンソン・カンツォーネなど）
2　器楽（ピアノ・琴・三味線・鼓笛）
3　音楽史
4　音楽通論

★舞踊
1　洋舞（クラシックバレエ・モダンバレエ・モダンダンス）
2　日舞（藤間流・花柳流・重森流）
3　現代舞踊（ジャズダンス・タップダンス・体操）

★演劇
1　朗読
2　台詞（せりふ）
3　演技
4　演技理論

★教養
1　文化史
2　芸術理論
3　時事
4　礼儀作法（茶道など……）

授業も大変だが、一番大変なのは礼儀作法。

詳しいことや細かい事件は後で書くが、ともかく本科と予科では、天国と地獄・神様と乞食くらい身分が違うのである。「女軍隊」とも言われている。この上下関係がすべてだと言っても過言ではない。

合格発表の忙しい一日

こんな大変な学校に、ともかく合格してしまった。合格発表から入学式までの忙しさといったら、半端なものではなかった。蔦（つた）の絡まる校舎の前庭で、ついさっきまでうれし涙を流していた少女たちは、校舎の中に吸い込まれていった。予定人数より二人多い五十二人がこの年の合格者だった。

発表が正午。十二時三十分に合格者

制服（予科生の場合）

全員が講堂に入ると、あっという間に説明会が始まった。もういつまでも喜びをかみしめていることなんてできない。入学式は四月二十一日。この日からわずか二週間である。大まかなスケジュールが発表され、振り向くとそこではすでに制服の採寸が始まっていた。夢にまで見たグレーの制服。「ほんとうに私があれを着ることを許される日が来たんだ！」

しかし感激に浸っている暇はない。

阪急百貨店がその場に来ていて、恐ろしい勢いで採寸をし、名前の書かれた伝票が机の上に積み上げられていく。すぐに次のコーナーに行って制帽を合わせる。レインコート・オーバーコート・夏冬のブラウス・タップシューズ……。数えきれない。

そしてついに袴である。宝塚といえば何といっても緑の袴なのだ。その昔、制服がなかったころは通学も袴でしていたらしい。戦後制服が洋服に変わったので、今では式服といった色彩が強い。袴に黒紋付を着ると第一礼装になる。これは年間を通して式典のときなどに着るので、袷と、夏用の絽と二枚を作る。わが家の場合、ちょっと家紋が変わっているので、家紋帳に見当らず後日コピーを取って郵送する羽目になった。

色物を合わせると第二礼装くらいになる。これもパーティーとか外部出演とか、結構着る機会が多い。これは制服ではなく色や柄は自由なので、私は東京の呉服屋さんで作った。ただし袴用なので袖の長さがちょっと変わっているらしい。黒紋付が一尺五寸、色物が一尺八寸だったと思う。六年間の在籍中に何度か色物を作ったが、いつも不思議そうな顔をされたものだ（現在一尺三寸が普通だそうだ）。

その後、入学式に持ってくるものとか、ありきたりの注意があって説明会は二時に終わった。

ところが三時から入寮説明会が寮のほうで行なわれるという。合格の喜びに浸ってすっかり忘れていたが、私たち東京出身者には寮生活というおまけがついていたのである。

寮説明会

急いで、音楽学校から徒歩で十五分くらいのすみれ寮に向かった。東京近辺出身者が十八人。仙台から来ている子が一人。他に関西地区出身でも、通学が大変な京都などの子が数人。確か合格者の半数近い二十三人が入寮することになった。よく「宝塚ってさぁ、全寮制なんでしょ」と聞かれることがあるのだが、そんなことはない。自宅から通える人は通ったっていいのである。

余談だが、この説明会のとき、びっくりしたことがある。寮の玄関に入っていくと、そこに緑のビロードのワンピースを着た少女が立っていた。「ヨロシクネ！」なんてにっこり笑いかけられて、同期になる人だということが分かった。

十八歳まで生きてきて、世の中に美人という人種がいることは知っていたし、学校の友達にも「美人だね」と言われる人はいたにはいたけど、この人にはほんとうに驚いた。フランス人形

みたいだったのである。美人というものを生まれて初めて間近に見たという感じだった。自分が受けておいてこんなことを言うのも何だが、宝塚の受験要項には一応、「容姿端麗にして将来舞台人に適するもの」とある。それにしても、ここまで完璧な美人が同期では、「うーん。大変なところに来てしまったぞ」とかなりショックを受けた。

しかし彼女も私と同じにスターにもならずに退団し、今ではお医者さんの奥様になっている。宝塚というところ美人なだけではスターにはなれないようである。

話は戻って、入寮説明会。生活することになる部屋を見る。二人部屋で、八畳くらいの洋室、作り付けのベッドとクローゼットが両側にある。やや狭いとはいうものの、新しいしきれいだし収納は多いしまずまずだった。

「今後は親でも部屋に入れませんから、今日ゆっくり見ておいてください」と言われメモを取ったり、寸法を測ったり。これが五時ごろ終わった。「隣の『逆瀬川』っていう駅の前に大きい布団屋がありますから、そこで布団を注文していったほうがいいですよ」と寮長先生に言われて、二十組くらいの親子がまたぞろぞろと布団屋に移動。ようやく布団を注文して、ともかく長い一日は終わった。

こうした雑務があることは頭では分かっていたけれど、結構大変だった。もう一晩宝塚ホテルに泊まるという親子たちと別れて、母と私が東京に戻る新幹線に乗ったのは確か最終電車だった。

入学式までの二週間

東京に戻った私は、まず大学の入学辞退届を出した。何と入学式が（これは宝塚の発表の日とまるで同じ日だった）済んでいるので、私は一応入学したことになり、入学金を返してもらうどころか、教科書代なんてものまで取られた。親は六十万だか八十万だかを捨てる羽目になりブーブー言っていた。

各稽古場の先生にあいさつに行く。方々の友人が送別会を開いてくれたり、あっという間に二週間は過ぎた。その間に入寮のための荷物を作る、レッスンに必要なものをそろえる。ごたごた

朝六時三十分すぎ、門があけられる第二すみれ寮

しているうちにその日は来た。

母は後に友人から「あなた、よく十八歳のお嬢さんを手放す気になったわね」と言われたそうだが、私にも母にもそこまで考える余裕がなかったのかもしれない。目の前のことに追われ、未来への希望だけで胸が一杯で、親元から離れるとかいうセンチな気分はなかった。

いざ入学式

四月十九日、私たち親子は再び大阪行きの新幹線に乗った。二十日に入学式のリハーサルがあるからである。宝塚ホテルに入ると同期になるはずの顔が何人も見えた。みな、ミニスカートをはいている。予科生になると普段着はミニスカートしか着てはいけない規則らしい。噂には聞いていたけれど、まだ入学していないのだからいいのだろうと、ひざ丈くらいのスーツを着ていった私は、慌ててミニスカートにはき替えることになった。他の同期はもうすっかり予科生の気分である。

翌二十日、リハーサルのため学校に行った。「新入生を迎える言葉」というのがあり、本科生の総代が「みなさんも親元を離れ寂しいと思いますが、私たち本科をお姉さんだと思って一緒に芸の道を歩んでいきましょう」なんて言っている。「本科生って厳しいって聞いていたけれど、そんなことないじゃない」なんてばかな私はぼんやりと聞いていた。

その後、本科生からの注意がありますのでと言われ、親は講堂に残ったまま新入生は二階の一室に入った。するとさっきまで「姉と思って……」と言っていたはずの人たちが、いきなりどなっている。何が起きたのだろうと思うと、「早く座りなさい！」とか何だかわけの分からないことを、教室の壁一面に張りついた本科生五十人全員が一斉に言っていた。蜂の巣をつついたような騒ぎである。本科生が優しい姉になるなんていう私の幻想はほんの五分でもろくも崩れ去った。これが毎年行なわれている「魔の二番教室」という儀式だと知ったのはその後だった。

本科生がぐるっと取り囲む、その真ん中に新入生は座らされた。これから規則を教えますと言う。筆記用具を持ってくるようにとは言われたが、教えると言っている規則は大学ノート丸々一冊ありそうなのだ。私はといえばミッキーマウスのついたかわいらしいメモ帳を一冊。まったくの間抜けである。

恐怖で緊張しまくっている新入生をよそに、本科の委員が超早口で規則を

読売新聞社 発売

読み始めた。入ってはいけないお店、通ってはいけない道……。しつこいようだが大学ノート一冊分である。速記でもできなければ写せるわけがないではないか。しかもこの規則は明日の入学式から適用される。徹夜で覚えるしかないんだろうか。中学・高校と特別自由な校風の中で育った私にとっては、大変なカルチャーショックだった。

二番教室から出てきた顔はみな真っ青で、親たちはほんの一時間前、希望に満ちていたわが子のあまりの変わりようにびっくりしたらしい。

上ばきのシューズと手に持つ帽子が整然とそろっているのをよくごらんください

ただし、誤解がないように言っておくが、これは本科生の役目なのである。一年間はこうして予科生に礼儀指導していくのが役目だからである。別に意地悪でやっていたのではないのだ。本科生は団体になるとほんとうに怖かった。今では一期上の中に、親しい人もたくさんいるし、個人的にはよい人ばかりだ。だけど、それが分かるのは劇団に入って個人的に口が聞けるようになってから。神様と乞食ほど身分が違っているうちは分からなかった。

入学式当日、予科生がすでに入った講堂に本科総代のリンとした声が響き渡る。

「本科一同、入ります」

ザッ、ザッ、ザッと軍隊の行進のような音が背中ごしに聞こえ、本科が入ってきたのが分かったが、もちろんだれも振り向かなかった。

―つづく―

（写真提供・筆者）

こうして私は別居した

東京都小平市　森生文乃

先日、わいふ主催の「子育てはつらい！」の会合に参加させていただき、大変面白かったので私も刺激されてついペンをとりました。ただいま別居中なので興味があったら読んでください。

ことの起こりは私が相手に「自分のことは自分でやってよ」と言ったことでした。相手はにわかに顔を真っ赤にし、ナグル、ケル、ものが飛ぶになってしまいました。

今まで言えなかったその一言がなぜ口を突いて出るようになったかというと、私の中で変化があったからです。

きっかけはあるイベントでした。大自然の中で野外コンサートをやるイベントがあり、私はどうしてもそれに参加したいと思いました。でも夫に言えば絶対ダメと言うに決まっているので、夫のいない昼間、置き手紙をして子供と抜け出しました（仕事の取材のためと手紙には書いておきました）。すばらしい大自然の中で、私はほんとうに自分自身の心も体もものびのびと伸ばすことができました。ほんとうに命の洗濯をしてから家へ帰って夫の顔を見たとたん、胸が痛くなって胃がギリギリ、腸がねじれて身動きできず、起き上がることすらできないほど内臓が痛みました。

そのとき私は、ああ自分はこんなにも結婚してるのが嫌だったんだと分かりました。こんなにこんなにイヤなのに、それなのにこんなにガマンしてたんだと分かったら、自分がかわいそうになって泣けてしまいました。こんなにイヤなことを、イヤだということすら感じなくなるくらい自分を押さえ込んで我慢してたら、病気になるか鈍感なオバンになるかしかないと思いました。

すると今まで夫が何気なくやっていた行動で、私も何気なく受け入れていたことの一つ一つがオカシイと感じるようになりました。

例えば私が仕事をしているとき、夫が水をくれと言いました。私は今までのクセでつい立って水をくんでいました。水を渡しながら（ナンデ私が？　変だなー）と思っていました。夫は飲み終わったコップを仕事している私の前に置きました。（ナンデ?!）と私は思いました。人が仕事してんだから自分のコップくらい自分で片付けるのが当たり前じゃないの？　この人頭おかしいんじゃないのと感じたのです。やっと腹が立ってきました。今まではこういう状態を当然と思っている自分でした。

以来夫に向かって、自分のことは自分でやってと言えるようになったのですが、夫のほうは結婚直前まで親と同居していた人ですから、私の変化に対応できず、ナグル、ケルで押さえつけようとしました。

しかし私にとってはコレ幸い。夫が暴力振るったと言えば別居しても大義名分が成り立ちます。だれもモンク言えません。かくして私は念願の別居結婚に堂々と踏み込めたわけでした（バンザイ、今楽しいです）。

別居してみて分かったこと。男の人はよく家事をやらないと言うけれど、あれは女がそばにいるからなのでした。そばに女がいなけりゃ勝手にやるのでした。要は男のそばに女がいつもいてあげてしまうからいけないんです。男が自立するためにはただ単に独りにすればいいだけのことでした。男の自立のために女が手を貸してやる必要なんてない。

子供に関しても同じかもしれませんね。「子育てはつらい！」にもありましたが、数日別れてみると子供ってすごく成長するんです。保育園のお泊まり保育をした人からも同じことを聞きました。やはり子供は、母親がいつも一緒にいてあげてしまうから成長できないってことあると思います。時々いなくなってあげなければ成長できないことってあるみたいです。

皆様、時々夫からも子供からもいなくなってあげてみてはいかがでしょう。案外お互いのびのびできたりして？

（え・山田京子）

カナダの夕陽 ②

清水　ふみ

◆◆◆◆◆ティーンの荒廃◆◆◆◆◆

さて、子供たちが荒廃していくもう一つの原因である家族の崩壊を見てみたい。

我が家の近所をぐるりと見渡しただけでも、例はすぐに挙げられる。

道路を挟んで数軒先に住むメーガンの母親は、病院の看護婦で管理職のポストにある。彼女はしばらく前、四度めの結婚をした（こんなことは、あまり珍しくもないが）。

私たちが現在住んでいる家に引っ越してきたばかりの秋、当時十歳くらいの少女だったメーガンの家では、トラブルがあった。

ある日、夜も更けたころ、どこから現われたのかぞろぞろとティーンが大勢集まってくる。その数、二百は超えていただろう。二階の窓からのぞいていた私は、もはや暴動は避けられないと思い青くなっていた。どのくらいたったのだろうか。やっとパトカーが二台来て、少年少女たちは解散したのである。

数日後、私は斜め向かいの昔教員をしていたというおばあちゃま、ミセス・リーと話をした。多くの退職したカナダの老人たちがそうするように、リー夫妻も今はフロリダに引っ越してしまったけれど、そのとき私はあの夜のことを聞いてみた。

彼女は「もうこんなことは、決して起こしてはいけない」と言いながら、いきさつを話してくれたのである。

メーガンの兄が、パーティーをするというので友人に声をかけた。その友人がまた、友人を誘い、誘われた友人が他のハイスクールの友人を誘う、というふうにして二百人ほどの数になった。もちろん家には入りきらないので、外にもたむろしている。

そのうちアルコールかドラッグでも始まったのか、家具をぼんぼん庭にほうり投げ出した。それに驚き心配した近所の人が、警察に通報したのである。

そのとき勤務中で家に不在だった母親は、後で警察に何と言ったのだろうか？

例の言葉「私の知ったことでない（ノット・マイ・ビジネス）」だったのだろうか？

幸いなことに、その後今日までこのような騒ぎは、起こっていない。

ティムの話は、ほんとうに気の毒だ。

近所に住むアマンダの父親であるティムとは、子供を通して知り合いになった。母親はレストランで働いていたので夕方からいなかった。今まで、彼ほど子煩悩な人を私は見たことがない。ほとんどいつも、どこに行くのにも親子は一緒だったから。

その彼が春から夏にかけて、近ごろの多くのカナダ人同様失業していた。だから暑い夏の日は、夕方になると四歳の娘を連れたティムに、公園でよく会ったものである。

できたばかりのその新しい公園は、木々もなく殺風景なところだった。でも子供たちは、滑り台や砂場ではしゃいでいた。

ビートルズのジョージをもう少し面長にしたようなフレンチ系のティムは、色々なことを話した。長く勤めていたGM（ジェネラルモーターズ）をレイオフになったこと、いつ職場に戻れるか分からず心配なこと、今度アマンダの誕生パーティーにはみんなで「チャッキーチーズ」に行こうなどなど。

八月も末のことだった。いつものように子供たちが遊び疲れて家に帰るころ、ティムがぼそりと言った。「九月の末に、アパートに引っ越すことになったんだ」

突然な話に私は驚いた。

「じゃあ、もうアマンダと子供たちは遊べなくなるのね」

「いや、アマンダは今の家にいるよ。僕が一人でアパートに移るんだ」

一体、どうなっているの？

「ワイフに新しくボーイフレンドができたんだ。彼らは今の家に一緒に住むことになる。アマンダは、母親が引き取ることになったのさ」

私には信じ難いことだった。あれほど子煩悩で優しい父親のティムが、娘と別れて暮らすなんて。

でも冷静に考えてみると、失業中で経済力のない彼が、養育権をめぐって裁判をしても勝つはずがなかった。現実は親子の愛情なんて問題にされない。経済力のない人間に、自己主張は許さ

れないのだから。

弱肉強食のこの世の中、自己主張と「ミーイズム」に明け暮れる今の時代、優しいばかりの人間は、女も男も生きにくくなってしまった。

そんなことを考えているとき、世界の中の経済大国、生き馬の目を抜くような日本のことがチラリと頭に浮かぶ。「リゲイン」飲んで二十四時間戦い続けるという日本の企業戦士たち。

その日本人がいまだに「フーテンの寅」さんを愛し続けるのは、失われたものへの懐かしさなのであろうか。

アマンダは、母親の若いボーイフレンドになじむだろうか？

九月になって職場に復帰できたティムは、その月の末アパートに一人移っていった。

◆◆◆◆離婚で子供は傷つかないか◆◆◆◆◆◆

血縁を重視する日本では、「連れ子」とか「継子」あるいは「継母」などに対する偏見がいまだにあると思う。

ところがカップルの半数以上が別れてしまうノースアメリカにおいては、血のつながりなどにベタベタせず、もっとサラッとした関係でうまくやっていくものだと信じていた。

けれど幾ら個人主義の発達しているこの国でも、人間の感情はさほど簡単なものではない、ということを知らされた。

離婚、再婚の繰り返しによる今一番大きな問題は、「チャイルド（児童虐待）アビュース」である。

義父による養女への性的暴行は、もう社会問題にさえなっている。

両親の離婚で子供たちがどのくらい傷ついているか。

これは身近な人の話である。

東ヨーロッパ系の父親を持つマイクの場合、彼が幼いころ両親が離婚したため、長年母と二人で暮らしてきた。その母親にボーイフレンドができたため、十歳を越えたころ父親に引き取られることになる。

その父にも新しくIというガールフレンドができ、同棲が始まった。

そのころからマイクの荒れ方がひどくなりだした。

友達とけんかして歯を折るまで殴ってしまう。女の子の乗っている自転車の車輪に棒を突っ込んで倒してしまうなどなど。まったく目に余るもので、学校からの呼び出しは毎度のことになった。

その結果は、父親の「これでもか」というほどの体罰である。十歳の少年が、背中じゅうあざだらけになるほど殴られても、訴える母親はそばにいなかった。

そのうち父親のガールフレンドが妊娠し、妹ができた。問題児としての行動は、エスカレートするばかりだった。そうこうするうち、かなり遠い郊外の家に引っ越しすることになり、それが彼にとってちょっとした転換のチャンスになる。

新しい学校は、まだ彼に問題児のレッテルを張っていない。鶏やあひる、豚

まで飼う郊外での生活は、彼を少しずつ立ち直らせた。

数年後、彼らのところに呼ばれる機会があり、田舎の家に一泊することになった。

早朝、夫や子供たちは近くの湖にマイクと散歩に出掛けた。身長百八十センチ近い金髪の好青年になったマイクは、いみじくも夫に語ったそうである。

「Iが来てからダディ(父)は冷たくなった」と。

他の子供たちに暴力を振るうことで、必死に寂しさに抵抗していた十歳の少年の姿が、目に浮かぶようである。

親たちが「たった一度の私の人生」に励んでいる間、その犠牲になった子供たちは心の中で血を流し、暗黙の助けを求めている。そしてその中の多くは、傷ついたまま暴力や犯罪への道をまっしぐらに進んでいく。

－掃除派遣会社の広告－

◆◆◆◆◆女たちの変貌◆◆◆◆◆

傍目から見ていると女性のあり方とその変化ほど、面白いものはない。

ヘタなソープオペラ（テレビドラマ）や芝居を見るよりよほど面白いから、女たちの変わりようを見てごらんと言ってあげたいぐらいだ。

今やメトロトロントを形成する四つの市のうち、三つの市が女性市長によりリードされている。日本で例えれば、東京、横浜などの首都圏の市長が女性ということである。

現在ノースアメリカの女性たちの中に形成されつつある階級制は、三百年もしたらインドのカーストのようになるのだろうか？（ああそれを見るために三百年生きてみたい）

私が初めてナニーの存在に気が付いたのは、数年前のキュービーチでのことだった。

オンタリオ湖を望むその公園で、いかにも東南アジア系の顔をした女性が、白人の子供をベビーカーに乗せて散歩しているのに出会った。

彼女らナニーは、住み込みのベビーシッターである。その多くは安い賃金で、東南アジアとかカリブ海の発展途上国から働きに来ている。

現在、ノースアメリカでは乳児や幼児を抱えた母親も仕事に出るのが当たり前であり、そのほとんどはデイケア（保育所）やベビーシッターを利用している。

デイケアは利用者が多いものの、不便さもある。まず料金が高い。例えば友人の例であるが、半日で帰宅する幼稚園児を午後だけデイケアに預けても、一週間百ドル、一カ月約四～五百ドル（およそ四～五万円、ただし半日）もかかる。

加えて病気やけがで休んだら、他の人に預けなければならない。さらに仕事で遅くなっても規定時間より延長はできないから、二重保育になる。というわけで色々不便さが目立つのである。

そこでナニーが出現する。住み込みのナニーなら病気をしようが、残業しようが、まったく関係なく任せきりにできるのだ。

今やナニーは引っ張りダコで、斡旋者はうれしい悲鳴をあげている。

近ごろの不動産広告を見ていると、「ナニー部屋付き」というものも見るようになった。

次女がまだ幼稚園だったころは、よくナニーに送り迎えされる子供を見たものだ。

「女」としてはきちんとドレスアップし、「職業人」としてはちゃんと仕事をこなし、そのうえ子供の母でもあるスーパーウーマンは、スーパーストレスとも言われている。

あれもこれも手に入れたつもりが、何かを失っていたという失望感（不惑を過ぎた私には、「人生は取り替えっこ」であることを知っているから、「一つのものを得るためには、一つのものを失わなければならない」ことも分かるよ

うになったけれど)。

そんなもろもろの問題も、ナニーの出現によって解決されようとしている。

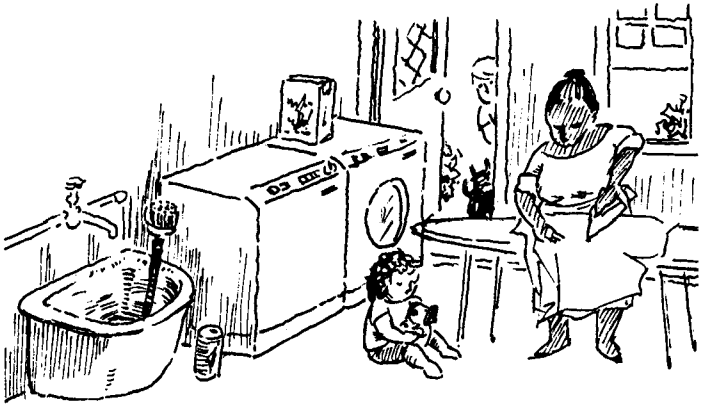
有能な女性たちは家庭や子供に後ろ髪を引かれることもなく、仕事に専念できる時代を迎えるようになった(数年前のアグネス論争ではないけれど、日本のキャリアウーマンたちはいまだに子供に振り回される、あたふたした生活をしているのだろうか?)。

ちょっとしたきっかけで知り合いになったイセラは、カリブ海の島ドミニカ出身のナニーである。目鼻立ちのはっきりした彼女は、若いころ美人だったと思われる。そのイセラも今は三人の子供を故郷に残して出稼ぎに来た、三十八歳の母親である。

彼女の話す夢は、早くお金を蓄えて子供たちと一緒に暮らせるようになりたいということだ。

こんな話を聞いていると、フェミニストがやってきたことは一体何だったのか?と、単純な私は怒りを覚える。平等とか女性の地位の向上とか……。

ほんとうにそれは一部の女性のものにはなったけれど、男性社会の論理そのままに、万事金次第という弱肉強食の男社会の構造を女たちの上にもしっかりと作ってしまった。



今や富と才能に恵まれた女性が、貧しい女たちの犠牲の上にあぐらをかいているのである。

こうしてノースアメリカの家庭の変化は、今もどんどん進行中である。

この激しい時代の動きの中で、取り残されたような専業主婦もまた、不幸に見える。

トロント郊外のベルビル出身のメアリーは、典型的なカナダ人であり、以前住んでいたタウンハウス時代の友人である。

彼女の子供と我が家の長女が同年で、散歩などで行き来するうち仲良くなり、時々ベビーシッターを頼んだりするようになった。

知り合って間もないころ、「チャーリー(夫の名)は再婚なの。だから少し年がいっているのよ」とまだ面識も浅い私に、自分の経歴を開けっぴろげに語るところなど、典型的なカナダ人だなァと変に感心したものである。

最初の結婚に失敗したチャーリーは、

メアリーに家で子供をみてほしいと言っているらしかった。近所の子供を預かったりして、傍目にはその生活に満足しているように見えたものである。

ある日公園で子供を遊ばせていると、「ジャーミー（息子）が幼稚園に入ったら、パートに働きに出ようと思うの」とメアリーが語るのを聞いた。そして夏の終わりころ面接を受け、今は返事を待っている最中だと言った。

秋になっても彼女は働きに出ない。「仕事のほうはどうしたの？」と聞くと、「何も言ってこないから、もうあきらめた」とのことだった。

その後一年くらいたったころだろうか、このときの彼女の口調はまったく違う調子のものだった。

「もう工場（ファクトリー）でも何でもいいから、外に出て働きたい。服だって毎日同じようなものばかり着ていたくない！」

すっかり「バスに乗り遅れてしまった」メアリーの精神的プレッシャーは、かなり強いものだったらしい。これほどまで落ち込んでいるのなら、彼女は外に出るべきだと私も思った。

そのうち我が家も一戸建てに引っ越し、何回かクリスマスカードをもらったものの、メアリーとの音信は途絶えてしまった。

新聞を読んでいると、「リアルウーマン」（伝統的な女性の生き方を支持するグループ）たちが連帯を呼びかけ、専業主婦たちの疎外感を取り除こうとしているのが分かる。

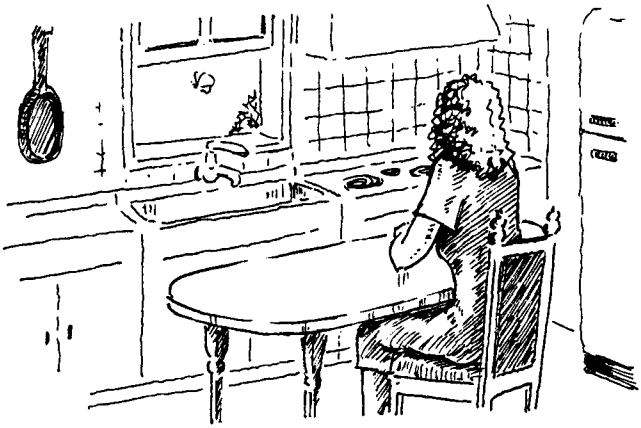
けれど家族も家庭も崩壊しつつある「ミーイズム」のこの世の中で、はたしてどこまでそれが可能だろうか？

家庭が生産の場から離れてしまった現在、専業主婦のように自分の収入を持たない生き方は、次のジェネレーションである娘たちの時代には、もうその存在が危ういだろう。

ぐうたらママの生活に甘んじている私でも、時々考え込むことがある。

本音で語る柴門ふみ女史のエッセイを読んでいたとき、主婦のボーッとした時間が彼女にとって創造力の源泉になる、というのを見つけた。それはきっと、ミヒャエル・エンデが「モモ」をして言わせた、何もしない時間の大切さだと思う。

けれど柴門女史は続けて言う。



主婦の幸福は、競争のない幸福である、と。そして競争のない社会は、共産主義同様停滞するのだ、と（彼女がこのエッセイを書いた当時、ソ連はまだ存在していた）。

けれど共産主義がほとんど滅んでしまった今、専業主婦というものも将来は滅びるのだろうと思わざるを得ない。

時々、私は医療関係の仕事をしている夫を手伝う。それはドクターのところへケースを届けたり、受け取りに行ったりする簡単な仕事だ。でもこれは私にとって、大いに助かることである。「ぐうたらママ」を自認する私でも、世間さま（個人主義が生き方の基本であるこのノースアメリカでも、この言葉は通用するのです）から「何もしてない無能な女」呼ばわりされるのは、魔女裁判にかかるようで恐ろしい。

加えて子供たちから「ママ、どうして働かないの？」と問われたとき、「パパの仕事手伝っているじゃない」と開き直れる。

子供たちだって、収入のない家事は労働のうちでないことを、とっくに知っているのだ。

「主婦は家畜と同じ」と言ったのは、日本のさる有名な雑誌の編集長だった。

でも「人間は考える葦（あし）である」なら、家畜だって考えることはできる。

歌の文句のように「もうどうにも止まらない」というときが私にはあって、コンサーバトリーで子供が一向に上達しないバイオリンのレッスンを受けている最中でも、ノートをとるふりをして、メモをまとめていたりする。

快刀乱麻を断つような文章は書けないけれど、稚拙なものでもよい、「私は私」なのだから。そんな気持ちで書いていたい。

話は少しそれてしまったが、実際のところマイノリティ（少数派）である専業主婦たちは、ほんとうに自信を喪失してしまった。

傍目には快適に見える郊外の住宅地＝ダブルガレージ（二台入りガレージ）にセントラルエアコン、ディッシュウォッシャーが付いている家々の集まり＝を日中歩いてみる。

そこにあるのは「エンプティネスト」と呼ばれるゴーストタウンの姿である。

辺りを走り回るのは、だれもいない家を掃除して歩く「モーリーメイド」（掃除婦派遣会社）の車ばかり。そして夕方になれば、ピザ配達の車が走り回る。

このノースアメリカにおいて、最初に老人たちが家庭からキックオフされた。そして今は子供たちである。

政府の予算カットによるデイケアの閉鎖で、幼児の親たちがその子供たちを議会に置き去りにして仕事に行くの行かないのともめていたのは、最近のニュースであった。

もしも家庭の崩壊というものが定まった進化であるなら、ソ連邦の崩壊のようにトコトン破滅するまで行きつかなければならないのだろうか？

女たち（ラ）は一体どこへ行くのだろう？

―完―

（え・西田淑子）

ホームヘルプ実習

川崎市中原区　和田美代子

老人ホームへ実習生として勉強に通うチャンスがやって来た。

私が今、毎週水曜日にやっている市のホームヘルパーに必要な三百六十時間研修の一環として、社会福祉協議会の事業部の方から知らせが来たためである。

九日間、朝九時から夕方六時まで手弁当での実習は、のんびり家で過ごす習慣のついている私にとっては、なかなかきつかったが、よい経験になった。

私が配属されたホームは、川崎市宮前区にある特別養護老人ホームM荘だ。定員七十名、常時介護が必要で家庭では介護が受けられない人たちが入所している。

オリエンテーションのとき「ここは病院ではなくホームなのだから、よほど重症な人でないかぎり昼と夜の生活をきちんと分けて、寝たきりにさせない方針をとっている」と説明があった。

したがって中での生活はとても忙しい。まず、七時半おむつ交換後離床、昼間の服装に着替え、洗面、朝食、九時半体操、十時午前のおやつ、ここでおむつ交換して十一時四十五分昼食、二時再びおむつ交換の後、午後の休憩でベッドに入れる。三時離床してレクリエーション（歌ったりゲームをしたりする）この後午後のおやつ、四度目のおむつ交換、そして五時半夕食、七時半寝巻きに着替えてベッドへ。八時半消灯、夜中に一回おむつ交換をする。入浴は週二回全員が入る。そのため毎日二十名以上入れるようになる。その他、外来入浴も受け付けている。

自分では何一つできない人たちが、この生活を繰り返すのだから、寮母さんの大変さは想像を絶する。

一方、お年寄りのほうはすべてお任せで受け身の生活のせいか、手足の動かない車いすの人も体調はすこぶるよい。ただ痴呆の人が多く、ウロウロ無意識に歩き回る人、ホーム備え付けのスリッパやコップをせっせと集めて回る人、そうかと思うとあちらでは「おかあさぁーん」と大声で呼び続けている。隣の部屋では、人形をしっかり抱いて独り言を……。ドラマの一場面さながらの光景だ。

寮母さんの仕事に館内の清掃も加わる。彼女たちは朝、自分の当番表を見ておいて、日常の仕事の合間を縫ってこなすのだから、体がいくつあっても足りないのよと、こぼしながら、こまねずみのような動きをしている。

「交代制で休日があるからできるのよ」

と言っておられたが、家庭介護の場合は代わりがいないのだから、こうはいかない。

実習期間、私たちにそれぞれ担当の寮母さんがついて指導してくれた。シーツ交

換、着脱介助、ナースコール、特浴入浴など聞き慣れない仕事を、手とり足とり教わった。どの寮母さんもきびきびしていて、さすがプロだ。

特に感じ入ったのは、一番敬遠されがちなおむつ交換の手際のよさであった。きれいなおむつと蒸しタオルを上手に移動させ、まるで手品でも見ているようであった。

「さあ、やってごらんなさい！」

褒めて感心ばかりしていてもだめなのだ。いざ、私が替える番がきた。それっ！掛け声よろしく言われた手順でやってみる。

「そう、それでいいのよ、なかなか上手ね」

気が付いたらこの間、息をしていなかったらしく終わって思わず深呼吸をしてしまった。

「こんなところで深呼吸するなんて……」と笑われてしまった。それにしても、この要領でおばあちゃんのを替えてあげればよかった、と残念でたまらない。姑（しゅうとめ）は三年前亡くなった。

最難関と思っていたおむつ交換がうまくいったおかげで後に続く仕事も順調に進んだ。食事の介助に至っては、私にご指名が来たりして、いやにお年寄りに気に入られた。一日中姑様と顔を合わせて過ごしていたころには見せたことのない笑顔で接することができた。これも限られた期間の実習と思えばこそだ。

実習最後の日はお年寄りとの会話が主だった。年寄りたちは話し相手をとても欲しがっている。お互いの気心が分かるとせきを切ったようにしゃべり出す。娘のこと嫁のこと、だんだん本音が出て悪口が多くなる。自慢話も出てきた。

お花の先生をしていたというSさん、嫁にいじめられどおしだったYさん、貸家三軒持っているとかのJさん、実家が造り酒屋で、たくさんの人を使っていると話すCさん、庭師のKさんは仕事に行く途中で交通事故に遭いそれ以後半身不随とか。痴呆症の人はよく作り話をするから、どこまでほんとうかは定かでないが、みな一生懸命語ってくれた。

「みなさん。お元気でまた会いましょうね」と別れを告げると、顔中しわにして手を振ってくれた。

実習は終わったが、時々時計を見ては、今は何の時間かなと、思い出している。

地域文庫からの出発

神奈川県海老名市　中西　景子（51歳）

大学図書館で週三回、働き始めてもうすぐ二年になる。大学で司書の資格を取り、卒業後結婚までの三年間、造船関係の資料ばかりの図書室で働いた。間が五年ある三人の子の子育ての二十年。本屋、図書館、読書大好き人間の私は、児童書専門店を見つけて、本の情報を仕入れ、児童文学作家の講演会などを楽しんだ。地域文庫にも、自分からかかわって手伝った。そしてその地域文庫から、私の今の仕事は開かれたと

いっていいと思う。

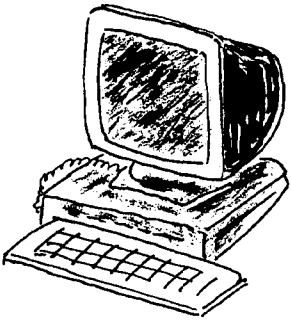
地域文庫に配本に来る市の図書館の職員から、新館が建つのでアルバイトがあると言われ、二十年ぶりのフルタイムの仕事に出た。失敗もあったし、疲れもした。でも本に出会える仕事は楽しかった。公立の図書館の仕事は、どこでもそうなのかどうか知らないが、続けるというのが難しい。そこが終わると、近隣の図書館に仕事ありませんかと電話をして、情報を得ることも、若い人に教えてもらった。

そのうち、偶然新聞広告で見つけた大学図書館に採用された。司書資格、通勤一時間以内というだけの、年齢制限のないのが気に入った。もちろん、臨時採用。十時から四時。週四日勤務というのも、私の希望どおり。田舎にしては、まあまあの時給だった。

夏、冬、春の休みはあるし、私としては、ずっとここで働き続けられたら、それでもいいとも思っていた。けれどまあ、意外なところに落し穴。図書館長の肩書きを持つ教授は、法学を教えているにもかかわらず、話の分からない人で、委員会も開かれず、大学とはこんなところかと失望して辞めた。けれどもそこで働くことで、専門図書館、公共（市立）図書館と違う大学図書館の中身を知ったことが、また、今の仕事に私を結びつけてくれた。

今は母校の大学の図書館で週三日、主に外国雑誌の受け入れの仕事をしている。これは、「仕事ありませんか」と、自分から電話をして得た仕事だ。地方分散を図っている大学の例に漏れず、この大学も湘南の地に開校して三年目。図書館開館前には、仕事があるかもしれないという私の予想は、裏切られなかった。

私の身分は、大学側でなく納入業者側であるが、仕事の場は大学図書館で、図書館内には、正規の職員、常勤・非常勤嘱託、アルバイト、常駐の機械屋さん（コンピュータ関係）、そして私のような納入業者側が数社入り乱れて仕事をしている。発注、受け入れ、検索、貸し出し利用とすべて、コンピュータ管理なので、外国雑誌の受け入れを担当している私も、ほとんどコンピュータの画面に向き合っていることが多い。



総合政策と環境情報という二学部しかないので、その関係の本が多いのだが、タイム、ニューズウィークなどの週刊誌や、マダム、ネイチュアなど月刊、そして婦人問題、建築、芸術、言語、文学なども、少ないけれど網羅して入ってくるので、新しい雑誌に出会える楽しみは大きい。

新しい雑誌をあて名を確かめながら袋から取り出し、コンピュータの打ち込みがすむと、受け入れ印を押し、分類番号を記入して、書架に並べる。そこまでが私の仕事。本大好き人間の私は、飽きずにこの仕事を続けている。

二十年のブランクの後、初めて仕事に出たときは、失敗もたくさんあった。小さな

文房具の一つ一つから、コピーのやり方まで、二十年の進歩は大きくて、戸惑うことばかりだった。けれど、本に出会い、人に出会える仕事の楽しさに比べれば、何でもなかった。先日、出産を控えて仲間の一人が辞めた。好きな仕事なのでいま辞めるの残念だし、二年ぐらいしたら戻りたいと言っていた。

私は、「出産のため退職なんて、うらやましい。私は『目が見えなくなったので辞めさせてください』なんて言うのかな」と笑った。

仕事の合間にやりたいこともたくさんあるので、週三回のちょうどよいアルバイトは、あと五年、できれば十年続けたい。

「今の若いもんは」と言うなかれ

千葉県市川市　宮　千鶴

まだ証券不祥事がこれほど社会を騒がせなかったころ、某証券会社の支店でアルバイトをすることになった。いわゆる一般事務というもので、営業マンの補助的事務並びに雑用が主な仕事であった。

当初、専業主婦から脱皮し、十五年ぶりに味わう社会の空気に、結構気をよくしていた。時間的、体力的にも無理はなく、人間関係も悪くない。このままのペースで仕事が続けられればと思っていた。

そんな矢先、世の中は証券スキャンダルの嵐に見舞われた。経済活動の諸悪の根源とまで悪評をたたかれ、一気に評判を落としていったのである。

「どこに行ってるの？」と勤め先を聞かれるのもつらくなってきた。悪事の片棒を担いでいるような後ろめたさ。

心の中にすっきりしないものが生じてから数カ月後、急激に仕事の量が減ってきたころを潮時に、思い切って辞める決心をした。在職期間十カ月。こらえ性がないと見るか、よく頑張ったと考えるか、意見の分かれるところだが、よくも悪くもよい社会勉強をさせてもらったというのが正直なところである。とりわけ、現代の若者の生態をつぶさに観察できたことは大きな収穫であった。

支店は営業活動が中心のところ。したがって第一線で働く二十代の若者が多い職場である。中には高校を出たばかりの十代の女の子もいて、雰囲気は華やかだ。仲良く一緒に仕事をしていくためには、こちらの心構えも必要になる。〝おばさん〟はとかく説教口調になりがちだ。ここをまず気をつけよう。話題はなるべく所帯じみないように。などなど、数項目を肝に銘じて仕事に励んだ結果、人間関係はおおかた円満であった。そして若者たちと気軽に会話を重ねていくうちに新たな発見をしたのである。

若い営業マンたちは実に優しいのである。証券営業マンのモラルが問われているが、彼らの内なる人間性は捨てたものじゃない。現代っ子らしい明るさはどこにでもいる青年とも変わらないし、上司にはっきりものが言えるのも好ましい。また営業マンにありがちな競争心や足の引っ張り合いといった生臭さもあまり気にならない。アルバイトの女性に接する態度も紳士的かつさわやかであった。年上の私から見ると、とってもかわいいやつらなのである。

問題は彼らの業績が即刻我が身の勤務評定につながる中間管理職やその上司たちにあるのである。若者たちは彼らのもとで、企業組織の中で忠実に仕事に励めば励むほど、世間の不評を背負わされる宿命にあるようだ。中でも性格がおとなしく、より良心的な者は強引な押しがきかず、営業成績も振るわないようだ。顔つきにも明るさが欠けるが、私と交わす会話にはにこやかに対応してくれるのがうれしかった。

女の子たちも想像していたより印象がよかった。仕事はテキパキと片付けていく。年上の私にはこちらが気の毒に思うほど気を遣ってくれた。

例えば、一時間遅れで席に着く私のために改めて一人分のお茶を入れてくれたり、一時間早い帰社時間に仕事を合わせてくれたりと、心配りが細やかだ。退社間際には昼食をともにできるよう、交代で時間を組んでくれるところなど心憎いばかりである。彼女らの思いやりに思わずホロリとさせられるひとときであった。私がOLであったころ、彼女らにふさわしい自分であっただろうかと自問するに、恥ずかしながら否である。

「今どきの若者は」とだれが言えようか。少なくとも私には言えない。マスコミや周囲の大人たちは、街中を派手な服装でかっ歩する若者や、わけの分からぬ造語で会話を楽しむ彼らの表面的な部分をとらえて評価を下してはいまいか。しかるべき場所では、与えられた任務をまじめに果たし、清々しい良心を備えた若者がまだ大勢いることを知ってもらいたいものである。

世代が代わるたびに、前世代の大人たちは次の世代の若者を一まとめにして「今の若いもんは！」と言いたがる。ちまたにはまゆをひそめたくなるような若者も多い。しかし、いつの世も、どの世代にも問題人間はいるのであってそれは若者に限ったことではない。

今回のアルバイトの経験の中から、若者に対する認識を改めることができたのはうれしかった。

（え・田沼千恵）

自費出版は〝わいふ〟へどうぞ！

〝わいふ〟編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょう。

平成おったまげーション

④

西田淑子

1位 日本

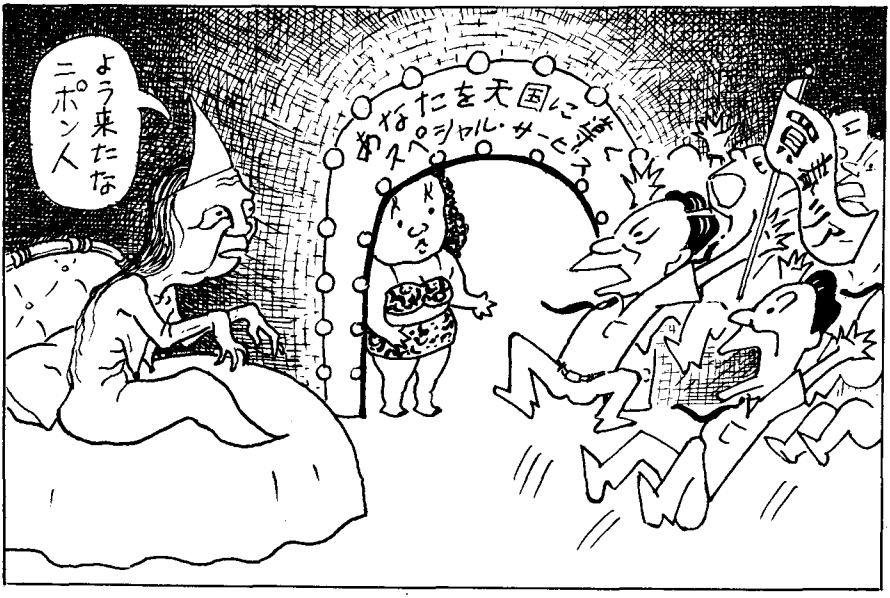
2位 チュニジア

3位 イギリス

地雷だ！

・PKO ―カンボジアにて自衛隊、地雷撤去作業指導に活躍す

・従軍慰安婦 ― さまよえる従軍慰安婦の霊



待合室

千葉市美浜区　大野　幸子

待合室の母親たち

ある日、小学校二年生になったばかりの三女が、久しぶりに熱をだし、行きつけの小児科医院へ連れて行った。

いつ行っても親子連れで混雑している待合室には、六、七組の親子が、診察の順番を待っていた。子供に本を読んでやったり、ぐずる子を背におぶったり、あやしたり、小児科の待合室の見慣れた光景であった。それぞれ、病気の我が子を治してほしい一心で、じっと番を待っている母親の気持ちは、一様に同じものである。

娘は三十八度以上の熱のせいか、長いすに座るというより、私のひざに頭をのせ、体をすべて母親に預けている。私は「もう少しだからね……」「何が食べたい？　終わったら、何でも好きな物を買ってあげるから、もう少し我慢してね」

娘の頭をなでながら、ふと、日常の中で、唯一いま、優しくなっている自分に気が付いた。それは、私だけなのであろうか、この待合室に来るときは、いつもそんなことを思うのである。

家事と仕事の毎日では、忙しさにかこつけ、元気な子供たちに感謝はしつつも、こうした言葉を口にしていない自分を思い知る。具合の悪い我が子をいとおしそうに抱き抱え、まるで「私は、こんなに子供を愛しているのよ。私はとて

も、優しい母親なんだから……」と、言わんばかりに。病院の待合室はそれを態度で示すことのできる唯一の場所なのかもしれない。

そんなことを思いながら、順番を待っていると、三、四カ月の赤ん坊（男の子らしい）を抱き、三歳ぐらいの女の子を連れた母親がドアを開け、入ってきた。母親は早速、窓口で受付けの手続きを始めた。女の子は、スリッパ置き場から子供用の小さなスリッパを取ると、足には履かず、両手に大事そうに持って、かわいらしい声で「ママ、黄色のスリッパがあったよ」とうれしそうに、母親に見せにきた。おかっぱ頭の、ポッチャリとしたかわいらしい女の子であった。母親は、用紙に記入することに一生懸命で、子供に目もくれない。

やがて、あきらめた女の子は、窓の下の長いすのほうへ行き、前からその場所に座っている親子の間に割り込んで、立って外をながめ始めた。そして、何を思ったのか、そこの男の子を足でけりだした。「だめー、ここは、めぐのぉ……めぐのぉ」きっと、めぐみという名前で、この場所が気に入ったのだろう。その男の子の母親は不機嫌そうな顔をしながらも、「やめようね」と優しく言った。女の子は「やだ、やだ」と叫ぶと、母親のもとに行った。母親は、そんなこととは知らず、「うるさい！」と一言、投げ捨てるように言った。その後も、何度となく母親に話しかける子供に対し、静かにするように言うだけであった。育児に追われ、赤ん坊の体の具合だけが気になるかのように、化粧っ気のない顔は、小さい赤ん坊にだけ向けられていて、女の子にはほほえむことを忘れてしまったかのように見えた。

私はやがて我が子の名前が呼ばれたので奥の診察室に入り、短い事務的な診察を受け、再び、薬をもらうためにもとの

待合室に戻った。すると先ほどの女の子が大声で泣き叫ぶ姿が、一番に目に入った。母親も、周りを気にもせず、大声で子供をしかっていた。

「なんで、あんたは、そんななの……おまえは、バカじゃないの」と言いながら、おしりをピタピタとたたいている。女の子は、ただ「やだ、やだ」を繰り返し、時々「キィーッ」と悲鳴に近い声を発している。

発しながら、タタタッーと待合室の隅から反対側の壁に向って走り、走っては、その壁をたたいていた。自分の気持ちのやり場のなさをどう表現していいのか、ただ怒るだけの母親への当て付けなのか……待合室の全員の目が、その親子のやり取りに注がれている。

母親は今度は、「先生に注射をしてもらうからね！」「昨日、こんな大きなゴキブリがいたよ、泣きやまないと、めぐのところに飛んでくるからね」と得意気に言う。子供は、言われるたびに悲鳴を発して泣き続けている。

周りの人たちは、見て見ぬふりをするか、「うるさいなあ」と言わんばかりに顔をしかめている。

優しくなかった私

私はふと、昔のことが強烈に思い出された。私にも、あのような時期があったのだった。

最初の子が生まれた後、二歳三カ月違いで二女が生まれ、それまでは長女をお人形さんのように大事に、ただかわいいかわいいで育てていた私が、ほんとうの育児の大変さを知ったのである。

まだ何といっても幼い長女、手のかかる二歳の子供がいるのに、下の子が生まれ、忙しい毎日の中、うっとうしくてたまらなく思えた。病院通いの頻繁な二女の子育てで神経はクタクタ。「あなたは、お姉ちゃんになったのだから」と、ことあるごとに長女に言い含め、甘えさせる余裕を与えなかった。

子供には、平等の愛情がもてる。それは今だからこそ言えることであって、育児に余裕のなかったそのころは、小さな手のかかる赤ん坊に、全エネルギーが注がれていたのである。

育児書や、その他の雑誌に書かれているように、「下の子ができると、上の子はやきもちや不安を抱くので、時間が許すかぎりスキンシップを……」そんなことは重々承知はしていたし、精一杯、育児書どおりにと心掛けていたつもりである。でも抱き締める回数よりも、怒る回数のほうが多かったのも事実である。寝不足続きの毎日のせいか、非協力的な夫に対する当て付けだったのか、私の上の子への接し方は、日ごとに厳しくなっていた。

しかしそんな私にも、自分を見直す出来事があった。見直すというより、目が覚めたといったほうが妥当といえるチャンスがあった。

確か二女が生後二カ月めぐらいになったある日の夕方、団地の階下のポストへ新聞を取りに行こうと思い、テレビに夢中になっている長女へ「ママ、新聞を取ってくるから、すぐ戻るからいい子で待っていてね」と。娘は「ウン」とうなずき、再びテレビに見入った。

五分ほどして部屋に戻り、ドアを開けるとすぐに二女の泣き声が耳に入った。

その泣き声がいつもと違うのを本能的に感じて部屋へ行くと、長女が赤ん坊の

金井淑子
フェミニズム問題の転換
女の生きる場へ向けフェミニズムの明日を語り続ける。2369円〒260

B.A.カー／清水久美 訳
才女考
〈優秀〉という落とし穴　人生に意欲的な女性達に。　2575円〒310

江原由美子 編
フェミニズムの主張
性の商品化など4つのテーマを選び，議論を尽くす。　2781円〒310

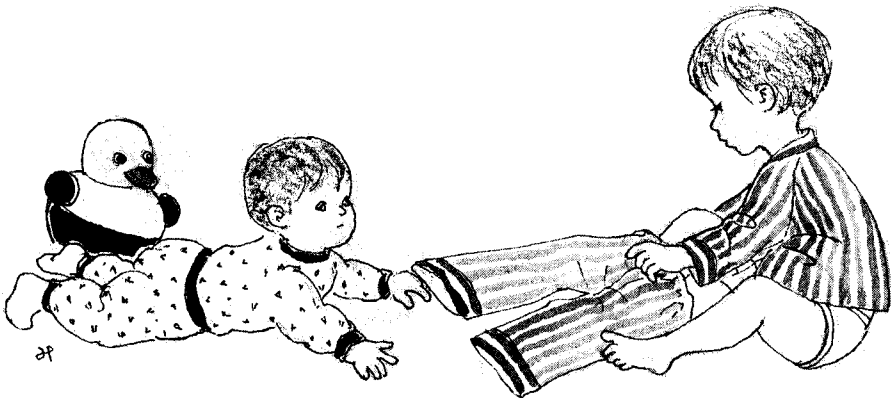
ハルダッハ＝ピンケ他編
木村育世 他訳
ドイツ/子どもの社会史
1700－1900年の自伝による証言
子ども時代の資料集。7725円〒310

ベック＝ゲルンスハイム／香川訳
出生率はなぜ下ったか
ドイツの場合　男女平等の上に築く家族の未来を展望。3090円〒310

現代女性作家研究会 編
現代イギリス女性作家を読む
①フェイ・ウェルドン／②アニタ・ブルックナー／③P．D．ジェイムズ／④バーニス・ルーベンス／⑤アンジェラ・カーター
46判上製カバー装■内容見本呈
全5巻完結――――2369円〒260

国際女性学会 編
〈女と仕事〉の本 1・2・3
1945～1990年までに出た本の目録
全3巻完結①②各2060円③2472円

*定価は消費税込みです。
勁草書房
東京都文京区後楽2－23－15
☎3814－6861　(振)東京5-175253



上に馬乗りになって、「泣きやみなちゃい」と大声をはりあげていた。私は思わずヒステリックに、「何しているの！」とどなると同時に、上の娘を、あの小さな娘を思いっきりはねのけたのである。

娘はびっくりして泣きだした。そして部屋の隅へ行き、手で頭を押え、かすかに震えている。子供の目に映った母親の形相が、あまりにもすさまじかったのであろう。

「あんたは、妹を殺すつもりなの！」

もう頭に血が上った私は、まだ二歳の子供を大声でなじり、頭を押える手をピシャ、ピシャとたたいていた。そして「やだ、やだ」と言いながら、泣き続ける娘をにらみつけていた。

そのときなぜか、私の心に、以前母が言った言葉がふいによぎったのだ。

よみがえった母の言葉

「カーッとなったり、自分の気持ちが抑えられなくなったとき、まず子供の手でもいい、足でもいい、じっと見てごらん。なんて小さな手なんだろう、なんて小さ

お友達に〈わいふ〉をおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

〈わいふ〉年間分をプレゼントにお使い下さい

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

な足なんだろう、手も足もこんなに小さいのだから……きっと、そう思うからね」

私は、おびえて泣いている娘の手を見た。まだたたかれるのではないかと、頭を必死にかばっている手を見た。さっきたたかれ、赤くあとの残っている手は、なんて小さく、幼くかわいい手ではないか。

私はその手を見ているうちに、お姉ちゃんになったとはいえ、まだまだ分別のない幼い子供を、ヒステリックになじり、たたいた自分が情けなくなった。無性に悲しくもなった。

私は、娘を抱き寄せ、声を出して泣いた。

「ごめんね、ママは鬼みたいだったね、美樹ちゃんは、赤ちゃんが泣きだしたんで、あやそうとしていたんだね」

と泣き泣き言葉にすると、娘は、母親がなぜ急にしかることをやめ、優しくなったのだろうと不思議そうな顔で母親を見上げていた。私はピタリと泣きやんだ娘を、再び二、三度強く抱き締めた。

赤ん坊はそんなことは知る由もなく、おなかがすいたのであろう、必死に口元へ手を持っていこうとしていた。

「さあ、赤ちゃんにおっぱいをあげなくちゃね。ピッちゃん（長女）にも、おっぱいをあげようかな」と言うと、娘は照れたように笑った。

その後も何度か私は鬼と化す機会があったが、そんなときは必ずといってもいいくらい、子供たちの手を見た。すると、不思議と気持ちが落ち着き、あの日のことが頭に浮かび、自分で自分が恥ずかしくなるのだった。

その長女も今では十四歳。手も足も私より大きくなり、モーニングシャンプーやら、原宿より渋谷のほうがステキだとか言う年ごろになった。

そして妹も二人となり、長女としてのかんろくも備わってきている。

そんな昔の思いに浸りながら、私の目は待合室の泣き続ける女の子の顔を凝視していた。すると、その子の顔と十二年前の長女の顔とが重なって、再びあの日の感情がよみがえり、胸が締め付けられるほど悲しくなった。他人の子であるその子を、いとおしいと思った。無性に抱き締めてやりたい衝動に駆られた。

でもそんな感傷も、受付で呼ばれる名前で、現実に戻った。

薬をもらい精算を済ませ、その親子の前を通り出口へと向うとき、その母親と目が合った。彼女は、大声を出し続けていることが急に恥ずかしくなったのか、ニコッと照れ笑いをして見せた。私も、笑顔で返した。

「まだまだ大変だけど、頑張ってね。そして、カッとくることがあったら、子供の小さな手を見てあげてね」と心の中でつぶやくと、私は今度は女の子の顔を見た。今は泣きやんでいるその子は、あまり見詰められているので、戸惑った様子だった。私は、思わず「バイバイ」と低く手を振った。数秒間、間をおいて、その子はつられたように手を振った。その手は、小さくてかわいい手であった。あの日の、娘の手のように！

（え・早乙女光子）

女性はそのとき逃げられるか

匿名

女性がセクシャルハラスメントにあった場合について、「ほんとうにいやならば、何としてでも避けられたはずだ」という主張を耳にすることがある。

しかし、実際に多くの普通の女性にとって、それがたやすいことなのかどうか、私には疑問だ。

二十歳のとき、思い出すのもいやな、こんな経験をした。

強引に押しまくられて

大学生だった当時、先輩のHが私に恋をした。しかし、私自身は彼を男性として好きだと思ったことはない。こちらは先輩の一人としか思っていないのに、勝手に相思相愛と思われるのは困惑のタネでしかなかった。

あるとき、もう私を誘うのはやめてほしいと、はっきりと彼に言った。

Hは荒れた。私の不実をなじり、往来の真ん中で私の頬を殴りさえした。しかし私は彼を愛しているそぶりを見せた覚えすらないし、彼の強引さに引かされて通り一遍の付き合い方をしていたにすぎないのである。もちろん、体の関係などなかった。

私は心底恐ろしくなった。こんなことでは何をされるか分かったものではない。それ以後、決して彼に会わないように用心に用心を重ねた。

数カ月たった三月末、久しぶりに電話がかかってきた。

「明日、M市に赴任するんだ。君のことはきれいにあきらめたけど、最後にちょっとだけ会いたいんだ。時間はとらせないよ」

Hはある大手の新聞社に、記者として就職したのだ。

会おうか会うまいか、瞬時ためらった。しかし一時はいやな気持ちにさせられたとはいえ、色々なことを教えてもらった人で

はある。さっぱりと水に流して、いい気分で門出を祝ってあげてもいいのではないかと思った。

この大甘な気持ちが、あとでどれほど悔やむ種になるか、そのときには知る由もなかったのである。

銀座で会ってお茶を飲み、もう帰ろうとしたとき、「もうちょっとでいいから付き合って」と、Hが言った。折り悪く雨が降ってきて、私は半ば強引にタクシーに乗せられてしまった。

「どこへ行くんですか？　私、もう帰らなくちゃ」

タクシーを降りてからこう聞く私に、

「どうしても話しておくことがあるんだ、どうかお願いだからついてきて」

と、Hは気味悪いほど真剣に言った。

雨足はますます強くなり、まだそんな時刻でもないのに、辺りは薄暗く、道路には人影もない。運の悪いことに、この日は交通ゼネストとのことで、午後からは一切の公共交通機関がストップしていたのだった。何とも異様な気配に、振り切って逃げようにも、腕をつかんでいる男の力には抗しきれない。

交番の前を通ったとき、よほど駆け込もうかと思った。しかし、自分の知人から逃れるために警察へ駆け込むのも変ではないかとためらっているうち、そこを離れてしまった。

この界わいがその手のホテル街だと、そのとき初めて気が付いた。彼はどこやらの家に、無理やり私を引っ張って行く。

「いや！」と私は言って、薄暗い玄関から飛び出した。大粒の雨の中、どちらへ行けばいいのか分からない。靴底がつるつるすべり、足元が乱れる。まごまごしているうちに再び捕まってしまった。

「お願いだ。命をかけているんだ」

それが何を意味するのかもよく分からないまま、私は体がなえたように逃げる気力も失って拉致されるような格好で、また違う家の中へ通されてしまった。

ここがいわゆるラブホテルというものなのかと、胸もつぶれる思いだった。様式は和風で、明るく灯のともっている控えの間と、その奥にふすまを閉められたもう一間。その中がどうなっているかは、想像するのもおぞましかった。

「今日はもう帰さない、君が僕のものになるまで、絶対に。もう決めたんだ」

ひきょうだわそんなの。あんまりじゃない。ひどい。ひどすぎる。しかし私は恐ろしさのあまり泣くことすらできなかった。

私はほんとうに今晩、この生理的嫌悪す

ら覚える男に、今までだれからもされたことのない、恐ろしいことをされてしまうのだろうか？　この期に及んでも、私には信じられないことだった。一体なぜこんなことになったのだろう？　彼はもうあきらめると言ったのではなかったか。

もちろん抵抗した。哀願もした。しかし無駄だった。殴るけるこそしなかったものの、いかにしてもドアの外へ出してはくれなかった。そしてとうとう私は折れた。何より、一刻も早く家へ帰らなければ、という気持ちで一杯だったのだ。

さらに言うなら、この場合の恐怖というのは、これから起こることへの強い不安から生じているのである。それから逃れるには、もう最悪の恐怖そのものの中へ身を投じてしまうしかない、そんな意識があったのである。

おぞましい時の間、私は、人間てどんなことでも我慢できてしまうんだな、とうつろな頭で考えていた。私は何食わぬ顔で両親の元へ帰るため、一、二時間の時間を稼ぐ代償に体を売ってしまった娼婦なのだ。

おかしなことだが、男性は興奮しすぎるとかえってできなくなるものらしい。この夜のHがそうだった。結局、心の中はともかく、体自体は入ったときと同じく、無傷のままでその家を出たのだった。だがそんなことは大した差ではなかった。私は確かに汚されてしまったのである。

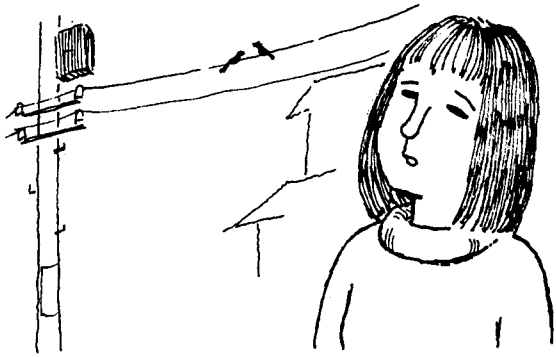
Hはそれでも、私を手に入れた自信と喜びで一杯の様子だった。今にも私の家にプロポーズに乗り込みかねないほどに。抜け殻のような私の絶望感や屈辱感、嫌悪感にもまったく気付いていなかった。

家についてふろへ入り、私は幾度も体を洗った。しかしいつまでたっても汚れた感じはなくならなかった。

優柔不断はどこから？

翌朝は打って変わったよい天気だった。

用事を果たしに外へ出て、心地よい春風に触れたとたん、初めて涙が出た。この美しく清らかな世界、昨日まで私のものだったこの世界に、私はもはやいることを許されない。私は自分を裏切ったひきょう者、お日さまに顔向けできる人間ではなくなってしまったから。



自分を欺いたというそのことが、それからの私を日夜さいなんだ。

「どうしてあのとき、本気で逃げなかったのだ。意気地なしめ！」

「隣の部屋へ行く前に、なぜあいつの舌をかみ切ってやらなかったんだ」

などなど、四六時中後悔していた。

しかし、やはり逃げるのは難しいことだったのだ。恐怖にかられている人間にはま

ったく冷静さがない。

しかもこうした場合、女のほうには事を荒立てまいという理性だけが異常なくらい働くのである。もしこれが泥棒などだったら、何としてでも助けを求めて悲鳴をあげただろう。だが、他人からだらしのない女と思われたくないあまり、私にはそれができなかった。

当時は今以上に性道徳は女に厳しく、性的トラブルを起こせば、必ず女に非があると決めつけられた。

警察ざたになって、例えば両親に知られでもしたら、もう私は自由に行動することすら禁止されてしまうだろう。それが恐ろしかった。

確かに相手の舌をかみ切ることが頭をよぎったのは事実である。

それもできなかった。

私はHが貧しい家の出で、下に弟が二人いることも知っていた。彼は一家の誇りだったのである。立派な職業について、明日からは新しい人生の門出だというのに、ラブホテルで相手に舌をかみ切られたなどという醜聞を起こせば、この男の一生は台なしになってしまうだろう。いわば惻隠の情を起こしてしまったのだ。

お人よし。大ばか。人に言われなくとも、自分が一番よく知っている。

レイプの被害は、顔見知りの間で起こることが多いという。女は、相手がわけの分からぬ魔物に変身するそのときまで、相手を人間と信じているのだ。

その後、三日にあげずHからは「愛情深い」手紙が届いた。私にとってはへどが出るような愛情深い手紙が。

ある日、ちょうどだれもいないときに電話がかかってきた。あらゆる拒否のせりふを投げつける私に、Hが言った言葉は、決定的に私を打ちのめしてしまった。

「でも僕は、君がほんとうにいやだったのなら、あんなことはしなかったよ」

「何ですって!? 冗談じゃないわ。私ほんとに言ったじゃない、いやだって。なんてひどいことを……」

何というひきょうさだろう。Hは、私に選択権を与えていたというのだ。私が許したのは、私の意思によるものだというのだ。

支離滅裂な電話を切った後、私は、Hに「ほんとうに私を愛しているなら、あなたは死ぬべきだ。そうでないかぎり、私は恐ろしくて生きてなどいられない」という趣旨の手紙を書いた。それですべて終わりだった。

確かに言い過ぎたと私も思ったが、幸いHは死ぬこともなく、これだけは受け取ってくれ、と便せん四百枚にも上るラブレターと、私のために買ったという幾つかの品々を送ってよこした。汚らわしいとしか思えず、それらは即座に捨ててしまった。

当時に倍する年齢になった今、やはり二十歳の自分を責めるのは酷だと思う。まだ恋も知らなかった女の子には、あまりにもひどい状況だったのだ。他人（親も含め）に知られて傷つくまいと焦る気持ち、そして相手が真剣なだけに恐ろしいほどの緊張した空気、それから生じる恐怖感。こうした中で、物慣れない女の子がどれほどほんろうされてしまうものか……。

男の解釈におどろく

この事件について、数年たってから私は

ある男友達に、「友人がこんな目にあった」と話してみた。

彼はこんなふうに言った。

「かわいそうだとは思うけど、でも、絶対に逃げられないなんてこと、ないと思うけどなあ。その子、ちょっとばかなんじゃない？」

「そういうけどね、女はとても冷静に行動なんてできないわよ、こんな場合。後で考えれば『ああすればよかった、こうもできた』って、彼女だって死ぬほど後悔したって言ってたわよ」

「だけど、その男だって、本気でいやならやめた、って言ったんだろ。僕だって、幾ら好きでも、相手がいやならそんなことしないよ」

男というものは、こうした行動がいかに女性を恐怖に陥れるものか、ほとんど理解できない。相手から見れば悪魔に変身しているのに、自分ではまっとうな人間だということをつゆほども疑っていないのだ。また、いやよいやよも好きのうち、という得手勝手な妄想を信じているものらしい。

また、最もコワイのは、彼（ごく一般的なフツーの男）が、こんなことを言い出したことだ。

「でも、その男もすごく傷ついたろうなあ。そいつの気持ち、僕よく分かるんだよ。ほんとに好きなら、力ずくでも奪ってやりたい、そして思い切り愛してやりたいって、男ならみんな思ってると思うよ。たいていは、そんな勇気ないけどね」

勇気とは恐れ入る。

洋の東西を問わず、歴史や芸術の中には略奪婚が実によく登場する。リューベンスが描いたケンタウロスにさらわれるニンフの顔には、驚きはあっても、恐怖はない。

つまり男にとっては、力づく（略奪、レイプ）は、ロマンであり、女に対する崇高な愛の行動なのだ。

女がその男を愛しているなら、それも楽しい前戯だろう。

しかしそれが一方通行なら？　結果は言うまでもないことであろう。

女を性欲の道具としてしか見ないセクハラについては、およそ良識ある男性なら否定的だ。しかしながら「これほど愛しているんだから、分かってくれ」と言いながらの狼藉（ろうぜき）については、まだまだ許されてしかるべき、と内心思っている男がいるのである。

半年間、悔恨、屈辱、罪悪感に悩まされ、一時はげっそりとやつれ果ててしまった私にも、やがて解放される日が来た。

長くつらい夏休みが終わり、初めて学校へ行った日、友人たちが口々に言った。

「あらっ、すごくやせたのね。何だか随分きれいになったみたい」

「ねっ、だれか好きな人ができたんでしょ」

とんでもない。しかし友人たちの屈託のなさは、若い私の心に何か新しい希望を与えてくれた。自分でも思いがけないほど速やかに、私の心からは、忌まわしい悩みの日々が消え去っていった。

そして幾月もしないうち、もう自分にはできないだろうと思っていた、ほんとうの恋をした。彼とはとうとう結婚までしてしまったのである。

ただし性の現場での男の身勝手な話を聞くと、他人事であっても私の心にかつての痛みが戻ってくる。

（え・西田淑子）

読・ん・で・み・ま・し・た

農文協健康双書

お産がゆく

小産時代のこだわりマタニティ

きくち さかえ 著

東京都八王子市　和田　好子

鎌倉時代の絵巻物で、出産の場面を描いたのを見たことがある。

板敷の部屋の真ん中に産婦がしゃがんでいて、回りを数人の女たちが取り囲んでニコニコしている。今や子供が無事に産み落とされたので、一同ワッと喜んだ瞬間なのである。部屋中にボロ布が散らばり、部屋の外では夫らしい男が弓を持って弦をはじいている。鳴弦（めいげん）といって魔よけのおまじないなのだ。

腰を後ろから支えてもらって、しゃがんでお産（座産）をするのは、古い昔から明治以後までも続いた日本の習慣だった。

仰臥して産むようになってからも、自宅出産がほとんどで、病院出産が増えたのは昭和二十年の敗戦以後、社会の近代化が本格的に始まってからのことであった。

同時にお産で生命を落とす母子が非常に減ったので、病院出産は安全だと、みなが病院で産むようになった。

衛生観念の薄いころの自宅出産よりは確かに安全だったろうが、それから四十余年、医療は進みに進んで人工的になりすぎた感がある。

ある日、ある時間に、病院側の計画に従い、陣痛を起こさせて産ませてしまうというのが普通になった。管理出産だ。

お産はそもそも自然なもの、産む力と生まれる力をもっと信じてよい、という立場から、ラマーズ法その他自然な分娩が見直されるようになってきたのは最近のこと。それも色々な方法がある。

本書は多様化しつつある出産の仕方を、網羅的に紹介しており、これから産もうという人には非常に参考になるだろう。ラマーズ法以後の新しい流れには、ヨーガや温水出産、助産婦が出張しての自宅出産など、興味深いものが多々ある。

農山漁村文化協会　一二五〇円

連載9

私の愛する外国人

カウンセラーのはじご生活

新井　ひふみ

私が初めてカウンセリングと名のつくものを経験したのは、仕事と新婚生活の板挟みにくたびれ果てていた仙台時代のことだ。何もかもうまくいかず、毎日原因不明の冷や汗が流れるような状態で、国立仙台病院神経科のドアをたたいた。当時の精神状態は、私にとってそれまで経験したこともないほどの落ち込み方だった。しかし、診察にあたった医師は私の話を聞き終えると、いとも簡単にこう結論を下した。「問題はあなたの頭の中にではなく、外側にあるんですよ。自分に合わない仕事をしていれば、それが原因で気分が落ち込むのは当たり前でしょう。状況を改善したければ、生活を変えること。もっと自分を大切にすることですね」

病院の門を出た私は、医師から言われた『自分を大切にする』とは一体どういうことなのだろうと考えあぐねていた。しかし彼にとって『患者』となるのは、「頭の内側」に問題がある人であり、その意味で私は『正常』なのだというメッセージは、しっかりと理解することができた。結局、新聞記者生活を辞め、夫の故郷カナダに渡る決心をした背景に、このときの医師の言葉があったことは否めない。

さてトロントでの生活に再び四苦八苦していた私は、夫に今度は夫婦二人でカウンセリングを受けることを申し出た。カウンセリングは保険適用外なので、一回に数千円から一万円もの費用がかかることは聞いていたが、お金で解決がつくことならば、日本でもらった結婚祝いを全部当ててもい

トロント大学語学クラスの友人と

いとまで私は思い詰めていた。夫のほうも結婚生活が低調なことに気付いていたから、早速電話帳をめくってカウンセラー探しを開始した。彼はそれまでカウンセリングを受けた経験がなかったが、友人たちの話などから、結婚生活に問題があれば『マリッジカウンセラー』に行くのが当たり前だとの認識はあったようだ。

何か所にも電話したあげく、彼が見つけてきたカウンセラーは南アフリカから移住したばかりのインド系女性だった。私たちが国際結婚カップルであるため、その相談を受けるには『異文化間問題』に理解のある人物が好適とのことで、複数人種問題に揺れる南アフリカで、しかも少数民族として暮らした経験をもつ彼女に白羽の矢が立ったのだ。また移住早々でクライアントの数も少ないことから、料金も割引でいいと言ってくれたことも、この女性、ミセス・ラバットに決めた理由の一つだった。日本からカナダに戻って二カ月、まだ定職を持たない状態だったから、少しでも安いに越したことはなかった。ちなみに彼女が提示した料金は一回六十分で四十ドル（当時の交

換レートで約五千円)、相場の三割から五割引きだった。

ミセス・ラバットの家は、ダウンタウンからバスを乗り継いで一時間以上もかかる郊外にあった。冬のさなか、体の心まで冷えきるような季節。二人の間の問題を解決するためバスに揺られていく私たちの間には、妙な連帯感のようなものがあったことを思い出す。

カレーのにおいが漂うリビングルームに通され、中年の優雅さを漂わせた彼女から、「何が問題なのかしら」と尋ねられたとき、私はそれまで抑えてきたものが一挙に吹き出したかのように、わっと泣き出してしまった。何がつらかったのか、そのときは分からなかったが、言葉の通じない国に来て、にっちもさっちもいかない状態が重荷だったのだと、今になれば思う。

「解決しなければならない問題があるみたいね」彼女は優しく言うと、私たちの経歴を尋ね始めた。「お友達はいるの?」と聞かれても、カナダに来て早々の私に友達と呼べる人がいるわけもない。そのころ通っていたトロント大学の語学クラスで数人の知り合いはできたものの、深い悩みを気軽に話し合える関係ではない。それに、同じクラスの日本人はみな短期留学に来ている人たちだったから、カナダに根を下ろさなければならない私の思いを理解してもらえるとは考えられなかった。

「つらいでしょうね。この二月という季節はカナダ人の間でも一番自殺率が高いくらいだから。気分が落ち込んでも当然なのよ」カナダに来て以来、他人の間で肩身狭く暮らしている感じだった私は、つたない英語に一生懸命耳を傾けてくれるだけでもうれしくて、涙が止まらないのだった。

(あれから四年半たち、冷静に振り返ってみれば、当時の私がほんとうに必要としていたのは親身になってくれる友人であり、ミセス・ラバットは職業としてその役を引き受けてくれたにすぎない。どうして日本の友人に電話をしなかったのだろうと思うが、惨めな気分で孤立感ばかりが募る日々には、故郷の友になどこんな状態を見せられないという見栄もあったのだ。そう考えると、カウンセリングが職業として成り立つ社会は、友達がいない孤独な人間の多い社会だといえる)

その日は結局、自己紹介程度で時間になったが、思いきり泣いたことからくる解放感は思いのほか大きく、私はその後も継続的にミセス・ラバットの家に出かけて行った。最初は夫と二人で、後は私だけでバスに揺られる日々が三カ月も続いたろうか。途中から話の内容は過去の中絶経験や、子供時代のことにもさかのぼった。それが当時の夫との関係にどんな影響を及ぼしているのか私には分からなかったが、つらかった思い出を話し、泣くことで得られるカタルシスは確かにあった。

ある日約束の時間に出かけていった私は、ミセス・ラバットの娘から「母はカリフォルニアに行っています」と告げられた。

どうして私に連絡をくれなかったのだろうという思いが、恐らくは信頼関係の傷となったのだろう。その後私は彼女に二度と連絡を取らなかった。

さらに言えば、そろそろ春がやって来て、私の気分も少しずつ明るくなり始めていたようである。

つらい大学院生活

季節や天候が人間の気分に与える影響の大きさは計り知れない。カナダに来て長かった最初の冬が終わり、若葉が一斉に芽吹き出したころには、私も少し少し生活を楽しむことができるようになっていた。初めて借りた家はネズミの走り回るボロ屋で気がめいったから、改築したばかりのアパートに引っ越した。秋からの大学院入学も決まり、毎日プールに通ったり、散歩したりの日々。夫のほうも大学で教えるめどがついて、精神的に落ち着き始めた。そのころカナダに遊びに来た両親や妹は、私がカウンセラーを必要とするほど落ち込んだことなど気付きはしなかっただろう。夏のカナダは光にあふれた美しい国だから、「こんなところにお嫁に来られて幸せだね」という感想を持って帰ったのも、当然といえば当然だった。

しかし夏は短い。五月から八月のわずか四カ月間だけだ。九月に入って大学院が始まると、あっという間に秋が去り、十月には冬の寒さが肌を刺し始めた。

大学院の勉強は予想していた以上に大変だった。毎週毎週何百ページもの本を、当然ながら英語で読まなければならない。授業はすべて少人数のセミナー形式だから、しょっちゅう発表の番が回ってくる。北米の大学生活をある程度経験していれば、それなりに手を抜く場所、力を入れるべき場所の見当もついただろうが、私はまじめなばかりで要領が悪かった。そのうえ、図書館の使い方、レポートの書き方、教授との付き合い方など分からないことずくめである。留学生の多いカナダの大学では、一人一人外国人の面倒をみている余裕などない。しかも、学部生ならまだしも大学院のレベルに来る学生は、自分で問題を解決する能力があって当然だと考えられている。さらに言えば、私はカナダ人と結婚していたため、サポートは夫から受けて当たり前だと周囲が思っていることもあった。

当初は一年で修士を終える予定で、目一杯科目を取っていたが、すぐに自分の力ではこなしきれないことが明らかになった。そこで一つ科目数を減らしてみたが、それでも大変なことに変わりはなかった。

一番つらかったのは、授業中に発言を求められても、言いたいことを言うだけの英語力がなかったこと。懸命にテキストを読んだうえで授業に出ているから、先生やクラスメートの言っていることはほとんど理解できた。議論が中心の授業方法に慣れているカナダ人学生は積極的に発言するが、内容が伴っているとは限らないこともすぐに分かった。だから私の頭の中には言いたいことが山のように膨らむのだが、それをどうやって英語で表現するのかと考えているうちに、議論は先に進んでしまい、私は欲求不満のままに終わるのが常だった。それで教授から「セミナーでの発言が少ないね」などと注意されるのだから、心から情けなく感じたものである。

外国に来て早々から土地の言葉が上手に話せるわけはないのは当然だ。しかし、私は日本語や中国語で自分の考えをすらすら説明できる状態に慣れていたから、英語を話せない自分が他人には白痴のように見えるという事実に随分と傷ついたのだった。不思議なことに中国語は割とスムーズに流暢(りゅうちょう)に話せるようになったのに（今でも

日本から来た友人らと27歳の誕生日のパーティー（道を歩いては泣いていたころ）

私は前世で中国人だったことがあるような気がしてならない）、英語の進歩はイライラするほど遅かった。家では相変わらず夫と中国語で話していたから、その分英語の進歩が遅れた面もあっただろう。しかし中国語こそが二人のきずなだという思いがあって、なかなか捨て去る決意もつかなかった。また慣れた言葉から別の言葉に変えるというのも不自然なものなのだ。言葉には文化がついてくるから、ある言語文化を背景に築いた関係を他の言語文化に移行するのは、両者が二つの言語に精通していないかぎり難しい。それに外では英語で苦労しているのだから、家でくらい自由に話せる中国語にしがみついていたかった。

いずれにしても、大学院に通っていた秋はストレスのたまる季節だった。いつもいつも読まなければならない本のことが気になって、夜眠りに落ちることにすら罪悪感がつきまとった。

そしてストレスのある生活は、当然のことながら夫との関係にも影を落とした。

前にも書いたように、カナダではパーティーが大切な週末の行事になっている。勉

強でくたびれ果てているときでも、夫とともにパーティーに出席することが妻としての務めだった。夫一人で出席したら周囲から不思議に思われるのだからと、無理して出かけていっても、私はゆっくりとくつろぐことができず、かえってくたびれて帰ってくるのが常だった。そうした私の態度が夫には不満で、「どうしてもっと社交的になれないのか」と、帰りの車の中で何度議論になったことだろう。「そう言うけど私は疲れているし、勉強が気になるし、パーティーでみんなが話している冗談も分からないのよ」と反論してはけんかになったものだ。困ったことに私は英語の発音がいいので、他人には流暢だと思われがちだった。もっとたどたどしく話していれば、人も「ああ、彼女は言葉が分からないのだ」と悟ったことだろう。ところが私は中途半端にベラベラしゃべるものだから、会話の内容が分からないときでも相手にはそう映らず、逆に話が混乱したりした。

くたびれる秋が頂点に達したのは、ある教科のレポートがきっかけだった。生まれて初めて英語で書いた十六ページの小論文。形式もよく分からず、英語での思考回路が混乱しがちなだけでも大変なのに、当時家にはコンピュータがなかったから、タイプするのに丸一日かかってしまう。文字どおり泣きながら仕上げた初めてのレポートだった。当然夫に目を通してくれるよう頼んだのだが、専門外のことだし、彼としても他人の論文を土台からたたき直すことなど大変すぎたのだろう。少々文法を直しただけで提出した論文は点数もつけられずに戻ってきた。「もう一度、最初からやり直せ」という教授の指示である。

大学院とは学問を職業にする人のための訓練機関であることを考えれば、このときの教授の対応は正しかったといえる。私がオフィスに面会に行ったときも、優しい言葉の一つもかけてはもらえずに、「しっかりやりなさい」の一言で追い返されたのだった。甘い日本の大学に慣れていた私にとって、それは何という屈辱だったことだろう。そもそも学問を職業にするという確固たる決意もなしに、何気なく入学した私が悪いのだ。大学からの帰り道、深まりゆく秋の寒さに震えながら、私は心底落ち込んでしまった。

「ああ今東京にいたら……」私は慰めてくれそうな友人たちの顔を思い浮かべた。しかし遠い異国で私は独りぼっちだった。それどころか気分が晴れないときに立ち寄れるような顔見知りの飲み屋があるわけでもない。外は暗くなり始めていたが、私は家に帰りたくなかった。といって出かける先の当てがあるわけでもなしに、仕方なく市電に揺られ続けていた。終点について、再び乗り換えて、またトロントに戻って、それでも行くところはないのだ。実際、あのときほどぐるぐると回り続ける山手線が恋しかったことはない。トロントに戻った私は、すでに扉を閉ざした銀行の公衆電話から夫に電話をかけた。

「もうだめなの。すぐに迎えに来て」と泣きながら話した。しかし、彼には私のつらさが伝わらなかった。「だめだよ、今ピザの出前を頼んじゃったから」「ピザなんかいいじゃないの。玄関のドアに代金を張りつけて早く来てよ」「分からないことをいうもんじゃないよ。早く帰ってくればいいだろう」

思い起こせば我ながら何と幼稚な精神状態だったことかと思う。しかし、カナダに嫁に来た形の私には、社交の場で知り合った人はいても、自分でかち取った友人関係はなく、何か問題にぶつかると、とてつもなく孤独で惨めな気分になってしまうのだった。家ではつまらないことでどなりあいのけんかになり、見知らぬ土地で唯一味方になってくれるはずの夫を敵に回してしまう。

二人めのカウンセラーに足を運んだのは、そんなころのことだ。今度は大学内のカウンセリング室に予約をとって出かけた。担当は再び『異文化間問題』の専門家。以前中国人の女性と結婚して、京都に住んだこともあるというピーターと名乗る白人男性だった。このときもまた、自覚症状は気分の落ち込み。原因は勉強の行き詰まりに、カナダ社会への適応障害、結婚生活の問題など色々あることは分かっていたが、様々な要因が絡まりすぎて、何が一番重大な問題なのか、どこから手をつければよいのか見当もつかなくなっていた。

私の話を聞き終えると、ピーターは「どれもこれも片付けなければならないことばかりだ」とため息をついた。「大体君は何で政治学なんか勉強しているんだい？　ほんとうは好きじゃないんだろう」と言われればそのとおりだった。「国際結婚も問題だね。東洋人の女と結婚する人間は、みんな頭の中に柔順で言いなりになる女というステレオタイプを持っているんだよ。君のハズバンドもそうだろう？」

彼の言うことはそれなりにもっともであったかもしれないのだが、何しろ解決を急ぎすぎるという難点があった。二度めに会ったときには「学校は辞めて、結婚も解消して日本に帰るのが一番だ」と言うから、「学校はともかく、結婚はそんなに簡単に辞められない」という私と議論になった。「問題はあるかもしれないけれど、まだやるところまでやったという実感もないし、そんなに中途半端なことはできません」と反論すると「じゃ、来週までに考えておきなさい」と言われた。翌週には、口を開くなり「決意したか」と尋ねるので、「何を？」と聞き返すと、「離婚だよ」とくる。他人の人生の一大事をそんなに軽く扱われてはたまらないと、ピーターとのカウンセリングは物別れに終わった。

ようやく立ち直る

結局私は一学期で大学院を退学した。直接的には授業や課題の大変さについていけなかったためだ。しかしそれは私なりにカナダでの将来設計を検討し直した結果でもあった。大学院の学位の中には、法律やソシャルワーク、またMBAのように、学位自体が就職と直接かかわるものもある。しかし、私が勉強していた政治学は、博士号をとって大学で教える、つまり学問で身を立てる以外にはほとんど具体的な役に立つ見込みがなかった。勉強すること、苦労すること自体に意味がないとは言わないが、一日も早くカナダで自立することを考えるなら、学者になるつもりがない以上、早く足を洗って、自分の人生のハイウエーに戻るべきだと結論を出したのである。

カナダに来てちょうど一年がたっていた。映画の中に紛れ込んだように感じた日々が過ぎて、ようやく現実に手が触れ始めた時期である。そのころトロントに来た

親友は、私が道を歩きながらも泣いてばかりいるのを見て驚いたようだったが、実際に現実生活の大変さは、涙くらい出ても当たり前のように重く私にのしかかっていた。

年が明けると私は、再び語学コースに戻るつもりでいた。しかし、そこの先生たちはみな口をそろえて「あなたの英語の実力はもう十分ですよ」と言うのだ。私の実感では、ちっとも十分ではないのに。そこで今度はカナダ人を対象にした英語のクラス（大学生向けの文法講座など）にも出てみたが、知識として学べることはそれほどないのに気付いた。つまり、そのころの私のレベルは、客観的に言えばまあまあであったようなのだが、自分が言いたいことを日本語と同じかそれに近いレベルで理路整然と表現するには、まだ相当の距離があったのだ。別の言い方をするなら、インプットの時期は過ぎて、アウトプットの段階に入れず苦しんでいたのだろう。

再び春が来て、今度は翻訳・編集会社に勤め始めた。周りは日本人だが、クライアントからかかってくる電話は英語である。随分と胃が痛む思いもしたが、仕事自体はこなせたので、少し少し自信が戻ってきた。途中からパートタイムでジャーナリズムの授業を取り始めたのは、英語で書けるようになりたかったからだ。最初は授業についていけるかどうか心配だったが、私の本業ともいえる領域だから、苦労はしても結構いい成績をあげることができた。

仕事や結婚生活への迷いは相変わらず続いていたが、カナダ生活が二年半になったころには、正規にジャーナリズムスクールに入り直し、自分の人生を取り戻し始めた感があった。結婚生活は相変わらずぱっとしなかったが、それなりに軌道に乗り、「百パーセント幸福というには程遠いけれど、このままずっと続けていけるかな」と考えるようになっていた。

ところが、である。私のほうが落ち着き始めたその時期に、夫が今度は不安定な兆候を見せ始めたのだ。直接的な原因は彼の場合も将来への不安だったと思う。カナダに戻ってから、大学院で勉強しつつ、大学で教えていた彼は、私から見れば恵まれたポジションにいた。恩師である先生方からは、「博士号を取れば、正規のポストを用意する」とまで言ってもらっていた。しかし彼は学問で身を立てることに決心がつかなかった。

「ビジネスの世界はどうだろうか」と言った翌日には、「国際公務員になりたい」と言い、「ラオスで働く」と言った次の日には、「海に近いバンクーバーで暮らしたい」と考えを変えた。大人になることのつらさは私にも分かったが、結局は本人が決断するしかないことである。「あなたが決めたことなら、私は何でも賛成するから、まず自分でよく考えてみてよ」と言う以外に、私には何のアドバイスもできなかった。私としても自分の人生に手一杯だったし、折角カナダでの暮らしに目鼻がつき始めたところで、気軽に他の国に移る気分にもなれなかった。

結局、東アジア研究で修士号を取った彼は、引き続き応用心理学（異文化間問題）の修士課程に入った。ミセス・ラバットやピーターと同じようなカウンセラーになろうというのである。カウンセリングという職業や心理学を勉強することのよしあしは、私の判断力の範囲を越えていたが、と

りあえず彼が今まで勉強してきたことを無駄にせず、具体的な職業につながるという点、さらにいえば、これで少なくとも一、二年はトロントに落ち着いていられるという点で、私はほっとしたのだった。

離婚につながる？カウンセリング

しかし、心理学とは不思議な学問である。カウンセリングの勉強を始めた彼は、自分でもカウンセリングを受ける必要あるという理由で、ユング心理学のセッションを受け始めた。夫の担当になったのは、かつてひどい情緒障害に悩み、自殺未遂を繰り返したあげくユング心理学で立ち直り、スイスでカウンセラーの資格を取ったという中国系の女性だった。彼女とのセッションは短期で幕を下ろしたが、そのころから夫は「僕たちの結婚生活に問題ある」と言い始めた。

私たちの間に問題があることは私も知っていた。二人とも未熟なうちに、自分のことも相手のこともよく見極めずに結婚してしまったのだ。しかし一緒に暮らして三年がたち、それなりにペースがつかめてきたこともまた事実であった。「何が問題だと思う？」と夫に尋ねると、「セックスだよ」と答が返ってきた。私は暗い気持ちになった。私とて百パーセント性生活に満足していたわけではない。しかし、そこをつつき始めたら、関係自体が崩れていくという確信にも似た不安があった。

夫が次なるマリッジカウンセラーを探し始めたとき、私は嫌な予感を持った。しかし、カウンセリングを受けるという夫の意志を変えることはできず、結局、若干の紆余曲折を経て、私たちにとって最後のカウンセラーとなる人物、ドクター・スタインの門をたたいた。ドクター・スタインは、夫の友人の一人が離婚騒ぎでもめたときに世話になったというハンガリー系のユダヤ人で、ゲシュタルト療法の専門家だった。初めてのセッションのとき、夫については「たくさんの言葉でいつも他人を煙に巻くが、内心は神経質な人間」という診断を、また私については「怒りっぽい子供のような頑固さと、可憐な少女の部分を合わせ持つ人物」という判断を下した。その描写が当たっているように感じたことが、引き続きカウンセリングを受ける理由になった。

ドクター・スタインとの約束で、まず四週間にわたり二人でカウンセリングを受けたうえで夫婦関係についての基本的診断を受けることになった。判決を待つ、その四週間は異様に緊張した中で過ぎていった。ここで努力しなければ二人に将来はないと言われるだろうとおびえ、もう一方では真実を知りたければ自然に振る舞うしかないと自分に言い聞かせたりした。

一カ月たち、ドクター・スタインのオフィスで二人並んで判決を受けるときがきた。「君たちの結婚生活は重大な問題を抱えている。このままいけば破綻するだろう。何とかしたければカウンセリングで問題解決するしかない。問題は一人一人の中にある。それを直して初めて二人で幸福な結婚生活がおくれるんだ」というのが診断だった。夫のほうは即座に「カウンセリングをお願いします」と申し出たが、私は納得できない気持ちで一杯だった。確かに問題はあるだろう。しかしそれに触れたら離婚につながることが目に見えている。そし

て私は、完璧な結婚とはいえなくても、それを失うだけの準備はなかったのだ。

夫が一人でドクター・スタインのもとに通う日々が一月ほど続いた。

そしてある日、彼は新聞広告でアパートを探し始めた。「君がカウンセリングを受けないかぎり、関係は絶対にうまくいかないから、しばらく一人で暮らしたほうがいいってスタインが言うんだよ」とのこと。私はとてつもない不安におそわれ、脅迫されたような感じでカウンセリングに同意しないわけにはいかなかった。

そうして九十年の夏から、夫と私がばらばらにスタインのカウンセリングを受け始めたのだった。内容は両親との関係や私個人のことがほとんどで、夫との結婚生活はほとんど話題に出なかった。しかしそのことが逆に、私の心の中に占める夫の重要性の少なさを反映していたといえるかもしれない。二人の間に愛はあるのか、結婚生活を続けたいのか、という問いは私のセッションの中でも、夫のセッションの中でも、繰り返し問われてはいた。突き詰めていけば破綻につながるという恐れは、いつでも心の中にあり、しかし関係が修復される可能性もあるのではと考えたりもした。

その時期、結婚生活が悪化したとは言えないものの、二人の心の中の距離が少しずつはっきりとした形を取り始めたことは確かだった。ある秋の日のセッションで、私は自分の口から「彼のことを愛してはいない」という言葉が出るのを聞いた。二人の間に強い感情の結びつきがあるのは確かだったが、それは愛という言葉が持つ前向きな性質のものとは別だった。

結婚して三年余り、幸せな夫婦関係を築くことはできなかった。夢のような生活などあきらめて、平和な暮らしを求めることはできたかもしれない。

「愛していないなら別れるのか」とスタインに尋ねられたとき、私は必死に首を横に振った。そして、なおもたたみかけるように「それなら君は愛してもいない男と一生同じベッドで眠るのか。愛し、愛されて幸せな生活を送りたいとは思わないのか」と言われたとき、私はその問いに答えるのが恐ろしく、ソファーの背に顔をうずめたのだった。

―つづく―

（写真提供・筆者）

ねたきりの心配は高齢者ばかりではありません。

くも膜下出血　交通事故等……積立介護費用保険は
満期返れい金も受けとれて、しかも補償は終身です。
介護の悩みごとは「東京海上シルバー110番」へ。

保険料（例）
女性60歳一時払保険料
¥2,866,680（Sタイプ寝たきりのみ）
保険期間終身
70歳時長寿祝金300万円＋配当金が
お受け取りになれます。

火災・自動車・海外旅行など損害保険のことは

くわしくは「わいふ」あて
電話で資料請求して下さい

わいふ指定代理店
東京海上火災保険株式会社
杉本保険事務所　杉本侑子　☎03-3260-4771

私のくも膜下出血体験

川崎市宮前区　水落　時子

突然の頭痛

昭和六十三年三月十四日夕方、友人の家でおしゃべりをしていたとき、突然、（痛い！）と、思わず座っていたいすから、私は頭を押さえて立ち上がりました。今まで経験したことのない激しい頭痛にいきなりおそわれたのです。両手で頭を押さえたまま目をつむって、じっと痛さに耐えようとしましたが、立ったまま動くこともできませんでした。

あまりの痛さにとても我慢ができなくて、友人が新しいお茶を入れ替えてくれているのは分かるのですが、「ごめんね。とても頭が痛くなったので、失礼します」と、自宅に急いで戻りました。

後でこの友人が話してくれたのですがはじめ「痛い！」と叫んだそうです。このときの痛みをどのように表現したらいいのか分からないのですが、何の前触れもなく突然にやってきて、考える力もなくなるような激しい頭痛でした。

頭を押さえながら帰って床を取り、子供が作ってくれた氷まくらを当てて横になりました。激しい頭痛は治まらず、吐き気も出てきて二度ほど嘔吐（おうと）しました。

（あっ！　今日のお昼、いつもの魚屋ではない店でお刺身を買って食べたからだわ。もう絶対あの店で買わないから！）と思いつつ、激痛に耐えて横になっていました。頭の隅に『頭痛がして嘔吐があると頭の中に異変が起きている』と、どこかの本で読んだような気がしましたが、今の状態と結びつくとは考えもしませんでした。

激しい痛みに（救急車を呼ぼうかな？）と思いながらも踏ん切りがつかず、もう少しこのままで様子を見ようと思いながら我慢をしているうちに、ウトウトしたらしく気が付いたら朝になっていました。

三月十五日

頭痛は少し治まっていましたが、びっくりするようなひどい肩凝りで、まるで直角の鉄の棒を両肩にくくりつけられたような身動きできない痛さでした。それでも、（今日は書き換えの済んだ免許証を取りに行く日、病院に行って診察が済んだ後、警察に行って新しい免許証をもらってこよう）そう考えて、病気のときにはいつも行くN共済病院に車で行くことにしました。首を二、三度左右に動かし運転に支障のないことを確かめて、出発しました。

N共済病院に着き、受付で様子を話したところ、内科で受診するように言われ、順番を待っていました。もうあの激しい頭痛はなく、少しの肩凝りだけで、知人に会っても談笑できるほどでした。問診は「O」という若い男の先生で、私の話を聞くとすぐにCTを撮ることになりました。O先生は内科医ですが、以前、くも膜下出血の手術に立ち会ったことがあり、そのとき聞いた症状にとてもよく似ていたそうです。

私はトコトコ歩いて階段を上がり、CTスキャンのできる部屋に行きました。そこで待っていた別の医師に、「歩いて来たの！　脳内出血の疑いのある患者が、だめじゃないか！」としかられましたが、私にはまだその意味が分からず、軽い気持ちでCTを撮ってもらいました。帰りは車いすが待っていましたので、それに乗り診察室に戻りました。

またベッドに横になり、診断を待っていると、O先生が

「CTの状況からみると、脳内出血は五分五分です。診断を確定したいので骨髄液を採らせてください。どなたか家族の方に連絡したいのですが……」とおっしゃる。近くに住んでいる妹の電話番号を話しました。

看護婦さんが妹と電話で話をしているのが聞こえてきます。

（おや？　入院の支度をと言っている。入院かな？　敏さん（妹の名前）びっくりしているんじゃないかな。ちょっと大げさすぎるな）と、まだ手術など思ってもいない私でした。

一人不安で寝ていた昨夜と違って、病院にいるせいか気持ちは安らかで、身体的苦痛はありませんでした。

そのうち入院用の部屋に移り、私はベッドにうつ伏せになり、腰のあたりに麻酔をして、骨髄液を採ることになりました。

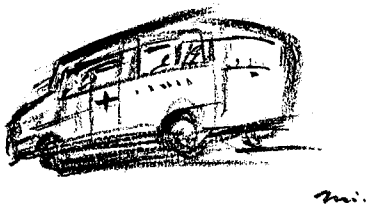
「液が濁っていたり、血液が混じっていると脳の中に異変が起きているということになります」とO先生はおっしゃり、注射針を刺しました。

「先生、骨に刺すことのできる針があるんですか？」

「背骨といっても硬い骨のところではなく、硬い骨と骨の間の軟骨に針を刺すんです」

チクリと痛い麻酔の後に、腰をグーと押さえつけられるような圧迫感があって痛みも何も感じませんでした。でもすぐO先生

は、
「ご主人に連絡を取りたいので電話番号を教えてください」
「先生、濁っていましたか?」
「脳に出血が認められます。骨髄液を採った後はあまり動かないでください。後で腰が痛くなることがありますから」
淡々とした会話。
「先生、主人を驚かせないように伝えてくださいね。帰らなくてもいいと」
そしてやってきた中学生の夏子には家で待っているように言いました。
私はまだ事の重大さを理解していなかったのです。
妹はO先生に、すぐに手術をしたほうがいいと言われ、改めて夫の電話番号などを話したそうです。
先生は長崎へ単身赴任中の夫に電話をかけ、私の手術をする病院を決め、救急車を手配し、付き添っていってくださる準備をして、私の前に再び現われました。この病院には脳外科はないのです。
救急車を待っている間、病院長も出てこられ、夏子をさかんに家に帰したがっている私を見て妹に、
「連れて行きなさい。救急車の中でもしものことがあったときかわいそうです。状況はそのくらい切迫しているのですよ」とおっしゃって、夏子が乗ると定員オーバーになる救急車に乗せてもらえるよう頼んでくださったそうです。
左腕に針が刺され点滴が始まりました。救急車に乗り込むと救急隊員が先生に、
「脳出血の患者さんですね、移送中何が起こっても責任持てません」と言っている。
「僕がついて行きますから」と、O先生。先生と妹と夏子も乗せて、救急車は二四六号線を池尻大橋へ。
「そこを右に曲がって、次の信号を左に、あ! 行き過ぎちゃった。そちらは一方通行で入れません!」
点滴を受けている病人が寝心地のすこぶる悪い救急車のベッドで病院へ行く道案内をしています。
「あまり心配しないで。これは救急車だからだいじょうぶ」
先生は優しく肩をたたきながらおっしゃいます。あのときの先生は、私にとって限りなく心安らぐ存在でした。ようやくC病院に到着。
「遅かったわね、待ってたのよ!」
救急車が玄関に止まるとすぐに飛び出してきた看護婦さんが、私の重い体を「よいしょ!」と救急車のベッドから病院のベッドに移します。私は思わず息を止めてできるだけ軽くなるようにと無駄な努力をしていました。点滴のチューブが外され、新しい薬に変えられました。それは麻酔薬であったらしく、その後の記憶はありません。
後で妹が言うには「楽しい人生だった。



悔いはないよ」と言ったとか。このときもまだどんな手術なのか理解していなかったので、心理的には少しの動揺もなくのんきなものでした。この軽い気持ちがというよりも無知が、後の入院生活にもいい影響を及ぼし、くよくよと思い悩むことなく過ごせたような気もします。

後で聞いた話

手術は深夜まで続きました。夫は手術開始時間には長崎からの到着が間に合わなかったのですが、ともかく駆けつけてきて、妹と二人で手術の終わりを待っていたそうです。無口な二人が、手術を受けている私のことを心配して待合室にいたときの気持ちを考えると、胸が一杯になります。妹は手術前に医長さんに呼ばれ、たくさんのCTの写真を見ながら説明を受けたそうです。

「今から手術を始めます。約七時間くらいかかるでしょう。患部には三時間くらいで到達する予定です。この手術は柔らかいトーフのような脳を触るのですから、触り方によってどこに後遺症が出るか分かりません。また手術中に死ぬことがあります。運よく助かっても植物人間になる可能性があります。命を取り留め意識を回復しても、左半身に後遺症が出ることがあります」と。

妹は手術の同意書にサインをするのを他の人に任せたかったと言います。

集中治療室にいたとき記憶にある「人」は、母と姉と婦長さんの三人だけです。何を話したかは少し覚えています。折角上京してきた姉を「都内見物に連れて行けないから、だれかと一緒に浅草に行ってらっしゃい」と私が言ったことと、母が、「こんな病気になるのはお酒の飲み過ぎがいけないのだ」とお説教をまくら元でしていたこと。これだけです。

夫もこのときのことは、あまり話そうとしません。

大部屋に移って一人で洗面所に行くようになりました。ベッドから初めて立ち上がって歩こうとしたとき、驚いたことに足元がフラフラして心もとないのです。廊下の手すりにつかまりながらの歩行でした。ほんの一週間くらい寝たきりの生活なのに、こんなに退化するものでしょうか。鏡に映った私は包帯用の生地でできている正ちゃん帽をかぶっていました。帽子を脱いで頭を見る勇気もなく、あまり鏡も見たくない心境でした。

手術は右前頭部。額の中心から少し右側に縦四センチくらいの傷が見えますが、ステッキの柄のような曲線の傷が額から頭の中を通り右耳の前まであります。

このころからやっと自分の置かれている状況が少し理解できるようになり、記憶もわずかですが残るようになりました。

毎日の回診のとき、医師に病状を根掘り葉掘り聞いて、面会に来る夫にそのことを

毎日毎日話していました。

ある日いつもと同じに一生懸命話しているのに、夫の聞いている様子がどうも変なのです。

「この話、もうしたかしら」

「ウン。昨日聞いたよ」

ガーン！　私は医師から今日聞いた話をしているつもりなのに、一体どういうことだろう。昨日のことも今日のことも意識の中で区別がつかないのです。記憶装置がまだ正常に作動していないのか、それともも う壊れてしまったのか。悲しい出来事でした。（推理小説を読めば少しは回復するかもしれない。あれは前に書いてあることを記憶していなければ、面白くないから訓練になる）。　そんなことを考えて、長女の持っていた簡単に読める赤川次郎の三毛猫ホームズのシリーズに取り組みました。

やはり、初めの一冊はなかなかはかどらず、登場人物や現象をたびたび前のページをめくって、確かめながらの読書でした。それでも二冊三冊と読んでいくうちにだんだん苦労なく読めるようになり、粗筋を楽しめるようになりました。

脳外科医の話もメモして聞くようにして、自分なりに『記憶する』ということを意識するようにしました。

昼食後の面会時間までのゆったり過ごせる時間に、若い脳外科医が私のところにおしゃべりに時々来ていました。私は何も考えることなくワイワイと会話を楽しんでいました。

ある日、脳外科の医長が、面会に来ている夫に聞いています。

「奥様はよくお話しになるようですが、手術をする前はいかがでしたか」

「はい、ちっとも変わっていません」と、夫。

要するに、私があまりにもよくしゃべるので、どこかおかしいのではないか、と医長が心配してわざわざ夫がいるときに回診してくださったのです。あの若い医師が、私のところに来ていたわけがこのとき分かりました。それとなく手術後の様子を観察に来ていたのです。私はがっくり。

三月も終わりに近い日、抜糸も済み、シャワーが許されました。一人で入る勇気がなく看護婦さんに頼み頭を洗ってもらいました。ツルツル坊主だったのです！

三月末、後遺症もなく無事退院の運びとなりました。大きな手術にもかかわらず、たったの半月で退院です。少し不安はありましたが、迎えの車に乗り、家路につきました。二四六号線に出たとたんに世の中の音のうるさいのにはびっくりしました。病院は二四六号線から少し入った住宅街の一

画にあったのですが、割合に静かで外部の音が気になるようなことはありませんでした。それがこの幹線道路に出たとたん、加速したエンジンのうなるようなごう音が次から次へと私の乗った車を追い越して行きます。穏やかだった気持ちが何かせき立てられるような、いらいらした堪え難い気持ちになり、車のスピードも怖くなってきました。夫は流れに乗ったスピードで走っていただけのようでしたが、のんびり過ごした病院生活からいきなり交通量の多い道路に出たので、拒否反応が出たのでしょうか。私自身、普段平気で運転していた道路なのに怖くてたまりませんでした。

突然の入院で色々な人に迷惑をかけ、申し訳ないことをしました。特に私の家族は大変な心労だったと思います。その中でも入院中に家事の心配をしないで、安心して療養できたのは子供たちの活躍です。小さいときからしかりつけて家事をしつけてきましたが（今思い出しても、自己嫌悪に陥るくらいよくしかりました）その成果がしっかり発揮されたのです。とてもありがたいことでした。

結婚してこれまで、病気で寝たことなどなく、丈夫なのが何よりの取柄だった私ですが、それにしても大きな心配を一度にさせてしまいました。

その後、二年間は毎月一回検査のために通院し、後の一年間は半年に一回の検査、この検査の結果もう通院する必要はなくなりました。

やっと解放されたのです。退院できたときもうれしかったし、通院のたびに出る検査の結果がどんどんよくなるのもうれしかったのですが、もう通院する必要がなくなったときのうれしさは格別でした。心身共に病気が治ったように思いました。

今やっと、家の中から世の中に出て、永らえた命を有意義にまっとうしようという気持ちになってきました。

お世話になったみなさん！

励ましてくださったみなさん！

ありがとう！

今とても元気です。

平成四年六月

（え・佐藤瑞江子）

老人ホーム見学レポートをお引き受けくださった方へ

二三七号八四ページに、「高齢化社会の問題に興味のある方へ」という呼びかけを載せましたところ、たくさんの方から「協力したい」というお電話をいただきました。

お願いしたいのは、お住まいの地域の老人ホームを訪問して、データを取っていただくことですが、まず予備知識のための資料をお送りしたいと思い、ただいま準備中です。お送りするのは

・老人ホームの種類別説明
・見学記の書き方見本
・ホームの話を聞いて記入するアンケートシート

などです。準備に手間取ってまだお送りできず申し訳ありません。いましばらくお待ちください。

ONE POINT ワンポイント情報

●わが家の園芸●

枝豆日記

埼玉県浦和市
佐藤　乃麻

才能がないのか、やる気が足りないのか、私の手にかかってうまく育った植物は……ない。それでも懲りずに枝豆を植えたくなった。

枝豆なら、幾ら不器用な私でもうまくいくはず。説明書を見て思わずうなずく。「丈夫な種」「だれにでもつくれる枝豆」etc。

大きなプランター・土・肥料などを買い込んで、締めて二千五百円也。ベランダにつくった小さな小さな園芸場。説明書どおりに、二十センチ間隔で、種を二、三粒。が、これでは種の半分も使い切れない。余ったってしようがないと、種をもう二、三粒……。第一の失敗はここにあるらしい。

大事に大事に育てた。子供のころのように楽しんだ。絵日記までつけた。毎日ながめ、「早く大きくなぁれ！」と話しかけた。芽は思いのほか、たくさん出た。葉はもじゃもじゃに増えた。が、枝が細い。気になりはしたが、枝一つに枝豆幾つと欲が出て、間引きはしなかった。これが第二の失敗。

間もなく小さな小さな枝豆がぶら下がる。ところが幾らたっても、大きくならない。大きくなる気配さえない。こんな小さな枝豆、見たことがない。

業を煮やして、収穫のときとする。両手一杯の枝豆のはずが、現実は片手にも余るくらい。正露丸みたいな枝豆を、口の中でころころ転がしてはみたが、味はしなかった。

夫がぽつりと言った。

「二千五百円あれば、おいしい枝豆一杯食べれたのに……」

胡瓜の蔓に南瓜が実る

福島県安達郡
桜井　淳子

東京から、風光明媚な福島県の安達太良山のふもとに越してき、家庭菜園をつくるほどの土地も手に入れたので、念願の菜園をつくり始めた。

まず、家庭菜園の手引きなる本を購入。

最初の年なので、易しいものからつくることにした。

なす、トマト、胡瓜、南瓜、唐辛子の苗を買った。なす、トマトは苗のうちから素人の私にも識別できた。

胡瓜と南瓜の苗はとても似ていて分からない。混同しないように、目印を付けた。

菜園の柵に沿って、胡瓜を植えた。

真ん中になすを二列に植えた。その隣にトマトを植えた。

ままごとのような菜園である。それでも、初めて持てた菜園にうれしくて、日に何度も訪れては、水をまき、肥料を与え、実のなるのを千秋の思いで待った。

胡瓜の一本の様子がおかしい、みそっかすのようにいじけている。育たないのではないかと心配していたそれに、

「丸い胡瓜がなった」

夫が子供のように目を輝かせて言った。

見に行くと、確かに、丸い実がなりその先に黄色い花がしぼんでついている。

「これ、南瓜よ」

私は、ほかの南瓜と比較して言った。

「違うよ。胡瓜だよ。変種で丸い形だろう」

夫は言い張る。

都会育ちの悲しさ、何が何だか分からないままに日が過ぎていく。

丸い胡瓜は、驚くほどの早さで大きくなっていく。

柵にビニールのひもをかけ、丸い実を西瓜のようにつるした。

「苗屋でだまされたかな?」

夫はやっと、南瓜であることを認めた。

なすや胡瓜の収穫は大であったが……。

隣の奥さんに南瓜の話をすると、

「Kさんのところは、お宅と反対よ。南瓜を柵に沿って植えたら、全部胡瓜だったんですって。見てごらんなさいよ。胡瓜が柵にたくさんぶら下がっているから」

「へー。胡瓜の苗から南瓜がなったり、南瓜の苗から胡瓜がなったりするのね」

私は感心して言った。

胡瓜の苗は南瓜の苗に接ぎ木をしてつくり、南瓜の苗はその逆だということを知った。

「むべ」なる哉

神奈川県中郡
田中千恵子（55歳）

夫の植えた「むべ」。一年間何となく観察していると、常緑木で、春先にはぐんぐんと葉先を伸ばしていく。

我が家の台所は、真西にガス台や流し台があり、その上段が一杯の窓である。毎夏、遠慮のない西日に悩まされ、朝顔などで一時をしのいだが、秋になると枯れ葉が汚く始末が大変であったので、夫に頼んで「むべ」を窓下へ植え替えてもらった。幸い窓の外側はアルミの桟がはめてあり、「むべ」は想像どおり桟に絡み始め、年々葉先を伸ばして見事に西日を防ぐようになった。春から夏にかけて窓を開けておくと、つやのよい葉と白い花房が、さやさやと風に揺れて、それはメルヘンティック。花は小さい白いベルを束ねたように房状に垂れる。肥料いらずで、春の終わりにはたくさんのだ円形の実を結び、秋にはつやのある赤紫の実となる。するとどこからか鵯たちが「ピーッ」と甲高いうれしそうな声でやって来て実をついばみ始める。梨子地のすりガラスの窓の向こうに鳥の影が色々の動作で

実をつつき、葉や実が揺れているのをこちらからながめると、さながら鳥のサンクチュアリをスクリーンで見ているようで、時のたつのを忘れる。

今や「むべ」は、四季を通じて我が家になくてはならない植物たちの仲間入りをした。

ベランダ園芸家から一言

栃木県鹿沼市
神山　寿子

アパート住まいの私は、ベランダ園芸家である。小学校のころ、朝顔を育てて以来、水やり一つやったことがなかったのに、結婚後突然あれこれ植え始めたものだから、失敗も多い。そこで学んだベランダ園芸のコツは、「増やさない」「大きくしない」「手をかけない」である。

まず「増やさない」。スペースに限りがあるわけだから、どんどん増える植物は避けたほうがいい。また、花の期間は短いのに年間を通して世話が必要な花木も、花のない季節は場所ふさぎである。冬期室内に入れなくてはならない鉢は、部屋まで狭くしてしまう。スペースのことを考えると、ワンシーズンで終わる花が、お勧めである。

「大きくしない」。実はアメリカフヨウを育てているのだが、コレは失敗であった。大きくなりすぎるのである。一メートルほどにも伸び、三十センチ近い花を咲かせるので、ベランダにはちとかわいげがない。そのうえ一日花で、花期も短い。丈の低い、花期の長い花を選ぶと、ジャマにもならず、よいようだ。

「手をかけない」。殺虫剤や消毒剤を使うのは、周囲への迷惑もあり、ベランダ園芸では極力避けたい。また、植え替えも、スペースを考えると、なかなか難しい。したがって何年もかけて育っていくような花木、株分けが必要な宿根植物は、あまり勧められない。

そんなわけで、ベランダ園芸にお勧めなのは、使い捨ての球根（養分がなくなって翌年は花が咲かない）で育てる花、チューリップやヒヤシンスの類。花期が長く、花が終わったら別の花に植え替えられるような花、パンジー、ビオラ、朝顔、インパチェンスなど。

実際に私が育てているのは、行き当たりばったりに買ってきたものの、増えすぎたり、貧弱になってしまった鉢が多く、とても人様に見せられないものが多いが、出来の悪い子ほどかわいく、それなりに楽しいものである。

バラが病み付き

奈良県生駒郡
高松　恭子

バラ好きの友人が二年の予定で東京に転勤になった。百鉢ほどのバラを友達で預かることになり、我が家へも十鉢ほど来た。バラには、クリスチャン・ディオールだの、パパ・メイアンだのといった横文字の名前が付いていて、中には無断で交配することを禁じたものまであった。

気軽に預かったものの、血統書付きのバラを枯らさないため、水やり、施肥、剪定（せんてい）、消毒など、放ったらかしの我が家の植木に恨まれそうなほどかいがいしい世話をした。そのかいあ

ってバラは年二回、見事な花を咲かせた。私はこのとき初めて、植物でも心を込めて世話をすれば、必ず期待に応えてくれることに気付いた。園芸などお金と暇のある年寄りが楽しむものだと思っていたが、これ以降、私の趣味に園芸が加わった。

狭い庭に花壇をつくって無花果（いちじく）、金柑（きんかん）、桜、オリーブなど中くらいの木の間に、年中緑を絶やさないクチナシやアガパンサス、宿根草の花を幾つか植えている。春先や秋口には、フラワーバスケットにすみれ、ベゴニア、インパチェンスなどを植えて門を飾る。これはつくっている自分はもちろん、来客や通行人にまで楽しんでいただける。

この程度の園芸に、大した技術は何もいらず、大切なのは一にも、二にもこまめな世話だけである。夏の苦痛、草抜きも、一日三十分ずつやれば大した苦痛もなくきれいに保てることも分かった。その草も花が咲く前に抜くと、種が散って広がることを防げる。

私は生ゴミをすべて堆肥（たい）ポットに入れ堆肥にしているが、これが驚くほどいい土になる。ゴミ減量にもなるので、スペースのある方には是非お勧めしたい。

ヒマワリ

神奈川県藤沢市
上野由紀子（29歳）

我が家はアパート（一階）だが、物干し場になっているテラス（コンクリートのたたき）がかなり広く、しかも南向き。植物を育てるにはちょうどよいスペースである。越してきて四年になるが、もともと無精もんの私は今までここに花を植えたことなど一度もない。

実家の母が遊びに来るたびに「こんなに日当たりがいいのにもったいない。殺風景だから何か植えたら」と盛んに言うので、今年初めて自分で花を育ててみる気になった。

どうせやるならできるだけ大きくて目立つ花にしようということで、いきなりヒマワリを植えることにした。早速土と種を買ってきて幅四十センチほどのプランターに種をまく。六月も終わりのころの話である。

大輪のヒマワリが空に向かって咲き乱れる風景を想像しながら朝夕欠かさず水をやり、発芽するのを毎日ワクワクしながら待つ。それにしても、芽が出るまでの何と長かったことよ。ようやく緑色の小さな芽が出かかっているのを見つけたときは思わず「ヤッタ！」と叫んでしまった。

八つの芽が全部出そろうと、プランターの中が立て込んできた。プランターのサイズの割にまいた種の数が多すぎたのと、土がプランターの半分ほどしか入ってなかった（ケチって土一袋しか買ってこなかった）せいでどれもヒョロヒョロだ。途中、植木鉢に一本ずつ植え替えをして肥料も与えたが、いいかげんにやったせいかもともと元

気のなかったものから順に無残に枯れてしまい、結局二本だけしか残らなかった。そもそも種まきの時期が遅かったようだ。植物は正直である。夏もそろそろ終わろうとしている今ごろになってやっと小さなつぼみになってきたが、丈は三十センチほどしかない。咲き乱れる大輪のヒマワリどころか、情けない花が何とか咲こうとしているといった感じだ。

テーマ花壇

三重県四日市市
安藤喜代美

私の手元には、年二回、四社から園芸カタログが届く。新しもの好きの私は、NEWと記されている種や苗を取り寄せては広くもない庭で育てていた。ある日、友人があきれはてたように、「咲かせればいいってものじゃないでしょ。花か色を統一したらどう」と言った。花好きの人の庭は混雑していると言われるそうだが、その典型かもしれない。

そこで、テーマを持たせることにした。ドライ・フラワーとした年は、スターチス、ルナリヤ、貝がら草を植え、部屋の中でも一年間楽しんだ。次の年はラベンダー色と名の付いている種を集めた。日日草やゼラニュームなどだが、残念ながら私の想像していたラベンダー色とは、程遠かった。

今年の春は何といっても、プリンス・エドワード島の花。三十年来の夢が実現し、去年の夏かの地へ行ってきた。ワイルド・フラワーの種を買い、公園や原っぱでは、ルピナスやマリー・ゴールドの種を採った。色とりどりの花が四月末から咲き続け、再びアンの世界に浸れたのである。

来年の春のテーマは、ピンク。パンジー、金魚草、石竹と全部ピンク色の種を買っている。

土の威力

埼玉県浦和市
小幡　洋子

農家育ちでしたので、生き物を育てるのはごく当たり前の環境でした。

しかし、地球の芯にまでつながっている、(大?)地の力を知ったのは、都会のアパート暮らしを始めてからです。ずっと一階に住んだため、日当たりの悪い一角を花壇代わりに、生ごみを埋めて植え始めました。

目覚ましかったのは、観葉植物です。私は土に植えてしまうことをお勧めします。トラデスカンチア、アジアンタム、シダ、木立性ベゴニア、ポトス、ブライダルベールなど、田舎では目にしなかった、流行のはしりの植物を高価で買っては、つり鉢などにしていました。園芸書と首っ引きで……。

ところが、これらはいったん土に植えたなら、適応性抜群。少々、日が当たりすぎようが、日照りが続こうが、枯れることなし、たちまち、数万円分くらいに茂ってしまうのです。

冬越しもOK。ドサッと、ひとシャベル分の土をかけておく。レックスベゴニアは、素焼き鉢をかぶせておき、生き残っていただく。木立性ベゴニアは、先端十センチくらい残して切り取り、枯葉とビニールふろしきで覆いをする……などなどです。

急いで増やしたい、頑丈な苗にしたいときに一時期だけ、土に植えるのも簡便な方法です。

生き返った「幸福の木」

大阪府南河内郡
中野　正美

「幸福の木」ほんとうの名前をドラセナ・マッサンゲアナという。今まで植物を育てたことなし。十年ぐらい前までは、花の名前といえば、チューリップと桜ぐらいしか知らなかった私が、買って育ててみようかなと思ったのは、名前が気に入ったからかもしれない。

私の受け持っているクラスに、観葉植物を置くのもいいかなと思った。まして名前が、「幸福の木」とあれば、魔よけにもなるかもしれない。

手入れは、土の表面が乾いたら水をたっぷりやるだけで、無精な私にはぴったりである。早速教室に置いて、水をやったり、たまには肥料をやったり。

ところが、一年たっても、木から出ている葉は少しも大きくならない。かといって、枯れることもなく、まったく変化がないのだ。

ちょうど一年が過ぎたころ、二週間ほど水をやり忘れたことがあった。もう枯れたかもしれないと見に行ったら、元のままである。「ごめんなさい」と言いながら、たっぷりと水をあげた。すると、全然変化のなかった木が、不思議なことに、そのときから急に成長し始めたのだ。葉がどんどん大きくなって、見違えるようになった。

約五年間「幸福の木」は私の受け持ちの教室に置かれていた。チョークの粉にまみれているかと思えば、きれいに葉っぱをぬぐってもらったりと、少しずつ大きくなっていった。

異変が起こったのは、今年の冬である。気温が低すぎたのか、あっという間に枯れてしまったのだ。あんなに見事に茂っていた葉は、全部茶色になった。葉の芯を見ても、緑色のかけらもない。そのうち茶色の葉はかさかさになって、風に吹かれて乾いた音をたてるようになった。

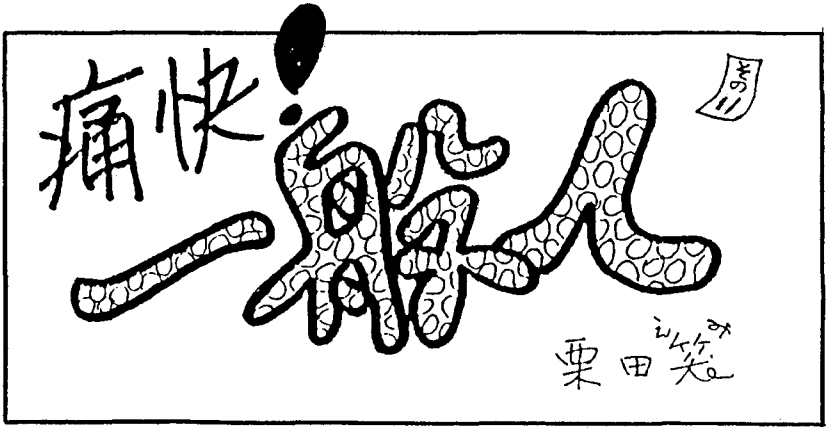
そんな汚いもの捨てれば、と言われながらも残念で、そのままにして、時々水もやっていた。

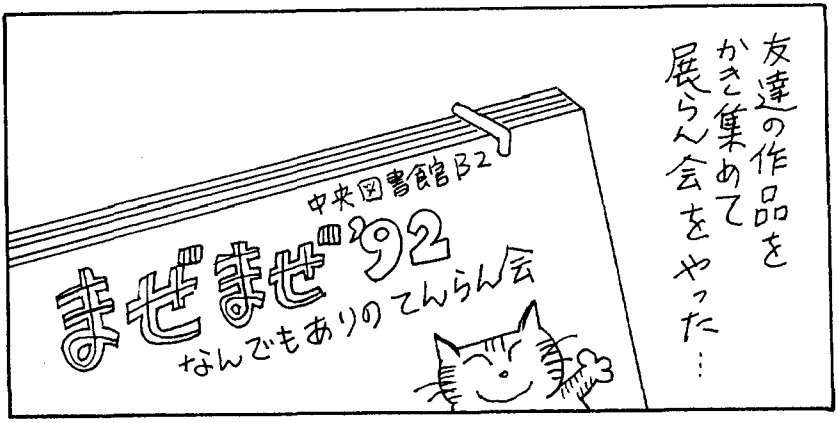
もう完全に枯れてしまったなあと、あきらめたころ、ほんの小さな緑が芯のほうに見えているのに気が付いた。その緑色の部分は、気候が暖かくなるにつれて、日に日に大きくなり、完全に生き返ったことが分かったのである。

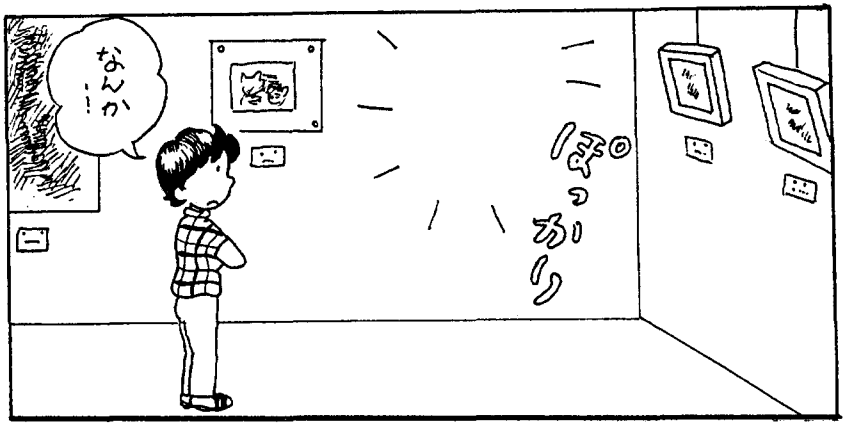
下のほうの茶色の葉はもう元に戻らないので、切り取ってしまったから、随分変な形になってしまったが、そのうち上の葉が大きくなって、元の形に近づくことだろう。枯れてしまったからと、捨てなくてほんとうによかった。

もう二度と葉が茶色にならないよう、大切に育てようと思っている。

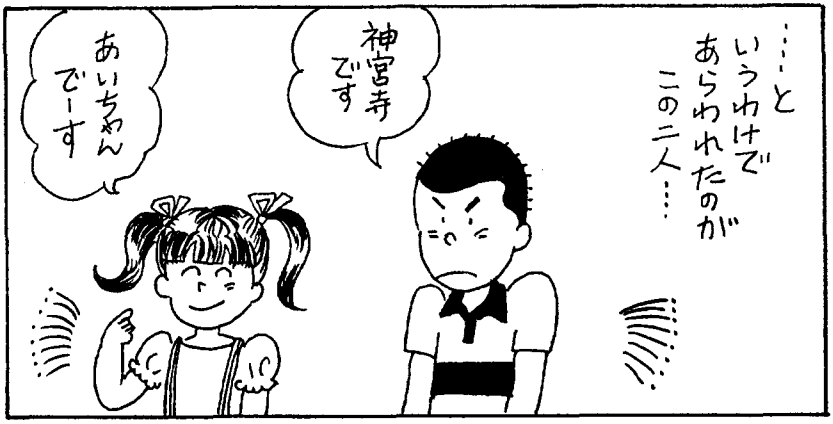
（写真提供・和田直久）


痛快!
栗田笑


友達の作品をかき集めて展らん会をやった…
中央図書館B2
まぜまぜ'92
なんでもありのてんらん会

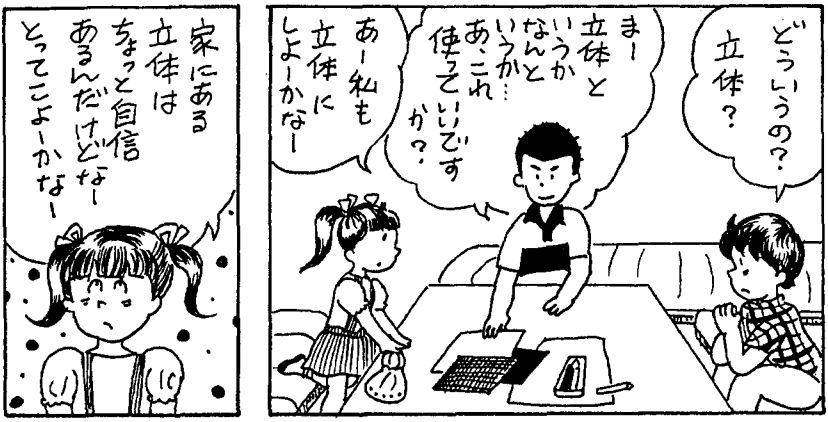

なんか…!
ぼっかり

今から並べかえるというのもなー
いっそのこととび入り参加をつのってみたら？
それ、グッドアイデア

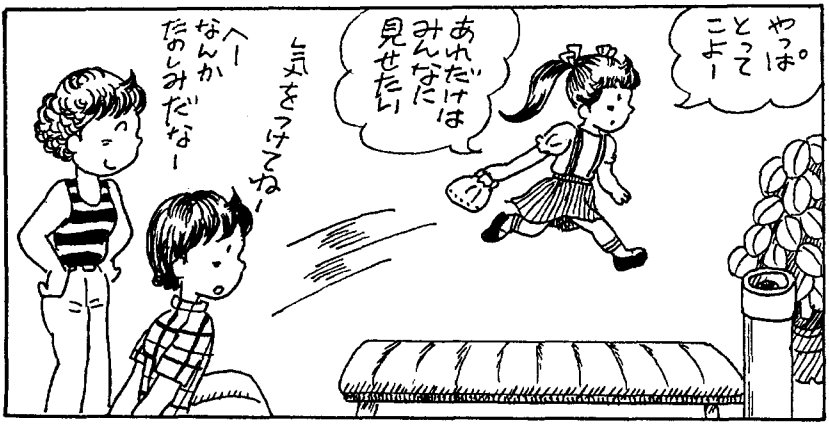

……というわけであらわれたのがこの二人……
神宮寺です
あいちゃんでーす

子供か……でもまーコンセプトはまぜまぜだからいいか

今ここで作りますがいいですか？
いいけど……


どういうの？立体？
まー立体というかなんというか…あこれ使っていいですか？
あー私も立体にしよーかなー
家にある立体はちょっと自信あるんだけどなーとってこよーかなー

近所なの？何年生？
家はこのすぐ近くです五年生ですおとうさん社長…
それは聞いてない…
そういえばどことなくこの子…


やっぱ。とってこよー
あれだけはみんなに見せたい
気をつけてねー
へーなんかたのしみだなー

できたっ
ホント？
どれどれ…
とび入り作品
みんなも出してね
あい
この二人は
ここで知り合って
たちまち友だちに
なってしまい
毎日来てくれました。
来年もやるぞー
来年は
もっと
すごいの
作るんだ
オレも

はじめの一歩
―専業主婦からの脱出―

主婦のための仕事の学校アイムパーソナルカレッジが創立三周年を記念して、特別公開講座を開きます。

▼日時　十月十五日（木）
　十時～三時三十分
▼場所　目白カルチャービル
　（学習院斜め前）
▼参加費　無料

午前の部講師・衆議院議員鈴木きく子さん。普通の主婦から弁護士、さらに代議士へとステップアップした方。午後は再就職アドバイザー原田静枝さんのお話と相談会。申し込み、お問い合わせはアイムパーソナルカレッジ本部　☎〇三―五四一〇―五四六四までどうぞ。

ルナ・カレッジ「東京・横浜校」へのお誘い

青山静子編著〝主婦達の英語奮戦記〟のメンバーによって設立された英語クラス「ルナ・カレッジ」で一緒に勉強しませんか。

〈東京校〉
場所　千代田区神田岩本町一
　岩本町ビル岩本町会議室
〈横浜校〉
場所　横浜市緑区荏田北三―三
　―一二広田ビル二F　コミュニティホールアクト

内容はお問い合わせください。
▼連絡先　月曜十時～十六時は☎〇三―三七二七―八〇一三加藤、それ以外ルナ・カレッジ名古屋☎〇五二―七六二―六〇三五

俳句をつくってみませんか

来年四月俳句結社誌「四葩（よひら）」を創刊します。そこで会員を募集しております。ベテランの方、初心者の方ぜひ「四葩」に参加してください。差し当たって添削指導をしておりますので、句をお寄せください。添削料は十句千円です。〈私の句歴〉第一句集「熟れ杏（あんず）」第二句集「四葩」来春刊行予定。俳人協会会員、現代俳句協会会員、連句協会会員。〒168杉並区下高井戸五―一三―一二　☎〇三―三三〇三―七一七〇　松村多美

全国消費生活相談員協会がシルバー情報ガイドを発刊

当協会「介護施設電話相談」窓口の相談員が「全国シルバー情報ガイド一九九二年版」をまとめました。

本書はA5判、二四〇ページで利用上の留意点をまとめた解説編と、各種相談窓口、福祉機器・介護用品、ヘルパー派遣、入浴、移送サービス事業者などをコンパクトに収めた資料編の二部構成。（送料込み二〇六〇円）
▼問い合わせは火、木曜日
☎〇三―三三四四―二七一〇
主任相談員　野中淳子

講演会のご案内

「従軍慰安婦問題について」
―日本人女性としてどう考えていくのか―

▼講師　鈴木裕子氏
▼日時　十一月六日（金）
　午前十時～十二時
▼場所　船橋市中央公民館
　ＪＲ船橋駅下車徒歩五分くらい
▼参加費　二〇〇円（資料代）
▼保育有　要連絡
▼主催　たんぽぽの会（女性史

学習サークル）

▼連絡先　伊藤　☎〇四七四－七三－三〇八一

アルツハイマーと奮闘

夫がアルツハイマーといわれる病に襲われたことで、私たち夫婦のいわゆる老後の楽しみは苦しみに変わってしまいました。子供もなくあまりにもむごいせつない思いを、私は紙にたたきつけてみようと思いたち、病に取り付かれた彼との語らいを書きました。不運にもこのような巡り合わせの中におられる方や、読んでみようかとお思いの方、ハガキにてお知らせください。

〒168杉並区久我山四－二－二三　中村ひろ　定価一〇〇〇円

岩手サークルをつくりませんか

岩手の読者の方々と連絡を取り合いたいと思います。左記までご一報ください。

〒020－01岩手県盛岡市みたけ五丁目一四－三－一小笠原安紀子　☎〇一九六－四一－七三四一

「おるごーる」へのお誘い

自営業の家庭に嫁いだ女性のための、投稿誌「おるごーる」をつくろうと思います。

「通勤」のない仕事や、近所付き合いの商家ならではの難しさの中、営利を離れた同じ立場の友や仲間がたくさんできるのは、とてもすばらしいことだと思います。

日ごろつい腹の奥底に沈めこんでしまいがちなことを書いてリフレッシュしてみませんか。

▼会費　六カ月一五〇〇円

▼会報　奇数月発行

〒519－01三重県亀山市みどり町五五－九　後藤昌代（初回問い合わせのみ、返信用切手を同封してください）。

交換ノートで心の交流を

とりとめもなく忙しい日々、一人の人間として、母として、妻として、また嫁として考えることの多い昨今です。また長女として家の将来も考えさせられたりもします。考え悩んでいることや対策などを一緒に話し合っていきませんか。コミュニケーションノートのような形でいけたらと思っています。

▼連絡先　〒197東京都秋川市草花九八三－三　後藤千晴

「私の出会ったノルウェー」が出版されました

以前「わいふ」に、「オーロラと白夜の国」のタイトルで連載された中田慶子さんのノルウェー滞在記が、「私の出会ったノルウェー」と題されて、ドメス出版から出版されました。日本の現実と比べて、いろいろな意味でたいへん教えられるところの多い作品です。お読みになっていない方にはぜひご一読を！

情報コーナーの利用について

情報コーナーに最近、組織として本格的な仕事をしておられる方からの掲載依頼が増えてきましたが、この欄は他にPRの場を持たない方々のために、できるだけプライベートなものとしてご利用をいただきたく編集部で討議の結果、今後その線で投稿を選択させていただくことになりました。悪しからずご了承ください。

ただいま、子育て教師修業まっ最中

小野礼子　著

子育てをしながら働く女性教師の奮闘記としては、珍しく（？）悲壮感のない軽やかな本である。「教師という仕事が大好き」という著者は、子育て真っ最中の三十代。幼い子供がいても何のその、教師修業は待ってくれない、とばかりに、レポートを引っ提げては泊まりがけの研究会へ出かけ、原稿書きや講演の仕事も喜んで引き受ける。

与えられたチャンスを積極的に生かしながら、常に自分の仕事の質を高めようと努力する著者のはつらつとした姿は、どんな状況の女性にも元気を与えてくれそう。

自分の時間をつくり出すための家事や育児の工夫もなかなかユニークで面白い。

日本書籍　一三〇〇円（犬）

子育ての目は発達の芽

親と子のこころを結ぶ心理学

中村和夫　著

子供が一歳半を過ぎると、子育ての悩みを持つ親が急に増えてくる。かわいいだけの存在だった子供が親の思惑どおりには行動しなくなる。イライラして、思わずたたいてしまうこともある。そして自己嫌悪。

親から見れば問題行動に見えるわけの分からないだだこねも、子供が次の段階へと飛躍するための発達要求のあらわれなのである。このときに親が発達的意味を考えず、一方的に無視したり、しかりつけたりすることは子供の発達の芽を摘んでしまうことになる。

本書ではこの成長の節目にあらわれる行動の意味を、段階に応じて、実例を交えながら分かりやすく解説してくれている。

穏やかな語り口だが、共働きで子育てにかかわってきた著者だけに、説得力がある。

萌文社　一五〇〇円（久）

赤いくつ

郭　充良・ぶん
はらみちを・え

久しぶりで自分のために絵本を読んだ。ヒロインの乙女は、服装から見てどうやら韓国の少女のようだ。すると、舞台の「小さな島」は朝鮮半島、「異国」は日本のことではないかと読めてくる。作者は在日朝鮮人なのである。

絵もいい。とりわけ民衆の表情に迫力がある。これを描いているのは、両手両足まひの障害のある画家だ。

全体に暗い話の中で、愛らしい「赤いくつ」が鮮やかに光っている。いつの時代、どの民族にもある、若者のひたむきな魂を象徴しているかのように。日本のしたことを絶対に忘れないぞ!!という、かの国の人たちの叫び声が聞えてくるようである。

子ども書房　一五〇〇円（早）

多摩のみんなが選んだ多摩のおいしい物101選

会う逢うネット編
「おいしいもの」みつけ隊

多摩地区は市町村が違うと互いに情報が伝わりにくい。その多摩に暮らし働く人たちのネットワークづくりのための月刊情報紙「会う逢うネット・多摩けいじばん」で、読者から募った情報をもとに、多摩三十二市町村に点在する「おいしいもの」の各店を取材。一冊のブックレットにまとめあげた。

地元人ならではの鋭い観点と感性から選ばれたお店のジャンルは多種多様。そのすべてから「食」をこよなく愛するオーナーの心意気が、憎いほど伝わってくる。単なるグルメ本とは一味違う。多摩で暮らすあなたのための必読本だ。

直販・申し込みは（有）コミネット へ ☎〇四二三－八七－七五五五　送料共七九〇円（土）

喪の作業

－夫の死の意味を求めて－

半田たつ子　著

愛する人が死ぬ！　だれもが、いつかは出会う事実である。身近にいる人の衝撃と悲しみは、計り知れないものがある。

大半の人が落ち込んでしまう。でも、いずれ立ち直らなければならない。その「いやしの作業」をつづったのが本書である。

著者は家庭科教師を経て、家庭科の男女共修を主張するため、ウイ書房をつくり、月刊誌「新しい家庭科……We」を出した人。

その著者を、最大限協力し、支え続けた夫が、ガンに命を奪われたのである。

無念でたまらない死を、家族の問題にとどめず、社会化することによって、意味あるものにしようと決意した。

安らぎを見いだすまでの経緯を文章に著わすことによって、その体験のない人にも、多くの示唆を与えている。

ウイ書房　一二〇〇円（花）

ほんとうの長寿社会をもとめて

市町村からの新しい波

〔編著〕
大熊一夫・大熊由紀子

高齢者福祉の権限と責任が市町村に移った今、地方自治体のやる気と市民の意識であなたの町の老後は決まる。本書は高齢者保健福祉計画を作成する行政マンには最良の参考書といえる。

「行政は最大のサービス産業なり」をモットーに高齢者福祉システムをつくり上げたデンマークの実践と日本の市町村の新しい波を網羅した本書は、行政をプッシュする市民の知恵袋になること請け合い。ほんとうの長寿社会とは何なのか、〝長生きはしたいが、オムツやボケはイヤ〟と言わせない市町村の試みに学ぼうではないか。

同時発刊の「母をくくらないで下さい」（大熊一夫・朝日文庫）と合わせて読むといい。

ぶどう社　一七〇〇円（安）

子育て会議最終回

体罰

●出席者

有賀　麗子
大野　幸子
風間　ゆり
河野　道子

●編集部

田中喜美子

●司　会

和田　好子

司会　今回は子育て会議の最終回で、体罰の問題をやってみたいと思います。教師の体罰というのは随分問題になりましたが、親の体罰というのは家庭で行なわれるだけに外には分からないし、何か虐待があるんじゃないかと言われながらも実態は知られていない。体罰というものが子供にとってよいのか悪いのかということも、あまりはっきり認識されていないんじゃないかと思います。私どもが若いときには、お年寄りがみんな、子供は打つもんじゃないと言ったものなんですけど、現在はどうなんでしょうか。まずお若い方からお話を伺いたいと思います。

●体罰は自分が育った環境から

河野　まず、まったく叩かないという人は私の周りにはいないようなんですね。けれど以前別のところに、思わず子供を叩いてしまったという投稿をのせたらすごい批判が集中したんです。それで自分の体罰に関する認識が甘いのかなと思って、ここでいろんな方の意見を伺おうと思って参加しました。世間的には、公然と叩くと言ってしまうと批判が出ますね。

打ち解けている人とだったら、うちも叩くわよ、みたいな本音は言えるんですけど。戦争に反対しているのに私はそういう

暴力は使いたくないという母親もいますし、やはり体罰には否定的なようです。

司会　叩く場合には、子供の年齢はかなり小さいわけでしょ。

河野　幼稚園以前ですね。大きくて四、五歳くらい。

司会　もう小学校高学年になったら叩くどころじゃない、こっちがやられちゃうもんね。

河野　あと、保育園の父母会で子供が悪ふざけをしたので思わず叩いてしまったら、先生に「あなたが子供を叩くと、その子が他の子を叩き返すので、そういうことはやめてください」と言われたんです。そういう理由なら納得がいくんですけど、ただ漠然と駄目だと言われても、「なぜなんだろう？」という疑問が残ってしまう。

司会　大野さんいかがですか。大野さんぐらいの年齢の方々だと周りはいかがです？

大野　私の年代ですともう子供は高校生とか大学受験なんで、体罰は今は問題になりませんが、ただ小さいときはやっぱり叩きましたよ。悪さをしたときにしつける立場として叩いたから、親としては罪悪感はなかった。でも今になって子供から、「お母さんはその日の気分によって怒った」と言われるんですよ。「同じことをして怒られるときと怒られないときがあった」って。

司会　なるほどね。

大野　叩くってのは、叩き方にもよりますでしょ。叩く場面は他人には見せないんじゃないでしょうか。

司会　そのときにお年寄りの方から、子供は叩くもんじゃないって批判は出ませんでした？

大野　やはりおじいちゃんとかおばあちゃんは、孫が泣く姿とか、怒られている姿を見たくない。でも、私の父は職人で厳しかったんですよ。私もある程度叩かれて育ったんで、叩くことに対してそんなに抵抗がなかった。主人というのは一度も叩かれたことなく育った人で、私が子供を叩くと「叩かないでくれ。自分が叩かれているみたいだから」って。私がカァーッときたときに、パッと子供を抱いて隣の部屋へ行ったりしてましたよ。だから体罰は、自分が育った環境である程度判断しちゃうんじゃないでしょうか。

大野幸子さん

　あれが体罰だったのかしつけだったのか、子供にはどう解釈してもらえたか分からないけれど、叩けるのも一時期だと思うんですよね、育てていく間で。

風間　私は叩いたことがなくってね、男の子一人で年を取ってから産んだ子供だから、面白くて、あまり子育てを苦労だとは思わなかった。でも小学校六年生のときに猛烈なのを一発食らわしましたよ。先生との約束の宿題をどうしてもやらなくて、先生が穏やかに私のほうへ連絡をくださった。「こういう状態になっていますけど、どうですか」と。それでそのときね、思わず叩いたんですよ。息子は六年生だから抵抗しようと思えばできるのに、しなかった。それが分かったんで私はやめて「叩い

たのは悪かったけど、あんたが抵抗できるのにしなかったことに免じてもう叩かないから、先生と約束の宿題はやれ」と言った。

そしたら、自分の体験を作文に書くという宿題で、書く種がなかったらしいの。そこで、どうしても気分がのらなくて作文を書かなかったこと、自分がぶたれたこと、ぶたれても自分が反抗しなかったことを一気に書き上げたんですね。すごく迫力のある作文で、うんと先生に褒められた。そういう思い出が、叩いたことでは一回だけあります。

私自身は子供のころから強情っ張りで、父親に二〜三回ゲンコツをもらいました。祖母だったかだれかが、「強情っ張りは痛い思いをしなきゃ直らんぞ」と言ったことがあります。

司会　河野さんご自身は叩かれた体験はあったんですか。

河野　父からはあります。でも父親は病気をしてまして、頭の手術した後だったので、すぐ怒るのは仕様がない、病気なんだからと母親に言われて納得してました。小学校の半ばぐらいだったと思います。私はどっちかというと考えるより先に手が出るほうだったんですが、今も言葉で説明して分からなかったとき叩くことがあります。前ほどではなくなりましたけど。

●日本の風潮

司会　どうも昔はあまり叩かなかったようですね。昔の本にも書いてありますけど、日本の古い習慣では子供を叩かなかったみたいです。大野さんの年代では、そういうことはお聞きになってませんか。

大野　そういう話題は聞いたことがないですけど、ただ母などはよく言いますね、「あなたたち、まあ、よく子供を怒ってるわね」って。

司会　一般論として、小さい子供をしつけるために叩くことについて、みなさん、どう思われます？

河野　元保母のお母さんとかいうのは、言葉が通じるか通じないかの小さい子を、こんこんと諭していくわけですよ。で、すごいなと思って。私はどっちかというと、言葉の通じない人間にはやむを得ないんじゃないか、体で分からせるしかないんじゃないか、と思っていたんです。

風間　それ分かりますけどね。保育園で保母さんがやっていることを、私はお母さんたちにもっとやってほしいと思うんですよ。体罰じゃなくて言い聞かす、ってことを。言葉が分からないからと言うけど、言葉は話しかけなきゃ覚えられないんですよ。

昔の母親は分かっても分からなくても、みんな独り言を言ったんです。いい子ね——、ちょっと待っててね——、今お洗濯がすむからね——って。私、若いときはそれを見てばかみたいと思ったけど、後で幼児心理学の勉強をしたときに、話しかけているうちに理解できるようになる、とおっしゃる先生方が多かった。それを思えばね、静かに声をかけていく、分かっても分からなくても言い聞かせておくことは大事だと思うんです。

それともう一つはね、保母さんだって、往復ビンタをくれたくなるような子供はいっぱいいます。親と子なら叩いたって関係は修復できますけど、他人である保母さんはそうはいかない。それもあるんですよ、言い聞かせて穏やかに事を治めたいのは。

体罰は原則的には叩いちゃいけないけど、その子供の性質をよく知っているお母さんだったら、ある程度はやむを得ないんじゃないかという感じを私は持っています。

それと、インテリじゃないお母さんたちは、階層で区別しちゃいけませんけど、実にアッケラカンと、ひっぱたいたり、どなりつけたりして育てて、それでちっとも子供が悪くならないんですよ。最近のお母さんたちは学歴が高くて、自意識過剰じゃないかと思うの。昔、庶民の生活の中には、体罰は当たり前のこととしてあったと思うんです。

田中　私、この問題は分からないことが多すぎてね、つまり一方では、ルイス・フロイスなどの記録にあるように、日本では子供を叩かないで大事にすると言ってるわけでしょ。ところが最近の教育状況をみると、中学・高校の段階で先生が猛烈に暴力を振るっている。これね、父母が認容していなかったら、あんなに横行しないと思うんですよ。

河野道子さん

それからね、私教育運動を散々やってきたんだけど、そこではいわゆる民主的な意見ばっかり出るわけ。ところがあるときあ然としたのは、私が行くパーマ屋さんで、男の子たちに、そこはみんな男の美容師さんなんだけど、「あなたたち、学校で暴力振るったり体罰やったりしているけど、どう思う?」って聞いたら、「ああ、いいんじゃないんですか」と異口同音に三人いたのが三人とも言うのよ。「オレたちも叩かれて育ったしね、子供なんてああいうふうにしないと駄目なんですよ」「なあ、そうだよなあ、オレたちなんかどうせできないんだし」ごく軽く、もう何も考えないで肯定するわけよ。だから、暴力が当たり前で、何とも思わないで育ってきている人の家庭も非常に多くあるんじゃないか。

もう一つ、私は日仏女性資料センターをやっているから、しょっちゅうフランスと日本と比較するんですけどね、体罰を容認しているのは日本の母親のほうがずっと多いんです。だのにフランスは、認容しないクセに子供を叩くムチが、かつて一家に一本ずつあった。ヨーロッパというのは、子供が小さいときは一般的にものすごく厳しくて、大きくなるとひっぱたかないのね。

風間　日本は小さいときは甘やかし放題甘やかしておいて、大きくなるとしつけを始めなきゃ、って感じでしょ。

田中　そうなの、そうなの。

風間　小さいときに言って聞かせて分かる子供に仕上げるか、どうしても従えない子供はビンタ食らわして世の中の秩序に従わせるようにするか、どっちかしかなくなってきますよ。規則を守ることにどれだけメリットがあるのか、という問題もありますけど。確かに親がしつけをしないでほったらかした子供を、中・高生になって、手に負えないので、先生、殴ってください、ではすまないですよね。

田中　でもそういうふうに言う親はいます。先生、そんな生易しいことじゃウチの子は言うことを聞かないからって言って、目の前で鼻血がドバッと出るほどすごい迫

力で息子を殴り倒したとかね。

風間　やっぱり日本の社会には、そういう風潮が絶対にあるんですよ。戸塚ヨットスクールだって、中には戸塚さんを高く評価している人もいるんですからね。

田中　そう。

●若いお母さんの動揺

司会　それはね、日本のシステムがそうだったんですよ。親は叩かないで人に叩いてもらう、というシステムなのよ。七、八歳から十五歳ぐらいまでに奉公に出したり、行儀見習いにいく。芸能の世界でもお能の役者になるためなど、弟子入りをする。つまり親方に叩かれるのは当たり前で、年に一回ぐらい帰ってきたときに親は甘やかしていい顔だけするんですよ。教育の責任が親じゃなくて人様なの。それが日本の伝統だから。

風間　学校にもそれを望んでいるわけ？

司会　そうだと思う。

河野　親は叩くと恨まれる可能性があるから、回避して叩かないのかなあ。

司会　それはあるね。そういう人はいると思う。

有賀麗子さん

田中　叩く叩かないの問題よりも、小さいときにしつけをしなきゃならないというのは、これは絶対に正しいんですよ。

司会　けどね、しつけとは何かってことが、現在かなり迷うとこなのよ。昔のしつけというのは労働だったのよ。マキを持って来いとか、水をくんで来いとか、盃に桑をやれとか、そういう労働がたくさんあった。今はそれが全然ないわけでしょ。現在やはりしつけというのは、何がいいか悪いかを教えることになっていますよね。そうすると親が、何がいいか悪いかの尺度を持たなきゃいけないわけよ。

河野　そこが揺れちゃうんですよね、若いお母さんは。こっちから言われ、あっちから言われ、この本にはこう書いてある、と。

田中　そう。だから『子育てはつらい！』に登場するお母さんもそうだけど、ほんとうに情報に踊らされちゃってね、育児に関する本を一ページでも多く読まないと、これを読み損なったために子育てがヘンになるんじゃないかと思って、必死で読みあさる。

司会　昔は世間一般で信じている正しいことというのがあった。今はね、正しいことを自分で決めなきゃならないわけでしょ。これ、大変なことだと思いますよ。そんなにだれでも彼でもできることじゃない、って感じはする。

田中　『子育てはつらい！』を注文してくださる方にアンケートをお願いしているんですけどね、そしたら、みなさん一生懸命書いてくださって。〝0歳のとき何に迷ってますか〟という質問をしたら、やたら子供がかみつくという例があった。その場合どうしたらいいか分かんない。かなり痛いんだけど、大した歯でもないのにひっぱたいていいんだろうかとか、みんな考え方がマチマチで迷っちゃうわけ。その揺れ動きがすごいの。

もう一つ以前にデータを取ったときにね、

少し大きくなった子供がふざけて母親を打ったりしたときどうしますか、と質問したら、半分くらいの割合で笑いながら身を避けるというのや、泣きまねしてみせるというのがあった。どう思います？　これ。

河野　相手が小っちゃい子の場合、同じように悪ふざけして大ケガしちゃったらどうするんでしょう。

田中　そうなの。そこまで考えられないの。

風間　一つにはね、兄弟が少ないということは大変なことなのよ。私も六人兄妹だったし、そうすると親に体罰なんか与えられなくても兄妹ゲンカで容赦なくやられてんですよ。そのうちに手かげんの仕方なんかも分かる。今はそれがなくなったから、大変な世の中になりましたよ、これは。一人っ子は駄目だと学者がみんな言う。

田中　まあ一人っ子だろうが末っ子だろうが、真ん中だろうが、それぞれ長所と短所があるのよ。だから何が絶対よいなんて言えないわよ。

●価値観

司会　それから親の価値観がはっきりしているとね、子供はそれに乗るか反発するか、どっちかになってくるわけですよ。ところが親の価値観がはっきりしてないと、子供はどうしていいか分かんなくなっちゃう。分かんなくなるというのが一番かわいそうな状態だから、きっとしつけの問題なんかともつながっていると思う。

有賀　和田さんの話はよく分かるんですけど、今の若い親はその価値観がつかみきれなくて、迷いながら子育てしちゃってんですよ。だけども、何とかして一人前の人間に育てなくっちゃと一生懸命なんだけど、あらゆる面で迷いが出てくる。

　和田さんはどういうところで価値観を得られたんですか。

司会　簡単に言ったら、例えば戦争というものについてどう考えるか。感情的に反対するだけじゃなくどう見るのか、親が考えているのとそうでない場合は違うと思うし、今外国人がたくさん日本に入ってきているけど、東南アジアの人たちに対してどういう考え方をするのか。子供が恋愛をして、その相手が自分にとって嫌な相手だったらどうするかとかね、幾つもの項目を設定してみれば、自分の価値観を洗い出してみることができると思うんですよ。

田中　私、みんなが価値観を持っていないとは思わないな。日本人て、欧米人みたいに白か黒かハッキリさせるのが嫌いだから黙っていて、いつも揺れ動いているからあまり分からないけど、やっぱり価値観を持ってるんですよ。それは〝みんなと同じ〟にするのがいいと思ってる、それが価値観なんだな。

　だけどここが子供を育てることのよさだと思うけどね、子供って〝みんなと同じ〟になんかしてくれないわけよ。例えば極端に勉強できなかったとしたら、親は自分の子供がみんなと同じでない現実を突きつけられるわけ。それで親は動揺する。社会通念で何となくやってるだけじゃすまないものが子供という存在なんですよ。

風間　私、障害児を守る会の仕事を二十五年くらいやってきてますでしょ。そうするとね、最初のころキリキリ悩んで嘆いていたお母さんたちの顔が、ものすごくいい顔になるんですよ。今になってみると、ある

風間ゆりさん

がままに受け入れちゃう。受け入れて、つめの先の進歩でも喜ぶんですよ。普通の、少しいい子を持ったお母さん方のキリキリしている感じと全然違う。そして、兄弟がすばらしくいい子に育つのね。

私は、むきにならないで、親自身生きたいように生きることを貫いていけば、子供もそれなりになっていくと思う。

司会　とにかく、障害を持った子であっても普通の子であっても、その子を親が受け入れないと駄目なんですね。

風間　受け入れる――、それが一番ですよ。

司会　人間て、みんな違うんだから、子供の個性を認めることですよ。今の親はできる子は認めるけど、その他の子は認めない人が多いでしょ。

大野　うちも三人いますけど、ほんとうに三人三様なんですよ。同じものを食べさせて、同じものを与えて同じように育てたのに、どうしてこれだけ性格が違うんでしょ、って二番目の娘に言ったら、お母さんは三人三様に接してきたと言うんですよ。

司会　それは接し方も違うかもしれないけど、お子さんの個性も違うんですよ。

大野　私なんか四十過ぎて、子育ての不安な時期は乗り越えたような気がするんですけど、やっぱり一番葛藤（かっとう）があったのは子供が親を乗り越えるときだったんです。自分の親が世界で一番いいと思って育ったのが、中学くらいになると、何だ自分の親ってたったこれだけのものだったのかって、母親がばかに見える時期があるんです。そのとき、私も意地になって……。でも子供は見抜いてましてね、うちのお母さんは電話をすれば長電話だし、言うことはコロコロ変わってうそばっかりついてるとか、そういうことでぶつかってきたときに、逆に私は認めちゃったんです、駄目な母親だって。そしたら、すっごい気が楽になって、うちのお母さんは仕様がないなと言いながら私のそばに来てくれる。どこもそんなもんよ、と逆に慰めてくれるようになって、すごく気が楽になった。

司会　やっぱり大きくなったら人間と人間の関係になるわけですよね。子育てが成功か不成功かというのは、大人になったときに仲良くできるかどうかですよ。

田中　要するに子供と親がどういう信頼関係を結んでいるかで、あまり叩く叩かないにこだわらないほうがいいんじゃないかな。

●自分を否定しないところから

風間　体罰に関しては、私は、軍隊の存在がそういうものを許していると思うんです。主人が、軍隊では体罰以外のことでものを考えられない、って。戦場では我々は人間じゃなくされている、人間の気持ちを持っていたらできないことをやってきたって。だから亭主は戦友会に行かない人なの。なぜかというと、戦友会ではそれを酒の肴に話が始まる。悔いることじゃなくて思い出として懐かしがってしゃべり出す。こういう人間が生きている間は、日本には暴力がなくならないだろうって。ところがそれが伝わっているでしょ、どこかの片隅

に。私、そういう風潮だけは許しちゃいけないと思う。

司会　だけど、日本にそういう伝統があるから体罰は使わないほうがいいというのは、私はちょっと反対なのね。というのは、もう日本は完全に西欧化しちゃってんのよ、社会が。家庭も核家族で、昔みたいに奉公にやるシステムもない。するとね、西欧式に小さいころから家庭の中で厳しくしつけて、大きくなったらどんどん自由を認めていく。それしかやり方はないんじゃないかと思う。

田中　でもそれが体罰である必要はない。

司会　あらゆる場合に体罰をしてはならんといっても、相手の子供によって違うって。どうにもこうにもならない子がいるのよ、言っとくけど。

田中　打って抑えるというのじゃなくて、蔵へ閉じ込めたり、物理的に手足を動かなくするとかは、してもいいと思うのよ。

河野　痛さで分からせなきゃいけない段階もあるんじゃないですか。

風間　私たちが若いときに、小さなケガならさせたほうがいい、でも命にかかわることは突き飛ばしてでも避けなきゃいけない、と教わった覚えがあります。

田中　私、今日の今の時点まで打ってもいいんじゃないかと思っていたの。だけど暴力に対する認容の土壌が社会全体にあるときに、それをまた育てるような体罰はしなくてもいいんじゃないかと、私、今風間さんの意見を聞いて急に変節しちゃった。ほんとうに本気になってしつけをしようと思ったらできるんじゃないか、迫力で分かるんじゃないかって。

司会　それは子供によるなあ〜。

風間　確かに子供によります。

河野　それから母親の資質と環境によると思う。

田中　最後に運命論になっちゃマズイんだけど、だから何をやってもいいということになっても困るし、何もやらないでいいということになっても困るし、やれるだけやって……。

司会　〝人事を尽くして天命を待つ〟よ。

田中　そうそう。

有賀　母親との関係で、自分の本質的な部分を母親に否定されて育つと恨みが残っちゃう。それが今度自分が子育てをするときに、攻撃性になって出やすいんじゃないかと思うんですよ。

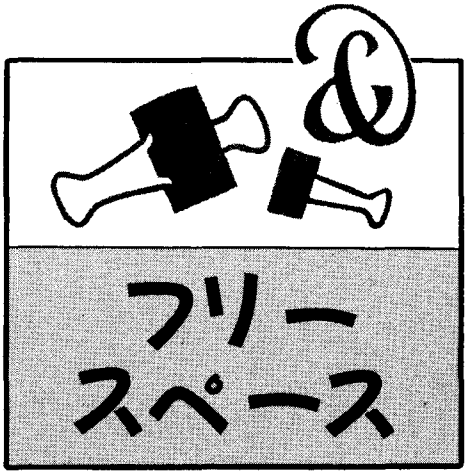
私の場合は、ほんとうに世間の目を気にして育てたのと、思いやりがあって優しい子に育ってほしいという気持ちが強くて、愛情を持って受け止めてやるという部分が抜けてたんですよね。親子関係の学習をし始めたらそれが分かってきたんです。

どうしてああいう子育てをしたのかなと思ったら、自分の性格的なこともあるし、母親との関係もあったし、夫との関係もあって、いろんなものの影響が子育てにあらわれたような気がするんですよね。だから私としては、今の自分も含めて、自分を否定しないというところから見直していきたいなあと思っているんですよ。自分を否定しているとどうしても子供を否定しちゃう。

風間　そうなのねえ。

有賀　この年になって恥ずかしいんですけど、やり直しの子育てを、自分を否定しないというところから、もう一回やってみようかなと思っているんです。

（まとめ・宮前　和）



夜の来訪者

神戸市須磨区●服部祐子（38歳）

時計は夜の九時半を回っていた。やっと後片付けが終わり、後は子供たちを寝かせて、大好きなコーヒーをゆっくり楽しもうと思っていたところへ、「ピーン、ポーン」。（ダンナ君にしてはちと早いなあ）と思いながら、インターホンで応答する。「すみません。川島です。どうしても今日中にお話ししたいことがあって……」上ずった声の調子に、ただならぬ気配を感じる。

ドアを開けると、川島夫人が弘君を従えてにこりともしないで立っていた。「正君に話があって来たんです。ちょっと中に入れてくださる？」そう言うと、こちらの返事も待たずに入ってきた。もともとぬけるように白い顔が、今日はどこか体の調子でも悪いかのように青白く、大きなひとみは一層大きくなっている。

「服部さんがお留守だったから、帰られるのを待って伺ったんだけど、正君に話があるんです」

川島さんはきっぱりと言った。狭いマンションだから、玄関で大きな声を出せば奥までよく聞こえる。それまで、ベッドで漫画を読んでいた小二の息子は、不安そうな顔をしてやってきた。川島さんは我が子の顔を見るなり、「正君、うちの子に何か言わなかった？　朝だけは一緒に学校行ってやってもいいけど、後は遊ばへん、とか何とか言わなかった？　植村君がいないときには、仲良く遊んでくれるのに、植村君が一緒だと植村君の味方ばかりして、僕を遊びに入れてくれないって、弘が言ってるんだけど、それほんとう？　弘はね、植村君がいるときと、いないときとで服部君の態度が違うからって、服部君に不信感を抱いているのよ。どうなの？」

次から次へとたたみかけるように問いつめる彼女の口調が、そばで見ていた私の目にはまるで刑事の尋問のように映った。それにしても、一体どうしたというのだろう。普段は聡明で物静かで、決して取り乱したりしない彼女がどうしてしまったのだろう。彼女によれば、三カ月ほど前にそう言われたそうで、そのせいで最近弘君は情緒不安定なのだそうである。

「ぼく、そんなこと言うてへんで。朝だけは一緒に行ってもいい、なんて言うてへんし、あっち行けなんて言うてへん」

息子は、おびえながらも、きっぱりと言った。すると、川島夫人はくるりと後ろを振り向くと、すごいけんまくで、

「じゃ、あんたがうそついてるの？」

と、弘君にくってかかった。

「うそじゃないよ、ほんとうにそう言った

もの」弘君はうつむいておどおどと答える。
「そんなん、言うてへん」
正も譲らない。涙がこぼれそうになるのをこらえているのが分かる。
「じゃ、あんたたちのどっちかがうそついてるんじゃない！」
ヒステリー状態というのはこういうのを言うのだろうか。挙げ句の果ては、「正君、植村君をとるか、うちの子をとるかはっきりさせてちょうだい。うちの子は、正君が植村君のほうにつくんだったら、学校へ行くときだけ一緒なんていうのは嫌だと言ってるから、これからは誘いに来ないでね。どっちをとるの？」と正に選択を迫る。わたしはよほど、「うちの子供をうそつき呼ばわりして、うちの子はそんなこと言ってないって言ってるでしょ」とかわいい息子の弁護をしてやろうかとも思った。だが、不思議と冷静だった。
大体、我が息子は昨日のことも忘れてしまうようなのんき者だったから、三カ月も前のことなんて、覚えていようはずがない。言ったとしても、本人はすっかり忘れてしまっているだろう。子供のことだから、確かに何かあったのだろう。クラスが違って帰る時間が合わなくなったとか、遊びの内容が違ってきたとか、おけいこの日がずれているとか。二人ともうそなんかついていないのだろうけど、そこには母親の感情も混じってくるから事態は一層複雑になってしまっている。
わたしは次第に彼女が哀れに思えてきた。あの冷静な人がこうまでなるのは、何かよほどのことなのだろう。上品な彼女が髪を振り乱して来るなんて、弘君とうちの子が遊ばなくなったことがよほどショックだったに違いない。途中でこちらが口をはさもうとしても、ますます興奮するばかりなので、仕方がない。じっと息子の出方を見守ることにした。
「僕は、何も言ってへん。でも、僕は植村君と遊びたい」

チックのように、目をパチパチさせ涙をこらえながら、息子は一生懸命答えたが、さすがに川島夫人と視線を合わすことだけは避けていた。
川島夫人は、くるりと弘君のほうへ向き直ると、「正君は、植村君を選んだんだから、あんたは正君と遊ぶのはあきらめなさい。正君が、植村君のほうが好きだって言うんだから仕方ないでしょ。あんたも未練がましいことは言わないのね」
川島夫人は弘君を従えると、相変わらずの厳しい表情で帰って行った。
「お母さん、ぼく、何も言うてへんで。あいつのほうがうそつきや」
息子は私の腕の中で声を殺して泣いていた。助け船を出して、かばってやらなかったことを心の中でわびながら、でも一人でよく頑張ったと褒めてやりたい気持ちだった。大人のけんまくが怖くて、やってもいないのにすぐ「ごめん」と謝る子がいるが、そういう子にはなってほしくなかった。大人は「ごめん」とすぐ謝る子はいい子だと思うようだが、「ごめん」と言えば怒られなくても済むことを子供がよく知っているだ

けなのである。私は息子には、ほんとうに自分が悪いことをしたと思ったときにだけ「ごめん」と言える子になってほしかったのである。

それ以来、二人ともお互いの家へ足を踏み入れることはなかったが、川島夫人の目につかないところでは、何事もなかったように普通に遊んでいた。後日分かったことだが、あの晩彼女はもう一軒別の家にも訪れていた。結局子供たちの間では、あそこのおばちゃんは怖いというわさになり、何となく弘君を遠ざけるようになってしまっている。

子供が友達とうまくやれないと、母親は自分が仲間外れにされたように感じてしまうものだ。私だって、友達のことで子供たちが何やかやと言いに来ると、「そんなら、もう遊ばんときよ」と言ってしまうことがある。すると、「うるさいなあ」と子供は嫌な顔をする。

子供はそこまで思っていない。ともかく、聞いてほしいだけなのだ。ほんとうに子育てって難しいものだ。

滑り込みセーフはしたものの……

神奈川県小田原市●椎野久美子

晴れわたる五月の朝、近くの町という気安さで鉛筆書きの地図を頼りに家を出たのはウカツだった。実際の道は地図ほど単純ではなかった。三階建ての老人ホームは、平屋の建売住宅の中で、確かに遠くからも見える。何度も道を問い、ようやくたどり着いたのは十一時近い。

小さな下請けプロダクションで、念願のコピーライターの仕事に就いて一年余り。景気が傾き仕事が減ってくると、雇い主はあっさり私を解雇した。覚悟を決めてフリーになる、いやフリーになってみると、思いがけず心にゆとりが生まれた。Mさんを訪ねるという棚上げしておいた古い約束を、今こそ果たそうという気持ちが満ちてくる。

往復はがきで都合を確かめ、小さな菓子折りを持ってN町の老人ホームへ出かけた。かつて同じ日に痔の手術を受け、二週間余りベッドを並べたMさんが住むところ。近いから遊びにいらっしゃいと言って彼女は地図を書き、元気よく退院していった。あのとき七十五歳と自称したから、今や八十五歳。年賀状の文字はいつからかサインペンになり、字数も減っていた。

老人ホームは初めてだが、ここは軽費老人ホームA型である。しかしアパートというより病院の雰囲気があるのはなぜだろう。こういうところの食事はきっと早めだろうと思い、友達だと告げただけで三階へ。ヘルパーは疑惑を隠さなかったが、時間がない。

なぜもっと早く訪ねなかったのか。危ないところで約束は滑り込みセーフだった。十年前出会ったときの明朗でかくしゃくとした様子は、すっかり失われていた。三分くらいすると同じ質問が繰り返される。

どこで知り合ったんでしたかね。何の病気でしたか。どこにお住まいですか。それでご結婚は。合間に話すことは、彼女自身のことだが、筋が通りまったく重複もな

い。一人息子はもらい子なんです。これは初耳だった。夫は船乗り、子供が生まれにくかったの。ホームにはもう二十年、一番古くなりました。孫は二人。姉のほうは結婚してもいい年なのに、嫁ぎたがらない。親も親で放っているの。私のような老人が、何を言っても始まらないけれど。

Mさんが湯沸し器のお湯をくみに出たとき、改めて室内を見た。狭い。天井は低くはない。一面は小さな窓で、かわいらしい柄のカーテンが掛かる。小さな茶ダンス、小さなちゃぶ台。洋服ダンスの上は衣類の箱か、天井をこすらんばかり。壁際はふろしき包みが積み上げられ、大きな地震が起きたらMさんは生き埋めになりかねない。夜はちゃぶ台を畳んで布団を敷くのだろうか。何とか二畳はありそうだ。窓から差し込む光が、うっすらとしたほこりを見せる。何か怒りと悲しみのごたまぜのようなものが込み上げてきた。Mさんが自分の母親なら、ここにはおかない。私自身が、ここで暮らしたくはないから。

Mさんはおぼつかない手つきでお茶を入れ、黒ずんだ缶からゼリーを出して勧める。食卓でだれかが好き嫌いを言うと、決まって聞かされた父の十八番（おはこ）の話をつい思い出してしまう。らい病だった黒田官兵衛のウミの落ちたお茶を、石田三成がキレイに飲み干すというくだり。子供たちは「きったなーい」と叫んで、仕方なく目の前のものをキレイに食べた。「えいやっ」と無言の掛け声をかけ、ゼリーを一つ食べてお茶を飲む。

十一時半に昼食の放送があり、少ししてMさんの名が呼ばれた。朝食は八時という。すると前日の夕食との間は何時間あるのだろう。

再び呼ばれて私たちは立ち上がった。食堂も一階だ。入口でヘルパーが彼女を促したが、かまわず私と一緒に外へ出て、名残を惜しむ。小さく心細げにゆらゆら立つ老女は、母の、姉の、やがては自分の姿だ。

右手をとって握手したら、左手も重ねられた。抱き抱えたかったけれど、鼻の奥がツンツンするのでやめておいた。

Mさんが財産を処分して入居した六十五歳まで、私はあと二十年。そのくらいの年月があれば福祉は個室を広く（せめてあの二倍に）清潔に保ち、食事時間も世間並みに設定することができるだろうか。もっと人間らしく扱われたい、扱ってあげたい。私にできることは何だろう。

この後、同じ独身の幼友達と映画を見た。冒険活劇二本立ても、ショックの後のブルーな気分をいやせない。友は、私たちが入るころにはもっと改善されているに決まっていると言うので絶句した。そう、たぶん。今も、お金があれば……。

かわいそうな犬たち

東京都武蔵村山市●大沢陽子

二月九日のこと、「悲惨な飼われ方をしている犬がいるんで、餌やりと小屋の掃除のために来てほしい」という荒木さんの呼びかけに応じて出かけて行った。一面糞だらけで、その中に落ちた一粒のドッグフードを争って食べるほど、みんな飢えているという。

この犬たちを飼っていた人は「自分が死んだら全部処分するように」と妹のYさんに言って亡くなり、そう言われたYさんは、犬たちが哀れで処分できず、年金生活をしながら養っていたけど餌代が続かず、八十匹ほどいた犬は次々に死んで、今は二十三匹だそうだ。

私を含め、動物愛護運動の仲間たち総勢十人、まず犬たちに餌をやり、日に当ててあげようと、鎖や首輪を買ってきて、日当たりにつなぎ、小屋の掃除に取りかかった。

小屋の中は糞が固まって厚く盛り上がっていた。マスク、長靴、ゴム手袋を身につけ、くわやスコップで糞をかき取った。厚いところは七十センチも積もっている糞はカチカチに固まって歯が立たず、なかなかかき取れなかった。二人掛かりで一時間以上奮闘しても糞はろくに削れず、かき取るのをあきらめ、犬たちをほかへ移すことにした。

日の当たるところに仮小屋を置こうと、外の片付けに取りかかった。そこもまたゴミが山になっていた。取っても取ってもゴミの下にまたゴミがあり、死んだ犬の骨があった。燃えるものを燃やしながら片付けていった。大変な作業だった。

犬たちは毛づやが悪くやせていた。足の悪いの、耳の先のちぎれているもの、目の縁のただれているもの、ひどい皮膚病で毛のよじれているもの、ヨタヨタしているもの、色々の犬がいてみんなひどく汚れていた。

一つの部屋には皮膚病の子ばかり七匹いて、中の三匹は鳥のひなのように赤裸でガッリガリにやせていた。

この部屋もひどい状態だった。息もできないような臭気の中にいると目も鼻も頭も痛くなってくる。そして、なぜこんなに汚くしているのか、なぜこんなところで自分は糞と格闘しているのか、と腹が立ってくる。

犬たちのいるところを早くきれいにしてやりたくて、翌日も翌々日も出かけて行った。その後は週に三、四回ずつ通い続けた。

同じ借地の中の別棟に別のお年寄りのTさんが三十匹の犬を飼っている。その人はそこには住んでいない。三日に一度人が一人掃除と餌やりに通ってきている。犬たちは七十センチくらいの、ほんとうに短い鎖でつながれている。体を横たえて眠れるんだろうかと心配になるほど鎖は短い。散歩もせず、寝るところも糞尿をする場所も同じなのでひどい状態になっていた。見ていられなくてこっちも掃除をするようになった。

一度散歩に連れて行ったら、行くたびに大歓迎してくれるので、週に一度は散歩に連れて行ってやろう、と心に決めた。

四月六日、犬たちの糞の片付けを後回しにして、Tさんのほうの犬をみんな散歩に連れ出すことになった。まず外にいる七匹から。入口にいる犬たちが通せん坊をするので、飼い主のYさんに入口の犬たちを押さえてもらった。

次は台所にいる五匹。ここの五匹が一番人懐っこい。次は真ん中の部屋。みんな自分が先、自分が先、というように鳴き続ける。入口に一番近い子から連れ出した。おとなしそうなのは二匹一緒に連れて行く。

白い犬と柴犬を連れて散歩から帰ってきて柴犬をYさんに渡し、白い犬をつなごうとしたとたんに、つながれていなかったベージュ色の小さな犬が白い犬に襲いかかった。小さい犬は離れない。あっと思う間もなく、白い犬が私をかんだ。何度かまれたか覚えていない。痛いとも思わない。すべては一瞬のことだった。Yさんが小さい犬を離し、私は白い犬を鎖につないだ。

手から血が流れていた。けがをした左手を右手で握って外に出た。Yさんが消毒液をかけてくれた。親指のつめがなかった。

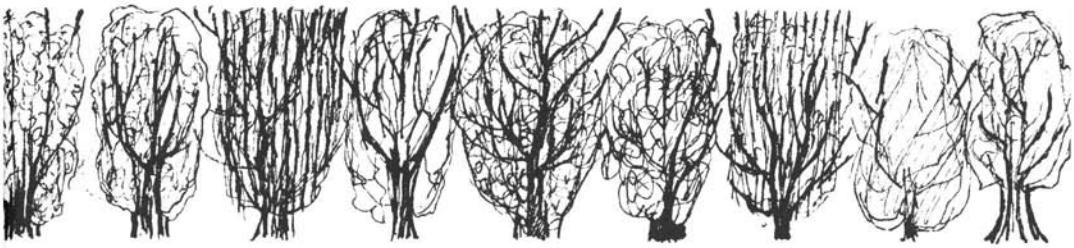
すぐに医者に行った。何度も消毒してくれた。足も痛いような気がしたので見たらすねのところがえぐられていた。そこは四針、手の人差し指と薬指は一針ずつ縫った。麻酔をしないほうが治りが早いからと麻酔なしで縫われた。すごく痛かった。親指のつめのなくなったところは薄い膜のようなものを張って薬を塗って包帯をしてくれた。

時間は一時間、料金は六千円ほどかかった。ドジだ。犬は悪くない。それほど散歩に連れて行ってほしかったのだ。

かまれた犬がかわいそうだ。散歩といっても近くの公園を半周しただけ。私は完璧(かんぺき)に消毒して縫ってもらった。薬もつけたし飲み薬ももらった。白い犬はどうしているだろうか。

このあたりからみんな潮の引くように犬たちのところへ行かなくなった。不妊手術はみんな終わったし餌もドーンと寄付する人が現われて、行かなくても犬が飢えることはなさそうだった。犬たちの様子を見に行く人もなく、Yさんのところは電話もなかったから、白い犬がどうなったか聞けなかった。

（え・佐藤瑞江子）



連載小説⑤

契約結婚

山影　冬彦

23

「はい、それでは、順序よくお答えして行きます。まず、レオの質問に対して。おとっつあん、どうぞ」

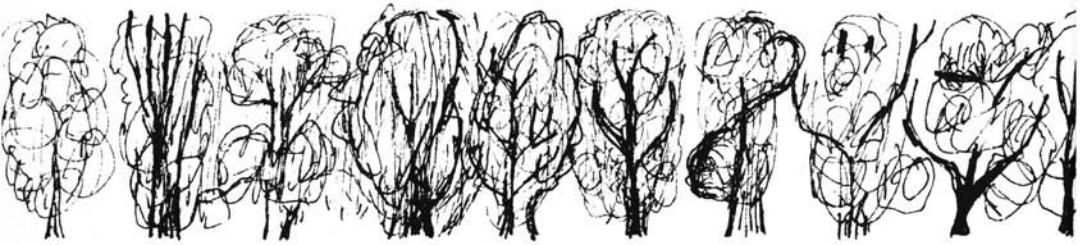
怜子は議長役にまわった。

「……」

道也の口は容易に開かなかった。

「それでは、わたしが代わってお答えします。おとっつあんはね、急に小説を書きたくなってしまったんだって」

「へえ〜っ！　それじゃあ、作家への転職じゃん。転職って今流行じゃん。おとっつあん、



やる〜っ！」

「馬鹿！　誰が作家になると言った。ただ小説を書きたいと言っただけだ」

道也は軽薄な息子を一喝した。その余力はまだ道也にも残っていた。

「作家になって稼ぎたいというのならね、まだまだなのよ。もっとも、そう思っていくら頑張ってみたところで、実際には稼げはしないけれどもね。おとっつあんのは、最初っから稼ぐつもりがないのよ。ただ単に作品を書いて暮らすだけ。教師をやめて、ただぶらぶらと遊んで暮らすのと同じことよ。レオならもう学校の勉強でならったでしょう、夏目漱石のこと。漱石の作品によく出てくる人物に高等遊民というのがあるのよ。今度漱石をレオも読んでみるといいね。けれども、高等遊民というのはね、確かに偉いことを考えはするけれど、遊んで暮らす人には違いないんだからね、あんまり褒められた話ではないのよ。おとっつあんはどうもその高等遊民を夢見ているんじゃないかと思うの」

「そっ、それは、ちと虫がよすぎる。おとっつあん、それはずるいよ、遊んで暮らそうなんて」

「そう、誰だってそう思うよね。でもね、おとっつあんのは、ただ単にずるいっていうのとも違うのよ。小説を書くのに金を目当てにしてはいけないって考えているわけ。それはそれで文学については立派な信念なのよ。でもね、幾ら立派な信念でも家族には迷惑なの。それではやっぱりいけないわよね」

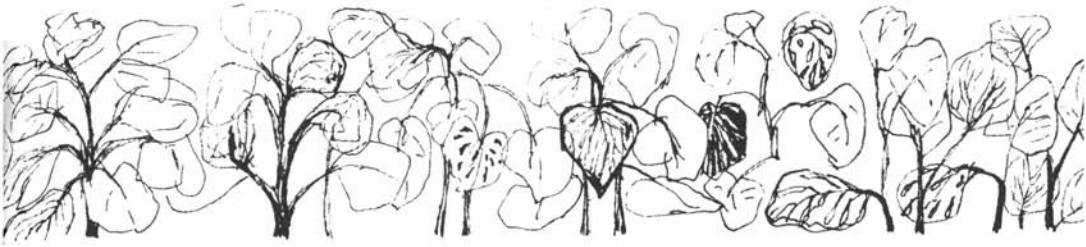
「ふ〜む、世の中なかなか難しい」

「は〜い、質問！」

「はい、どうぞぉ、ミコさん」

「おとうちゃんが教師をやめたらわが家の暮しはどうなるんだあっていう質問、まだ答えてもらっていませんが」

「はい、はい、そうでした。どうもお待たせしました。それでは答えてもらいましょう。おとうちゃん、どうぞぉ」



「……」

またしても道也の口は容易には開かなかった。

事態は何やら、いわゆる大衆団交の様相を呈してきた。

24

「それでは、わたしが代わってお答えします。おとうちゃんはね、おとうちゃんは働かなくても、おかあちゃんの稼ぎだけでわが家は食べて行けるって考えているのよ。でも、自分は働かずにおかあちゃんだけに働かせようなんて、ずるいわよね、全く」

「は〜い、質問！」

「はい、どうぞぉ、ミコさん」

「それでは、おかあちゃんだけの稼ぎでわが家は今まで通りの生活がしていけるんでしょうか。御馳走の時いつもおとうちゃんは、こうして美味しいものが食べられるのも、おかあちゃんとおとうちゃんと二人で稼いでいるからだって言っているのですが」

折に触れて子供に共稼ぎの長所を説いてきた道也の教育的態度がここで裏目に出た。

「は〜い、なかなか鋭い質問ですね。それでは今度は絶対おとうちゃん自身に答えてもらいましょう。おとうちゃん、どうぞぉ」

「……それは確かに全く今まで通りというわけにはいかないもしれない。多少は苦しくなることを我慢してもらうことになるだろうけれど……」

「は〜い、質問！」

「はい、どうぞぉ、ミコさん」

「苦しくなるって、どのくらい苦しくなるんですか」

ミコの質問攻勢は止まなかった。

「どのくらいって、……例えば、食事を外に食べに行くなんてことは、今までだってそんな

にはしてこなかったが、そうは出来なくなるかもしれない」
「えっえ〜！　それは大変だあ。これ以上減ったら零じゃん。そんなのいやだあ」
　レオが口を挟んできた。
「いや、その代わり、家で手をかけた料理を作ってあげるさ。共稼ぎの今まではどうしたって時間に追われて簡単に作れるものしか作っていなかったが、その気になれば、手の込んだ料理だって作れるんだから。天麩羅・フライなんて得意だし、にぎり鮨だってお手のものだ。餃子も焼売も手作りのものは出来合いのものと違ってまた味が格別だぞ。西洋料理にはちょっと自信がないけれど、和風・中華風ならば自信がある。西洋料理だって、その気になって習えばすぐ出来る」
　道也はようやく勢いを盛り返した。
「しっ、しらなかった、おとっつあんが鮨をにぎれるなんて。天麩羅・フライなんかも得意だなんて。今度食べさしてよ」
　レオは食物に釣られやすかった。

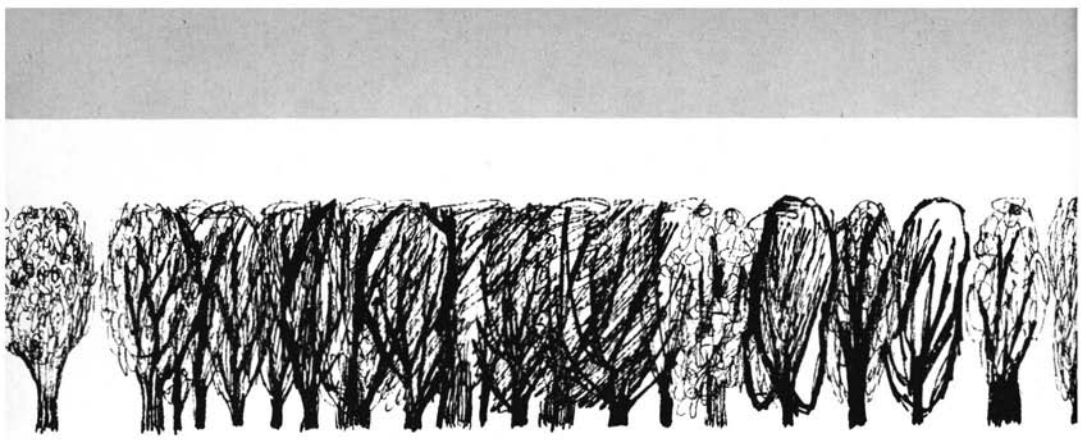
25

「そんな甘いことを並べ立てて、毎日そんな御馳走を作って、やっていけるんですか。わたしの稼ぎだけではやっていけるはずがないでしょう」
　怜子が水をさした。
「いや、まあ、外に食べに行く代わりにと言っただけで、毎日こうだというわけではむろんない」
「なんだあ、がっかり」
「は〜い、質問！」
「はい、どうぞぉ、ミコさん」

「おとうちゃんは、エスカルゴは作れるんでしょうね。これは絶対食べたいんだから」
「そうそう、エスカルゴが出ないようでは御馳走とは言えん」
レオが妹に同調した。この兄妹は、親が気持ち悪がって食べないこの西洋蝸牛料理を、それを献立としておいてある店に入った時には、特に好んで注文したがる癖があった。
「エスカルゴはちょっとな、調理したことがない。まあ、やって出来なくはないだろうが、そもそも日本では家庭料理になっていないから、材料が手に入らない。これだけは駄目だ。頑張り様がない」
「なんだあ、がっかり」
「がっかり、がっかり、それでは、レストランの食事の代わりにならないわ」
西洋蝸牛という思わぬ伏兵に出合って、子供に対する道也の説得工作は頓挫した。
「それでは、決を採りま〜す。おとうちゃんが教師をやめることに賛成の人？」
「し〜ん」
「はい、零ですねえ」
道也はまさか娘の採決行為に乗るわけにはいかなかった。
「それでは、おとうちゃんが教師をやめることに反対の人？」
「は〜い」
「は〜い」
「は〜い」
「三対零ですね、反対に決定！」
採決を強行すると、ミコとレオは隣の部屋に引き揚げて、テレビの観客に戻った。

26

「これで決まりね。残念でしょうが、諦めなさい」



娘の強行採決の効力を追認するかのように、怜子は言った。

「……」

無言の道也は未だ諦め切れないような顔をみせた。

「ミチは、また漱石病に罹ったんでしょう。そのせいよ。漱石はミチの体に悪いからやめなさいって言っているのに、それを無視して、最近また読み出しているようじゃないの。漱石は本当に毒だから」

「そんなんじゃあない」

道也は語気を強めて反発した。

「いいえ、そうよ、きっとそうに決まっているんだから。定職を放り投げてぶらぶら暮らしていたいなんて、漱石作品の主人公にそっくりじゃあないの？　漱石自身からしてそうじゃない」

「阿呆か！　俺はそんな小説にかぶれて軽挙するほどの軽薄者と違う。よしてくれ。もっときちんと真面目に考えているんだから」

「それはきちんと真面目に考えているんでしょうよ。そこが漱石病だと言うんだわよ。漱石って鬱陶しくなるくらい真面目に考えているところがあるでしょう。その鬱陶しさって伝染るものよ」

「そんな、気分が伝染するものか。」

「伝染するわよ。何を言っているのよ、伝染するから小説って価値があるんじゃないの。漱石の小説の伝染性って結構強いんじゃない？　特にミチには強いんじゃない？　だいたい漱石の神経衰弱って鬱病だったっていう説があるくらいじゃないの。ミチも鬱持ちでしょう。今度もきっとそれよ。今度の鬱病、きっと漱石から伝染ったのよ」

「俺はいま鬱になんかなっていないし、第一、鬱病が伝染するなんて話、聞いたことがない。他人に聞かれたら、笑われる。そんな珍説、やめてくれ。恥ずかしい」

「あら、わたし、もう生徒の前で何回もこの話、話したわよ。でも、一回だって笑われなか

ったわ。それどころか、みんな、なるほど、知らなかった、そんなものかっていう顔で、感心したふうに聞いていたんだから。珍説でも何でもないわよ」

「……」

27

怜子は国語教師としてなにかにつけて一家言があった。そのくせ、自ら黒板に記す漢字の誤記などには全く無頓着なところがあった。生徒から漢字の誤記の指摘を受けると、自分は国語教師であって漢字教師ではないという表現で、怜子はこの無頓着を正当化するのが常で、この正当化も数ある彼女の一家言のうちの一つといってよかった。怜子のこうした一家言ある態度は、夫の道也に対してはよりはっきりと出た。

―つづく―

（え・鳥居禎子）

母と子

10月号　定価三五〇円・〒四六円

PTAはこんなことができる

今月の視点

- こんな風な活動でありたい　平良　玲子
- 父母と教職員の共同　豊田　保
- 実践とそれを妨げる壁　唐松　義貞
- 学校五日制をきっかけに　沢居　紀充

不思議なPTA

「母と子」'92・9月臨増　定価一〇三〇円・〒五六円

■PTAへの望み　青木一・永畑道子・山住正己
■不思議なPTAの物語（七話）　後藤重三郎
■ある小学校PTAの一年　荻上栄子・沼田仁子
■PTAの民主化とは　宮坂広作・平湯一仁・芝実生子
■PTAに関するQ&A　徳永孝一・西村文夫・井上文雄・他

好評発売中！

子どもの本っておもしろい

「母と子」'92・2月臨増・定価一〇三〇円・〒五六円

父母からの問いかけ

学校・教師と共に考えたい疑問や悩み

「母と子」'91・9月臨増　定価一〇三〇円・〒五六円

子どもと読む子どもの権利条約

「母と子」'91・1月臨増　定価一〇三〇円・〒五六円

〒203　東久留米市中央町五-四-八
電話　〇四二四（七四）九一二五

母と子社

女たちの情報紙

ふえみん

femin

さべつ・おんな・はたらく・がっこう
アジア・たべもの・せっけん・げんぱつ

婦人民主新聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先　婦人民主クラブ　週刊1ヵ月　650円（送料込）。

東京都渋谷区神宮前3-31-18　電話03(3402)3244、3238

大阪市北区中崎西3-1-5　電話06(371)2429

わいわいがやがや

年齢不問

埼玉県草加市●片山寿美子（66歳）

最近ある事情があってパートに出始めたころ、ふと新聞で「ファッションモデル募集、年齢不問」という広告が目に入った。

年齢不問が気に入った。テレビでおじいちゃんとおばあちゃんがぎこちない言葉やしぐさでCMに出ているのを見かける。あの程度ならこの私だって、とばかりだめでもともと、ちょっと面白そうだと早速気に入りの全身写真と趣味などを書いたものを送った。

一カ月、二カ月たってもなしのつぶて、何だ冷やかしだったのか、写真と住所を悪用されないかぎり、同封した七十二円の切手代では特に損害を被ったわけでもないのでそのままにしていた。

それが突然第一次合格通知とやらが舞い込んだ。×月×日面接とのこと、ハハア、これは面接でだめだな、と思った。何しろ送った写真は実物より大分よく撮れていたから。私に自慢するところがあるとしたら、年齢の割にはどうにか見られるプロポーションだけで、顔のほうはまったく自信なし。よしこれもお遊びなり、と当日指定の場所へ出かけた。

二、三日後、電話で結果の問い合わせをすると、何と「ハイ、合格しております」という返事だった。そんなわけで「ジャパン・ファッションモデル・センター」なるものに一万何がしの登録料を払い込んだ。センター指定の写真屋で全身と顔の写真を撮り、スポンサーからの仕事を待つ身となったのだが、困ったのは首だ。首の骨の変形がもとで自由に回らないのである。横を向くのも上半身全部を動かさなくてはならない。これではCMなんてとても無理だ。でも何とかなるだろうと思っていたら、いよいよ第一回目の仕事が入った。

資生堂の美容師のたまごの実験台になるメイキャップ・モデルであった。ああ、これなら首が回らなくても何とかなりそうだ。

メイクモデルの仕事は二時間ほどで無事に済んだ。こんな仕事ならいつでもOKだ。報酬は三千円、思いっ切り愛想を振りまいて帰ってきた。

二度目の仕事は、コマーシャルであった。女優さんの背景で、その他大勢の出演者になるのだ。これは大変、その通知をもらった日から毎日鏡の前で首の運動だ。約束の日が近づく、首はまだ自由にならない。

日が迫ったころ、センターから電話がかかってきた。

「共演の女優さんが盲腸で入院しましたので日延べになりました」

ああよかった！　その日から

私のリハビリはより熱心になった。

今では私の首は自由に回る。

カルチャーショック

横浜市鶴見区●清水宏子（37歳）

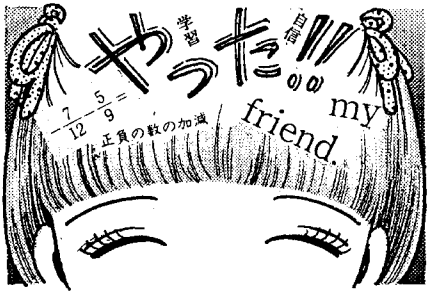
共働きの我が家、四年生の長女が「学童保育よりお友達と塾へ行きたい」と言い出し、ついに学習塾へ行くことになった。

説明会へ行って驚いた。そこはクラスのみならず席次も成績順。〝塾も文化の一つです〟と言い切る経営者が、「何か質問は？」と、父母に聞いたところ、「子供が熱を出して休んだとき、代わりに親が授業に出てもよいでしょうか？」

ここまでは（へェ～すごい）と感心?!しつつ、次の「その場合の席は、子供の席でよいのか？」には閉口……。（こんなこと、常識で考えても他の子供のじゃまにならないよう、一番後ろに座ればいいのに。それに子供のそばで看病していたほうが早く治るような気もするんだけど……）熱心というか何というか。

今まで体を動かす習いごとはしていたが、頭を動かす公文、そろばん何一つしていなかった我が家、はたしてこの集団に親も子もいつまでついていけるだろうと、まだ始まったばかりなのにちょっぴり不安に。かといって塾を否定するほどの実力も能力も勇気もまだ備わっておらず……。

『男性も育児の苦労や楽しみを味わうことは円満な家庭を築くのに必要』と、日ごろから積極的に何でも手伝ってくれる夫に、この日の一こまを話すと、「受験のための教育に凝り固まらずに、家庭科学や育児学を幼児期から高校・大学に至るまで一貫して男女共に学べる教育制度があったら、男も女もゆとり



自然食通信53

元祖エコロジスト・百姓から言わせてもらえば

■隔月刊（奇数月下旬発売）
定価五七〇円

文字通り自然のたなごころの中で生産と暮しをいとなんできた農業者、また都市から田舎へ、消費するだけの暮しへの異和感、生命への危機意識から、自然とともに生産する側へ生き方を転じた人たちから届けられたメッセージと、都市にも流通にもこびないしたたかな戦略。　七月二十五日発売

写真集　定価2266円　発売中

せんせいはほほーっと宙に舞った

宮澤賢治の教え子たち

撮影・塩原日出夫　文・鳥山敏子

自然食通信社
東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857　振替・東京5-78026

ある幅広い人生を経験できるのになあ。子供に投資する金額と同じだけ、自分たちにも投資して成長したいね」と一言。

お手伝いとよかった探しが得意、学力はいまいち?!だが生きる力は充分な我が娘。下のほうのクラスにもかかわらず、親の心配をよそに、今日も友達数人と遊びに行くかのように張り切って出かけていく。

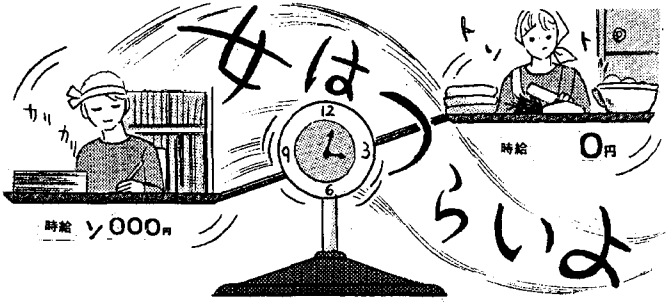
塾が文化の一つなら、ちょっとしたカルチャーショックが始まった我が家なのである。

家事について新米主婦が思うこと

千葉県市川市●船矢佳子（26歳）

結婚して一年に満たない新米主婦の私である。仕事はフリーライター。子供はいない。

結婚して最初に思ったことは、「家事って大変」の一言につきる。二人で分担しているが、それでも妻のほうが責任者になってやらざるを得ないし、ほとんど家事をやってこなかった私にとって、それはかなりシンドイものであった。



何が一番きついといえば家事には休みがないこと。例えば食事の支度である。別に料理は嫌いではないし、独身時代も適当につくってはいたが、しょせんは自分勝手にやっていたにすぎない。他人の予定に合わせて食事を用意する主婦の家事とは別の次元だった。

毎日、毎日、朝が終わったら昼、昼が終わったら夜と料理に追い回されて、気が狂いそうである。昼は私一人なので、食べないですますこともあったくらいだ。おなかはすいているのだが、一日中料理ばかりやっていられない、という気持ちからだ。

もう一つ、家事を始めて気が付いたのはタダであるという点。これだけの労働をしていながら一銭ももらえないのが家事なのである。私などフリーライターだから、仕事をしないとお金がもらえない。家事のために仕事を減らさざるを得ず、その結果収入が少なくなってしまったなんて、ショック以外何ものでもない。

家事は立派な専門職だ。仕事だったら休みがあって当然だろう。今時どんな3K職種だって休みがない仕事があるだろうか。しかもタダ働きで。同じことをお手伝いさんでも雇ってやってもらったら、幾らだと思っているのだろうか。本来無料奉仕は強制されるものではない。でも、家事は半ば強制的だ。結婚した女性はだれでもやらなくてはならないのだから。

食べさせてもらう必要もないのに、わざわざ自分のキャリアを削ってまでこんな条件の悪い仕事をする家事って女性にとって何なのだろう。

（え・梅村　苺）

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二三九号の特集テーマは、「早期教育やってみたらば」です。

最近教育熱は、ますます低年齢化していて、五、六歳児のおけいこごとはもちろん、二歳の子供に字を教え込んだりする塾も出現しています。とんでもないことと思いながら、いざ自分の子となると、みんながやっているのなら、やらせるべきではないのか……と迷うのも親心。

しかし例えば、字を教えるのが早ければ早いほど、その子の知能は最終的に伸びるのか。昔はおけいこごとは、六つの六月に始めると言ったものですが、最近のこの風潮は何か空恐ろしい気がします。

そこでみなさんの中で、実際に我が子に知的な早期教育を与えてごらんになった経験のおありの方から、リポートをいただきたいのです。何を、どう教え、長い目で見てその結果は、どうであったのか。体験の中からどうぞお声を寄せてください。四百字詰原稿用紙十枚前後。

●ワンポイント情報

「私の（または我が家の）コンパニオン・アニマル」です。家庭で飼っている動物を普通ペットといいますが、戦争以前の日本ではペットという言葉もなかったのです。犬は泥棒の用心のため、猫はネズミを捕らせるために飼ったので、二次的にペットになっていたにすぎません。

日本の伝統はそんなことですが、イギリス人などは犬を友達扱いするそうです。イギリス人は幽霊になって出るときにも、犬を連れて出るというくらい。電車やバスにも連れて乗ることが許されています。

最近日本にもこういう考え方が、動物愛護の運動とともに入ってきて、ペットを人生の伴侶（コンパニオン・アニマル）と呼ぶ風潮が現われたようです。

悲しさ寂しさなどを慰めてくれた。家族の絆を強めてくれた。日々の生活を楽しくし、心を豊かにしてくれた。あのとき、うちのペットはコンパニオンだった！　または、今まさにそうだ！という体験をお寄せください。四百字詰二枚程度。締め切りはどちらも十月二十五日。

＜氏名、住所を秘密にしたい方＞

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合せがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合せには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

＜仕事をしたい方へ＞

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事がしたいですか）というアンケートを、お送りしたことがありました。その後の新会員、以前と状況が変って、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

わいふ投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

エッセイスト・クラブ
(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

ズバリ一言
(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービスその他、目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

奥さんから外さんへ
(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetcをお書きください。

マイ・ジョブ／マイ・プロフェッション
(一六〇〇字まで)

あなたのしていらっしゃるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

サーブレシーブ
(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

人間マンダラ
(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

親の言い分・教師の言い分
(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かっては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的にお書きください。

フリースペース
(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

読んでみました
(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

情報コーナー
(三〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交

換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

サークルだより（八〇〇字まで）

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたい、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号まわしとなります。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思います。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

コラム以外の投稿募集

特集テーマ原稿

「次号投稿募集」をごらん下さい。

ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定しますので、募集欄をごらんください。

特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適当と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミック

も募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇（ぺん）に限ります。

ただし次のコラムへのご投稿とはだぶってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレシーブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮ください（書き直すことになるので）。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●すさまじい暑さにもかかわらず、二三八号は投稿の洪水。特に給食の特集にはたくさんのご投稿をいただきました。ただし給食を強制されることによって苦痛を味わったというものが多く、そのせいで内容のダブりが目立ちましたので、特徴のある部分を生かして原稿を大幅に削らしていただいたものもあります。申し訳ないことですがあしからずご了承ください。

●というわけでスペース不足が甚だしく、今回文章講座は休載させていただきました。

●二三七号のグラビア四ページ目の写真のキャプション、上下が入れ違っておりました。おわびいたします。

●編集部では偶数月のはじめに、「わいふ」を一斉発送するのですが、年々作業が大変になり、手不足をかこっています。時々なら手伝ってもいい、とお思いの方、ぜひお声をかけてください。交通費程度のお礼しか出ませんので申し訳ありませんが、どうぞよろしく。

●「わいふ」の事務簡素化のため、コンピュータ化を考えています。パソコンができる方で比較的近くに住んでいらっしゃる方、事務局を週二、三回手伝っていただけないでしょうか。勤務条件はお話し合いのうえで。お電話ください。

●子育ての座談会は今回で終わり、次回から「女の時事放談」として座談会をすることにいたしました。次回のテーマは「これからの老後」、十月二十日（火）二時より編集部で。出席ご希望の方は十六日までにお電話ください。

●先日編集部に地域の郵便局がやってきて、十一月から小包郵便物の送料が上がるという寝耳に水の知らせ。現在一冊あたり二百十円の送料が二百四十円になるというので真っ青になっています。国民の声もろくに聞かず、一方的な通告、やりきれません。

ともかく誌代に比して郵送料の負担が大きすぎるので、月刊にすることも含めてどうしたらよいのか、現在討議中です。

●FAXで原稿を送ってくださる方が時々いらっしゃいますが、整理がしづらく、判読困難な字もありますので、FAX送稿はご遠慮ください。どうぞよろしく。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

わいふNO.238.

（隔月刊）

1992年11月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円（本体447円）

（年間購読料送料共4020円）

印刷・平河工業社

発行所・（株）グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2－5－23

〒162 TEL（03）3260－4771・4773

郵便振替 東京 5－110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出下さい。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。

10月新刊発売

わが子に英語を教えてみたら

―英語講師の「早期教育」体験―

平尾桂子／著

あなたも小さなわが子に〝英語教育〟をと考えていませんか？上智大学講師の著者が、自らの体験からみた「早期教育」への疑問（子どもの立場から）。早期教育産業にあおられる社会風潮を考える。

A5判 定価1500円

いま考える学校給食

なぜ！埼玉・庄和町突然の「廃止宣言」！

庄和町から起った突然の給食論議。子どもと教育にとって給食とは何か？その目的と役割、歴史。食文化との関わりなど、あらためて学校給食を問う。

新村洋史／著 A5判 定価1000円

好評発売中

親子で挑戦！算数11点アップ作戦

小宮山博仁／著

子どもの弱点をズバリ診断・克服。必ず親子で

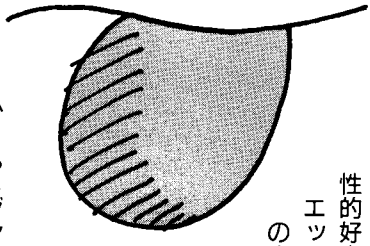
〈低学年編〉〈高学年編〉定価各1300円

〒113 東京都文京区本郷1－26－10 汐文社 TEL.03(3815)8421 FAX.03(3815)8424

Libertà media series 6

エッチ・ジャーナリズム

衿野未矢（えりの みや）著 定価1545円



おじさん系週刊誌やスポーツ紙を通じて巷にあふれるエッチ情報。ひたすら男の性的好奇心に訴えるエッチなメディアの生態を女の眼で徹底観察。紋切り型の言語感覚、歪められた女性像等を克明に分析しながらかくもメジャーな時代状況に果敢にチャレンジする。

◉メディア・シリーズの好評既刊本

1 暗闇のTVグラフィティ 1648円
2 CM業界・ひと模様 1442円
3 これでいいのか天皇報道 1442円
4 マンハッタン・TVのぞき窓 1560円
5 若者とメディア 1545円

東京都千代田区神田神保町1-30
TEL.(3293)2923 FAX.(3293)3723
振替東京8-14083
リベルタ出版

わいふ 二三八号　一九九二年十一月一日発行（隔月刊）

株式会社 ミネルヴァ書房
〒607　京都市山科区日ノ岡堤谷町1
☎(075)581-5191　振替京都 2-8076

これで安心！老後の暮らし

老人ホーム・老人病院・在宅介護

全ガイド

●老後の自立のために、また自立生活が困難になったときのために、在宅福祉サービス・老人ホーム・老人病院の三つの情報を具体的に分かりやすく提供。

●民間の有料老人ホーム92施設のデータをはじめ、老人ホーム・老人病院の全国リストのほか、在宅福祉サービスの一覧を掲載。また、訪問記やインタビューなど生の声も満載。

目次

I 民間経営の老人ホーム
1 有料老人ホーム（都道府県別）……92施設
2 系列経営の有料老人ホーム
3 厚生年金有料老人ホーム・生命保険年金ホーム・簡易保険加入者ホーム
II 公立・福祉の老人ホーム
4 軽費老人ホーム
5 養護老人ホーム
6 特別養護老人ホーム
III 老人病院・在宅福祉サービス
7 老人病院
8 在宅福祉サービス

わいふ編集部編
A5判・美装カバー・550頁
定価2,500円

老いの青い鳥を求めて

樋口恵子監修　高齢化社会をよくする女性の会編　第10回女性による高齢化社会シンポジウムの記録　女性議員へのアンケートから〝日本の老い〟の姿を見つめ直し、老いを支える最前線で働く人々の声を混じえて現状を浮き彫りにするなど、刺激的な情報を満載。　一七〇〇円

春の歌うたえば

神田ふみよ編集代表／全国養護問題研究会編●養護施設からの旅立ち　過去のことは忘れたいけど忘れられずにいました――子ども時代を養護施設で過ごした21人が、いま勇気をもって綴るそれぞれの人生模様。　一六〇〇円

●目次――
1 社会に巣立つ
2 ハードルを越えて
3 働くこと愛すること
4 戦後を生きる
5 手記を読んで

欧米女性のライフサイクルとパートタイム

三富紀敬著

パートタイム史を女性のライフサイクルの変化とのかかわりにおいて実証的に分析。三ヵ国の膨大な資料を吟味し、通説としてのパートタイム論に一石を投じる。　五五〇〇円

定価　四六〇円（本体四四七円）

雑誌 09859-11